福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群1

—第２次調査の報告 —

２００２

福岡市教育委員会

・3ページ Fig.1　入海のトーン(網掛け)範囲の訂正

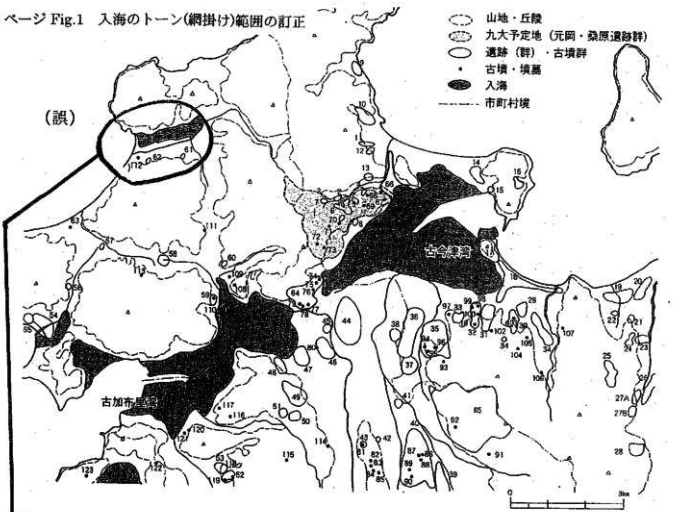
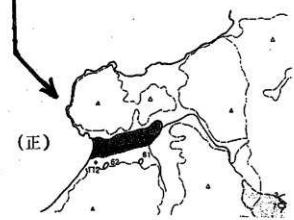


Fig. 1　元岡・桑原遺跡群と周辺の主要遺跡（S=1/100,000）



・88ページ訂正と追加（最下行）

うである。ⅡC期でも主体はむしろA系統（在来系）であり、ⅢA期古相にやっとD系統が主体となるがA系統も残る。次にⅢA期古相の土器として4区SX4011のB群があり、ⅢA期新相の土器群としてSX4011の資料の大部分がある。ⅢA期の新古は、甕Dの口縁部などの微妙な変遷、小型精製器種の精粗の比率の差、さらにX形小型器台の型式や高坏Dの接合法の種類の変化により分けられる（Fig.111）。参考としてⅢA期新相の他の例を掲載した（Fig.112～113）。X形器台Ⅲ・Ⅳ式、甕Dの口長3.5cm以上の主体化高坏接合法A2, A3, B1, B3, C3の増加、小型丸底壺①g、粗雑なIe、Ifの増加が指標である。

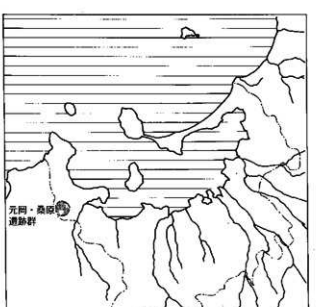
－88－　I　Ie・If　（分類は久住1999前掲参照）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群1

—第２次調査の報告 —



遺跡略号 MOT 2
遺跡調査番号 9659

2002

福岡市教育委員会

序

福岡市は、大陸に近いと言う地理的条件から、外来文化の流入の窓口、大陸との貿易拠点として古くからの歴史を有しています。現在も歴史的、地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」として、アジアの様々な地域との交流や学術・文化などの交流を行っています。

現在、九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、本市の多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

本書は九州大学統合移転に伴い、1996年度に行われた元岡・桑原遺跡群第２次調査の成果を報告するものであります。第２次調査においては、旧石器時代から平安時代までの遺構と遺物が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。とりわけ、縄文時代の貯蔵穴の検出や古墳時代の朝鮮半島系土器の出土は注目されるところであります。本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、また学術研究の資料として活用していただければ幸いです。

最後に、調査を委託された福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学および都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区、桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成14年３月29日
福岡市教育委員会
教育長　生　田　征　生

例　言

1. 本書は、九州大学統合移転に伴い、福岡市教育委員会が1996年度に行った元岡・桑原遺跡群第２次調査の報告書である。調査概要を除く本報告としては本書が最初であるので、書名を『元岡・桑原遺跡群１』とした。元岡・桑原遺跡群は遺跡略号をMOTとし、確認調査を１次調査とし、以後、調査順に次数を付している。なお、石ヶ元古墳群についてはこれらに含めず、KIMの略号となっている。なお、第２次調査開始時は遺跡調査名称として九州大学移転予定地の地区区分から「元岡Ｃ－１区」と仮称し、調査途中より字名から「桑原柚ヶ元遺跡」としたが、その後の遺跡名称の整理・見直しによって「元岡・桑原遺跡群第２次調査」とした。したがって、調査時の記録類などには当初の遺跡調査名称が書かれているものがあるが、以後、本報告の名称をもって正とする。
2. 遺構の呼称については、一部混乱があったので調査時の名称を整理・変更して報告している。Tab.１を参照されたい。なお、SBは掘立柱建物、SDは溝状遺構、SEは井戸、SKは土坑、SPは柱穴、SXは不明遺構・遺物包含層、SSは水田址をそれぞれあらわす略記号である。
3. 本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものであるが、国土座標軸との関係については、Fig.3を参照されたい。レベルについては、九州大学移転予定地内に設置された測量基準杭から移動したものである。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、池崎譲二、八丁由香、大庶あずさ、鐘ヶ江賢二、中園聡、藤原由博が実測、作成した。遺物実測図は、久住、池田佑司、吉留秀敏、上方高弘、鐘ヶ江賢二、西堂将夫、榊原俊行、植木雅博が作成した。製図は、成清直子、廣田容子、上方、鐘ヶ江が行った。また、現場写真は久住が撮影し、遺物写真は久住および一部を上方が撮影した。なお、Fig.112～113の遺物実測図作成には坂田邦彦、長直信、西堂将夫のご協力を得た。記して感謝申し上げる。
5. 本書の編集は久住猛雄が行った。執筆は、縄文時代の遺物については池田佑司が、旧石器時代の遺物については吉留秀敏が行った。自然科学分析の報告はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。これら以外の原稿については久住が執筆した。
6. 本調査に関わる記録類（図面・写真等）と出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。資料が広く活用されることを望みたい。
7. 裏表紙写真は、２次調査３区西半SX3041a～e区上層土器出土状況である。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに
1. 調査に至る経緯……1
2. 調査の組織……1
3. 遺跡の地理的歴史的環境……2
Ⅱ　調査の記録
1. 調査の経過……6
2. 調査の概要……8
3. 遺構の調査報告……9
1）1区の調査……9
2）2区の調査……11
3）3区の調査……17
4）4区の調査……23
5）5区の調査……25
6）6区の調査……25
7）7区の調査……26
4. 出土遺物の報告……29
1）土器(弥生時代以降の土器・陶磁器)…29
2）製鉄関係遺物……69
3）縄文時代の遺物……70
4）旧石器時代の遺物……81
5）その他の遺物……87
Ⅲ　調査のまとめ
1. 第2次調査地点における遺構の変遷……88
2. 出土土器の位置付けについて……88
Ⅳ　自然科学分析報告
(パリノ・サーヴェイ株式会社)……89

挿 図・表 目 次

Fig. 1　元岡・桑原遺跡群と周辺の主要遺跡 …3
Fig. 2　元岡・桑原遺跡群分布図 ……4
Fig. 3　第2次調査全体図 ……6
tab. 1　遺構対照表 ……7
Fig. 4　1区遺構平面図 ……7
Fig. 5　SE1001実測図 ……8
Fig. 6　1区土層E ……8
Fig. 7　2区全体図 ……9
Fig. 8　2区東半水田平面図・断面図 ……9
Fig. 9　2区土層G ……10
Fig. 10　2区上層1 ……10
Fig. 11　2区土層L ……10
Fig. 12　2区南壁上層 ……10
Fig. 13　2区西半平面図(SX01・SD2001他)…10
Fig. 14　2区SX01平面図・断面図 ……11
Fig. 15　2区SX01土層1 ……12
Fig. 16　2区SX01上層2 ……12
Fig. 17　2区SD2001－IX区南土層 ……12
Fig. 18　2区SD2001－IX区北土層 ……12
Fig. 19　2区SP2101土層図・ガラス玉出土状況図 …13
Fig. 20　2区SX01遺物分布図 ……13
Fig. 21　2区SB01 ……14
Fig. 22　2区SB02 ……14
Fig. 23　2区SB03 ……14
Fig. 24　2区SB04 ……14
Fig. 25　2区SB05 ……15
Fig. 26　2区SB06 ……15
Fig. 27　3区全体図 ……15
Fig. 28　3区東半全体図 ……16
Fig. 29　3区東半F_2－F_1断面図 ……16
Fig. 30　3区東半SD3107・西壁包含層土層図 …17
Fig. 31　SK3026平面図・土層図 ……17
Fig. 32　SK3025平面図・断面図 ……17
Fig. 33　3区西半全体図 ……18
Fig. 34　SX3041グリッド図 ……18
Fig. 35　SX3041他Cベルト上層 ……19
Fig. 36　SX3041Aベルト土層 ……19
Fig. 37　SX3041下層縄文時代遺物出土状況 …20
Fig. 38　SX3032平面図・断面図 ……20
Fig. 39　SX3035平面図・断面図 ……20
Fig. 40　SD3036Bベルト土層 ……20
Fig. 41　SD3036土層 ……20
Fig. 42　SX4011区割り図 ……21
Fig. 43　4区SD4101・4102平面図 ……21
Fig. 44　SX4011平面図(出土状況分布図) …22
Fig. 45　SX4011調査区中央ベルト西側 ……22
Fig. 46　SX4011調査区南壁西側土層 ……22
Fig. 47　SX4011調査区北壁西側土層 ……22

Fig. 48　SX4011 A群遺物出土状況平面図 …23
Fig. 49　5区全体図 …23
Fig. 50　5区土層 3 …24
Fig. 51　5区土層 4 …24
Fig. 52　5区土層 2 …24
Fig. 53　6区全体図 …24
Fig. 54　SX6101平面図・断面図 …25
Fig. 55　6区土層 5 …25
Fig. 56　6区土層 1 …25
Fig. 57　7区全体図 …26
Fig. 58　7区遺物分布図 …27
Fig. 59　7区南壁土層 …27
Fig. 60　SK7001平面図・断面図 …28
Fig. 61　SK7002平面図・断面図 …28
Fig. 62　7区中央東西土層 …28
Fig. 63　7区北壁土層 …29
Fig. 64　1・2区出土土器 (1) …31
Fig. 65　1・2区出土土器 (2) …31
Fig. 66　2区SX01出土土器 (1) …32
Fig. 67　2区SX01出土土器 (2)・SD2001出土土器 …33
Fig. 68　3区SX3041出土土器 (1) …35
Fig. 69　3区SX3041出土土器 (2) …36
Fig. 70　3区SX3041出土土器 (3) …38
Fig. 71　3区SX3041出土土器 (4) …40
Fig. 72　3区SX3041出土土器 (5) …41
Fig. 73　3区SX3041出土土器 (6) …43
Fig. 74　3区SX3041出土土器 (7) …44
Fig. 75　3区SX3041出土土器 (8) …45
Fig. 76　3区SX3041出土土器 (9) …46
Fig. 77　3区SX3041出土土器 (10) …48
Fig. 78　3区SX3041出土土器 (11) …49
Fig. 79　3区SX3041出土土器 (12) …50
Fig. 80　3区SX3041出土土器 (13) …51
Fig. 81　3区出土土器 (1) …52
Fig. 82　3区出土土器 (2) …54
Fig. 83　3区出土土器 (3) …55
Fig. 84　3区出土土器 (4) …56
Fig. 85　4区SX4011出土土器 (1) …58
Fig. 86　4区SX4011出土土器 (2) …59
Fig. 87　4区SX4011出土土器 (3) …61
Fig. 88　4区SX4011出土土器 (4) …63
Fig. 89　4区SX4011出土土器 (5) …64
Fig. 90　5・6・7区出土土器 (1) …65
Fig. 91　5・6区出土土器 (2) …66
Fig. 92　7区出土土器 (2) …67
Fig. 93　元岡・桑原2次出土製鉄関係遺物 (1) …68
Fig. 94　元岡・桑原2次出土製鉄関係遺物 (2) …69
Fig. 95　1・2区出土石器 …70
Fig. 96　2区出土縄文土器 (1) …71
Fig. 97　2区出土縄文土器 (2) …72
Fig. 98　2区出土石器 (1) …73
Fig. 99　2区出土石器 (2) …74
Fig. 100　3区出土縄文土器 (1) …75
Fig. 101　3区出土縄文土器 (2) …77
Fig. 102　3区出土石器 …78
Fig. 103　4～6区出土縄文土器・石器 …79
Fig. 104　7区出土縄文土器 (1) …80
Fig. 105　7区出土縄文土器 (2) …81
Fig. 106　7区出土石器 …82
tab. 2　元岡・桑原2次調査出土石器一覧表 …83
Fig. 107　元岡・桑原2次調査出土旧石器資料 …84
Fig. 108　3区SX3041下層出土木板 …85
Fig. 109　2区SP2101出土ガラス小玉 …85
Fig. 110　土器実測図 (補遺) …86
Fig. 111　ⅢA期前後の高坏・小型器台分類 …87
Fig. 112　SX4011と同時期の土器群 (1) …87
Fig. 113　SX4011と同時期の土器群 (2) …88
(Ⅳ　自然科学分析報告)
表1　分析試料一覧 …89
表2　2次調査の花粉分析結果 …91
Fig. 114　2次調査の花粉化石群集層位分布 …92

図版・写真目次

写真1　花粉化石 …93
写真2　種実遺体 …94
図版1～12　遺構写真 …95～106
図版12～24　出土遺物写真 …106～118

I　はじめに

1. 調査に至る経緯

九州大学統合移転予定地として西区元岡・桑原地区が選定されたことにより、開発に先立ち同地区の埋蔵文化財の分布状況を調査する必要が生じた。福岡市教育委員会では、1995（平成７）年２月15日から同年12月31日にかけて対象地をくまなく踏査し、古墳、山城、埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行った。なお、平成７年度より九州大学統合移転にかかわる埋蔵文化財調査を主な対象として、大規模事業等担当課が設置された。1996（平成８）年３月11日から同年９月30日にかけて九州大学統合移転用地内の造成予定地を対象として、詳細な試掘調査（元岡・桑原遺跡群第１次調査とする）を行った（試掘調査の概要については、福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報１』を参照）。これらの事前調査の結果を受けて、移転予定地のうちＣ区の一部について（Fig. ２の「Ｃ－１区」）、造成工事の計画上、調整池を建設する当初の予定であったため、同地区を対象として最初の本調査を行うことになった。調査は1996（平成８）年11月11日に開始し、1997（平成９）年３月25日に終了した。

なお、整理作業は2000（平成12）年度から2001（平成13）年度にかけて行い、報告書を作成した。

2. 調査の組織

以下に調査の組織を記すが、調査年度（平成8年度）と整理年度（平成12・13年度）をそれぞれ記している。なお調査にあたっては、元岡・桑原地区の地元の方々や、多くの作業員の皆様のご協力を得た。記して感謝申しあげたい。

調査委託	福岡市土地開発公社		
調査主体	福岡市教育委員会		
（調査年度）	教育長	町田英俊	
（整理年度）	教育長	生田征生　西憲一郎（前任）	
調査総括			
（調査年度）		文化財部長	後藤　直
	大規模事業等担当	課　長	山崎純男
		主　査	池崎譲二
（整理年度）		文化財部長	柳田純孝
	大規模事業等担当	課　長	一宮忠司
		主　査	松村道博
調査担当	大規模事業等担当		
（調査年度）	小林義彦　久住猛雄（第２次調査担当）　松浦一之介		
整理・報告	久住猛雄（現・埋蔵文化財課）		
調査庶務			
（調査年度）	埋蔵文化財課	課　長	荒巻輝勝
		第一係長	横山邦継
		係　員（事務担当）	内野保基
（整理年度）	文化財整備課	課　長	上村忠明
		管理係長	市坪敏郎　井上和光（前任）
		管理係	中岳圭　岩屋淳美（前任）
調査調整	（調査年度）大学移転対策局		（整理年度）都市整備局大学移転対策部

3. 遺跡の位置と周辺の歴史的環境（Fig. 1）

元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯にある。丘陵は小河川により樹枝状に侵食された狭い谷が無数に入り込む。遺跡は丘陵上や、枝分かれした谷部に立地する。この地域はこれまで、都市化による開発の影響が少なく、調査例が少なかった。逆に言えば、後世の開発を免れたために、遺跡の残存状況が良好なものも少なくない。近年、圃場整備や道路拡幅、新西部埋立場の建設などによって事前の調査が行われ、遺跡の状況が判明しつつある。

縄文時代の遺跡では、福岡市では数少ない貝塚がある。桑原飛櫛貝塚は主に縄文時代後期の土器や石器、貝輪、骨製品、動植物遺存体等が多量に出土し、貝層中に６体の埋葬人骨があった。また同時期の貝塚遺跡として、県指定史跡の元岡瓜尾貝塚がある。大原D遺跡では、縄文時代の草創期から晩期にいたる遺物が出土した。特に、晩期の大量の遺物と、４次調査の草創期の焼失住居の検出が注目される。九大予定地内でも、３次調査で早期の遺構が検出されている。また古今津湾の南岸となる周船寺遺跡群では、縄文後期から晩期の土器・石器の出土が目立っている。

弥生時代では、この地域（福岡市西区西半から糸島郡）は魏志倭人伝の伊都国に比定される地域でもあり、重要な遺跡が分布している。元岡・桑原地区の周辺では、海岸部に今津貝塚等の貝塚があり、丘陵上では小藤遺跡がある。小藤遺跡は、中期後半から後期の多量の土器やこの地域特有の玄界灘式石錘などが出土している。外来系土器や鹿？を描いた絵画土器が注目される。今山遺跡は、玄武岩の露頭があり、原石の採取と石斧製作が行われた。大量の石斧の未製品が出土している。ここで作られた石斧は北部九州に広く運ばれている。また小規模ながら今津の香山遺跡でも石斧製作が行われている。唐泊沖合では広形銅矛が引き揚げられている。九大予定地内では、２次調査で前期から中期初頭、後期後半から終末の土器が出土しているほか、３次調査で中期後半の住居が数棟検出されている。なお当時は、縄文時代の海進以来古代まで、今津湾がかなり深く入り込み（古今津湾）、元岡・桑原地区は現状よりも海岸にかなり近い状態であったことが注意される。糸島半島の西側では加布里湾が同様に入り込み（古加布里湾）、古代の志摩郡と怡土郡は多くは入り海で隔てられ、狭い陸橋がその間にあったような状況である。その陸橋部分で、二つの入海の奥にあたる部分に志登遺跡群（直線的な条溝と掘立柱建物）、浦志遺跡群（小銅鐸を出土）のような弥生時代の拠点集落が立地する。これらは弥生時代中～後期を主体とするが、志登支石墓群は弥生前期の著明な墳墓遺跡である。また泊遺跡群には、大量の水銀朱を副葬した後期後半の甕棺墓があり（泊熊野遺跡）、次の御道具山古墳などの古墳前期の有力首長墓系列成立の前夜を思わせる。古今津湾の南東側対岸である今宿地区では、今宿五郎江遺跡は大量の土器を出土した製塩集落であり、小銅鐸が出土している。ここから西に日を転ずると、飯氏遺跡群は中期から後期の拠点集落と考えられ、飯氏馬場地区の後期の墓地では甕棺墓から後漢の内行花文鏡が出土した。周船寺遺跡群では弥生前期から中期の集落が広がっている。これの西に隣接する高田遺跡では、弥生前期の水田が検出されている。怡土平野の中央の三雲・井原遺跡群は、三雲南小路や井原鑓溝などの弥生時代の王墓があるばかりでなく、規模も80ha前後、中国とのつながりを示す楽浪系土器が多く出土するなど、「伊都国」の王都としての質と量を備えている。三雲遺跡群の西にある曽根丘陵には弥生終末期の王墓である平原遺跡がある。１号方形周溝墓からは超大型仿製鏡を含む計40面の鏡が出土した。平原５号墓も前漢鏡を複数有していたとみられ、三雲南小路１号甕棺→同２号甕棺→平原５号→井原鑓溝→平原１号というように、現状で５代の王墓の系譜が明らかになっており、「世々王有り」という倭人伝の記事を実証している。上鑵子遺跡では弥生時代の木製品が多数出土している。転じて志摩町方面に目を向けると、初川上流域には拠点集落として一ノ町遺跡があり、弥生中期後半から後期初頭の大型建物群が検出されている。また御床松原遺跡は糸島半島の西側の引津湾沿岸の砂丘上に立地

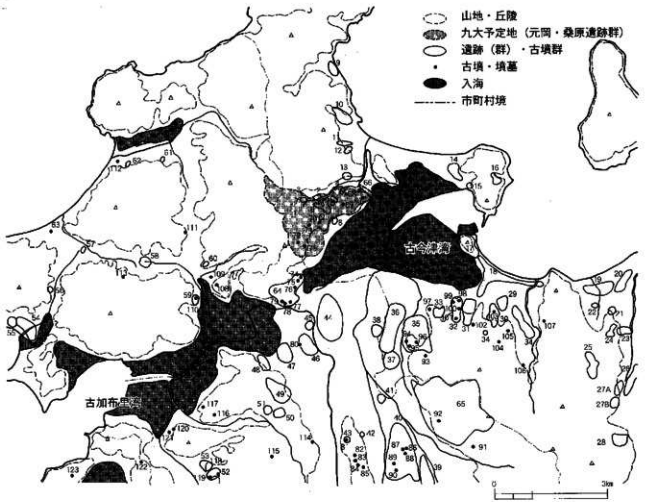


Fig. 1　元岡・桑原遺跡群と周辺の主要遺跡（S=1/100,000）

1. 九州大学箱崎キャンパス（元岡・桑原遺跡群）
2. 元岡・桑原遺跡群第2次調査地点（4箇所）
3. 同・第12次調査地点
4. 同・第14次調査地点
5. 同・第16次調査地点
6. 同・第17次調査地点
7. 桑原飯盛古墳群
8. 元岡瓜尾横穴
9. 小田遺跡
10. 大原D遺跡
11. 大原A遺跡
12. 大原B（小作）遺跡
13. 桑原飯盛貝塚
14. 今津A遺跡
15. 今津貝塚
16. 今津D古墳群
17. 今山遺跡
18. 今新遺跡群
19. 牛ノ松遺跡群
20. 下山門遺跡
21. 城の原横穴
22. 新宇宿貝塚住居址
23. 広岡遺跡
24. 苔の前遺跡・広石古墳群
25. 広石遺跡群・広石古墳群
26. 野方久保遺跡
27. 野方中原遺跡（A）・野方原口遺跡（B）
28. 赤松戸南古墳群
29. 赤松戸南B遺跡
30. 大塚遺跡
31. 女原遺跡
32. 姪浜貝塚群
33. 徳永A遺跡
34. 今宿青木遺跡
35. 飯氏遺跡群
36. 拇原・今宿遺跡
37. 「雀居」遺跡群
38. 高田遺跡群（以下・前原市）
39. 井原遺跡群
40. 「雀居」井原遺跡群
41. 井田・山ヒ支石墓群
42. 曽根石ケ崎支石墓群
43. 平原遺跡
44. 志登遺跡群
45. 志登支石墓群
46. 御道遺跡群
47. 新町遺跡群
48. 岡原（上町）遺跡
49. 権現遺跡群
50. 上鑵子遺跡
51. 伏龍遺跡
52. 東風支石墓群
53. 東ヵ丘B遺跡
54. 菊池原遺跡（以下・志摩町）
55. 新町遺跡
56. 八熊遺跡
57. 須恵遺跡
58. 一ノ町遺跡
59. 船原古墳群
60. 御床B遺跡群
61. 柿谷遺跡
62. 久米遺跡
63. 大牟田古墳
64. 浜遺跡群（前原市）
65. 徳上A遺跡
66. 雀居古墳（以下・福岡市）
67. 福岡内畑（方円）
68. 金武金城古墳（方円）
69. 石ケ原古墳（方円）
70. 元岡A　1号墳（方円）
71. 元岡B　1号墳（方円）
72. 神古墳（方円）
73. 元岡1　1号墳（方円）
74. 柏木原古墳（方円）（以下・西原町）
75. 幕屋地古墳（方円）
76. 石穴墳
77. 前畑町古墳
78. 新大1古墳
79. 武蔵野雷電塚（集大墓）
80. 飯神社古墳（方円）
81. 平松1号墓（弥生時代土墓）
82. 池山古墳（方円）
83. アレ塚古墳（方円）
84. 銭瓶塚古墳（方円）
85. 亀塚古墳
86. 二重茶内塚古墳（方円）
87. 福山古墳（方円）
88. 築山古墳（方円）
89. ・猿庵小路遺跡（弥生中期干墓）
90. 井堂越溝遺跡（弥生後期工墓）
91. 山犬ノ岡C－1墓（方円）
92. 東風東D1号墳（方円）
93. 飯氏B－11号墳（方円）
94. 飯氏越原古墳（方円）
95. 飯氏二塚古墳（方円）
96. 泉塚古墳（方円）
97. 九州山古墳（方円）
98. 山ノ神2号墳（方円）
99. 山ノ神1号墳（方円）
100. 若ノ浦宮古墳（方円）
101. 下谷古墳（方円）
102. 女原C　14号墳（方円）
103. 今宿大塚古墳（方円）
104. 谷上B　1号墳（方円）
105. 谷上C－1号墳
106. 小林A　1号墳（方円）
107. 御幣古墳（方円）
108. 城塚古墳（方円）（以下・志摩町）
109. 波口古墳
110. 福雲2号墳（方円）
111. 岡1号墳（方円）
112. 向原古墳
113. 大下戸古墳
114. 有田1号墳（方円）（以下・前原市）
115. 井ノ浦古墳
116. 立石1号墳（方円）
117. 弥気塚古墳
118. 東風方C－1号墳
119. 東風方A－1号墳
120. 神在横鼻古墳
121. 早良古墳
122. 一ノ瀬平野古墳（方円）（以下・一丈町）
123. 立野古墳（方円）
※「方円」は前方後円墳

Fig. 2　元岡・桑原遺跡群分布図（S＝1/15,000）

する拠点集落だが、貨泉や鏡片の出土がみられ、漁撈関係遺物も多い。弥生時代中期から古墳時代前期に続く、漁撈や交易などの海上活動の拠点とみられる。隣接する新町遺跡は、縄文晩期後半（弥生早期）から弥生時代、古墳時代前期にいたる墳墓遺跡である。また志摩町北部の野北地区では、久米遺跡の甕棺墓地から細形銅剣・銅戈が出土している。

古墳時代では、元岡・桑原地区では塩除古墳、元岡池ノ浦古墳、桑原金屋古墳、元岡E－1号墳といった前期の前方後円墳がある。金屋古墳からは菱雲紋鏡と芝草紋鏡が、元岡E－1号墳からは小型の方格T字鏡が出土した。いずれも30m前後の小型の前方後円墳である。また石ヶ原古墳は横穴式石室を主体とする後期の前方後円墳である。峰古墳、元岡Ⅰ－1号墳は前方後円墳とみられるが、詳細不明である。経塚古墳は単独の大型円墳で、中期古墳と考えられる。御道具山古墳などの泊遺跡群内の前期の前方後円墳も近く、同一の首長墓系列とみてもよいだろうと思われる。塩除、池ノ浦、御道具山、泊大塚は全長60mをこえる。古今津湾の存在を考えれば、これらの前方後円墳の多くは海を見下ろす丘陵上に築造されていることになる。泊地区では、三角縁神獣鏡の関連鏡群である神仙騎獣鏡２面を出土した泊大口古墳は前期初頭の可能性があり、泊城崎古墳は中期の大型円墳で陶質土器を出土しているという。また本地域には群集墳も多く、九大予定地内の丘陵尾根上には石ヶ元古墳群をはじめとする多数の中小の古墳が分布している。石ヶ元古墳群からは、鍛冶工具一式や金銅張の馬具、装飾大刀、陶質土器など注目すべき遺物も出土している。また九大予定地内では、古墳時代の集落として、２次調査では古墳時代前期の遺物を、20次調査では中期から後期の遺構と遺物を検出している。６世紀末以降は多くの谷部の調査で飛鳥～奈良時代に続く遺構群を検出している。元岡・桑原地区の周囲では、大原A遺跡等で小規模な集落が検出されている。事業地の西側に接する志摩町では、古加布里湾の奥部で当時の初川の河口付近であったと推定される部分の両岸に、稲葉１・２号墳と権現古墳の前期初頭～前半の前方後円（方）墳が相次いで作られ、中期前半頃にやや川を上った位置に全長90mの憎１号墳が築かれた。権現古墳は三角縁神獣鏡の関連鏡群とみられる画像鏡を副葬する箱式石棺を主体とするが、墳形から前期初頭であろう。稲葉１号墳も古い様相があるが、蓋石や段築からやや下るとみられる。前期から中期の古式群集墳として四反田古墳群があり、後期末では後口古墳が大型の横穴式石室を持つ首長墓とみられる。引津湾を臨む御床松原遺跡は、古墳時代前期から中期までは陶質土器や外来系土器の出土にみられるように海上交通の拠点として続いている。元岡・桑原地区とは古今津湾対岸である飯氏・今宿地区には多数の古墳群があり、さらに前期から後期にいたる前方後円墳の首長墓系列がみられる。山ノ鼻２号墳が墳形から最古とみられ、三角縁神獣鏡と三累環頭大刀、方形板革綴短甲を出土した若八幡宮古墳、古式の横穴式石室を持つ鋤崎古墳と丸隈山古墳、二重周縁を有する今宿大塚古墳などがある。集落では、飯氏遺跡群に前期から中期の建構が展開し、女原遺跡では中期前半の大型建物や韓式系土器が出土している。今宿遺跡群から今山遺跡のある砂丘上には、古墳時代前期の遺構が密に検出され、多くの外来系土器や製塩土器が出土し注目される。糸島地方の東側の海上交通の拠点であろう。転じて怡土平野においては、三雲・井原遺跡群は中期前半までは大集落として続いており、韓式系土器、陶質土器の出土もみられる。岡辺では、井原１号墳、端山古墳、築山古墳といった前期古墳、中期から後期の骨根古墳群、後期後半では古賀崎古墳というように、前期から後期までの首長墓系列が存在し、古墳時代においても重要地域であったことが伺える。また糸島地域には大小の前方後円墳が45基前後あり、特に前期に多いことが特筆される。

飛鳥時代（７世紀）から古代においては、来目皇子が率いたという対新羅征討軍がこの地域に逗留したことを日本書紀が記すほか、雷山神籠石の存在や、８世紀半ばには怡土城の築造が行われるなど、外交や国防の最前線として重要な地域となった。元岡・桑原地区の調査では、12次調査の大規模な製鉄遺

構群（８世紀）、７・18次調査の飛鳥～奈良時代の鍛冶炉や製鉄炉を伴う建物群などはこうした時代背景が関連するかもしれない。７次調査では「韓鍛」「鳴甲」と記された「壬辰年」（692年）の木簡が出土した。元岡・桑原地区は大規模な官営製鉄工房群であったとする意見もある。この地域は海岸で良好な砂鉄が得られることから、他にも製鉄・鍛冶遺跡が多くみられる。大原A遺跡では製鉄炉と鍛冶炉が検出され、近接する大原D遺跡では古代の集落が展開している。志摩町の八熊遺跡でも奈良時代の製鉄炉が集中して検出されている。古代では当該地域は志麻（嶋）郡に属する。文献では、正倉院に現存する大宝二年の筑前国嶋郡川辺里戸籍があるが、戸籍と遺跡の実態との対応関係については、和名抄などに記載された古代の郷の比定の問題も含めて、元岡・桑原地区遺跡群を含めた周辺の調査研究の今後の課題であろう。

Ⅱ　調査の記録

1. 調査の経過

対象地の調査前の現況は水田であった。当初は調整池建設の予定があり最初の調査対象となったのだが、調査直前に計画が変更され農学部の実験農地として大学移転後に利用する可能性もあるということで、現存の畦畔や堤、水路は現状のまま保存して調査をしてほしいとの依頼があり、結果として現況の水田区画に制限された調査区の設定となった。調査区は１次調査の試掘に基づきおよその範囲を設定したが、重機による面的な表土剥ぎの前に試掘トレンチを何本か入れ調査区を確定した（Fig. 3）。調査は11月11日から開始した。はじめに、１区と２区の表土掘削を行った。不明瞭であったが１区と２区東半より水田址らしきものが検出された。２区は調査区中央に河川の氾濫原とみられる砂礫面が広がり、これより東を「２区東半」、西を「２区西半」とした。東西で遺構の状況が異なり、２区西半では遺物包含層と柱穴群を検出した。11月19日より３区の表土掘削を開始した。土置場が不足するので、この区画は反転調査とした。翌20日には１区の掘削と２区東半の水田検出をほぼ終了したが、担当者一人につき作業員40～50名であり、図面作成者が他に当初おらず、調査区を広げつつその部分の遺構検出と掘削を指示していたから、図面が追いつかない状況が続いた。11月25日までに４区、５区、６区まで

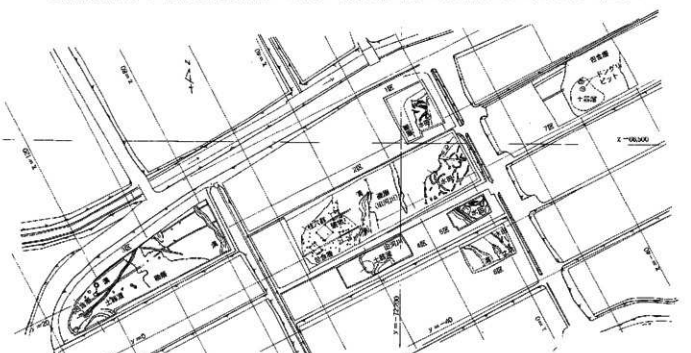


Fig. 3　第２次調査全体図（1/1,200）

区	新表記	旧注記	区	新表記	旧注記	区	新表記	旧注記
1区	SE1001	SE01	3区	SX3044	SX44	3区	SD3105	SD05
	SK1002	SK02		3132	32－Ⅱ		3106	06
	SK1003	SK01		3140	40－Ⅱ		3107	07
	SS1004	水田（?）		SP3301	SP301		SX3101	SX401
				3302	302		3104	404
2区	SX01	SX01		3303	303		SD3108	SD08
	SD2001	SD01		3304	304		SK3025	SK425
	2002	SD02		3305	305		3024	424
	2003	SD A		3306	306		3022	422
	2004	SD B		3307	307		SX3102	SX402
	SS2205	東水田		3308	308		3103	403
	SP2101	SP01		3001	401		SK3026	SK426
	SK2121	SK21		3002	402		3027	427
	SP2201	SP101		3003	403		3023	423
	2202	102		3004	404		3028	428
	2102	02		3005	405			
	2103	03		3006	406			
	SB01	SB01		3007	407	4区	SX4011	SX11(河道)
	02	02		3008	408		SD4101	SD101
	03	03		3009	409		4102	102
	04	04		3010	410			
	05	05		3011	411	5区	SK5001	SK5－01
	06	06		3012	412		SD5101	SD5－01
3区	SX3041 Ⅱ	SX41		3013	413		5102	5－02
	SD3036	SD36		3014	414			
	SX3031	SX31		3015	415	6区	SD6001	SD6－01
	3032	32－Ⅰ		3016	416		SX6101	SX6－01
	3033	33		3017	417		SS6201	水田
	3034	34		3018	418			
	3035	35		3019	419	7区	SK7001	SK7－01
	3038	38		3020	420		7002	7－02
	3039	39		3021	421		7003	7－03
	3041	37					SX7071	SX71(包)
	3041－Ⅲ西	40－Ⅰ東						
	3041－Ⅳ	40－Ⅱ西						

tab. 1　遺構対照表（「新表記」は報告書における遺構表記「旧注記」は現場における遺構註記である）

の表土掘削を終了した。重機による表土剥ぎに際して、およその遺構の分布を確認したが、全体として、試掘調査（1次調査）での予想より、遺跡の範囲がやや広がることが判明した。11月末までに2区の遺構の状況が判明し、12月2日より3区の、12月9日より4区の遺構検出を行った。12月上旬に入り、調査員数名の応援を得たので、図化作業も進みはじめた。12月19日に1区と2区の全体写真の撮影を行った。12月27日までに1区と2区東半分の作業を終え、これを重機により埋め戻した。2区西半は包含層の遺物出土状況の記録などに時間がかかり、年を越すことになった。年明けの翌1月10日より現場を再開した。1月に入り、4区において古式土師器の一括遺物を検出した。また5区および6区の遺構の掘削を開始した。1月16日に3区東半の全景を撮影した。1月28日に7区の表土剥ぎを行ない、1月30日より遺構検出を開始した。1月29日に3区東半の作業を終了し、1月末に

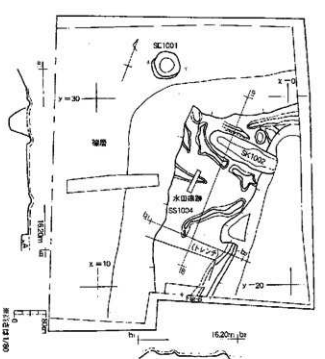


Fig. 4　1区遺構平面図（1/200）

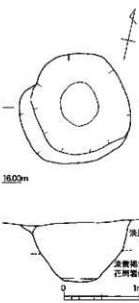


Fig. 5　SE1001実測図（1/50）

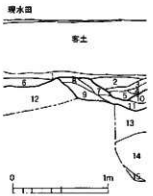


Fig. 6　1区土層E（1/40）

3区を反転し、2月より3区西半の作業を開始した。2月に入り、2区西半の精査と遺物取り上げ、ベルト外しを行ない、14日にSX01と柱穴群の全景を撮影した。2区西半は19～20日に埋め戻した。4区は古式土師器・挿の出土状況図作成と写真撮影が進み、2月末までにおおよその作業を終えた。5、6区は3月初めまでにほぼ作業を終えた。7区では、2月末に縄文時代のドングリピットを検出した。7区は3月上旬に作業を終えた。2月より作業に入っていた3区西半は、全体的に礫まじりで堅い土の遺物包含層が広がり、掘削が思うように進まず、また調査区南西隅で大量の上器群を伴う落ち込み（SX3041）を検出したため作業が滞り、3月に作業の大半を持ち越すことになった。3月6日に4，5，6区および3区西半の全景を撮影した。3月10～14日に4～7区の埋戻しを行なった。3区西半は、土器溜SX3041の部分を南側に拡張し、さらに南側にこれが続くことが判明したが、現状の畦を残すようにとの大学移転対策局からの要望があったので、この完掘を断念した。年度末までの時間が限られていたので、詳しい出土状況図を作成することをあきらめ、かわりに層位ごとで面的に写真撮影し、それをグリッドごとに取り上げるという方法で作業を進めた。3月24日までに、残っていた3区西半の作業を終え、現場機材等を撤収し、翌25日に3区西半の埋戻しを行ない、元岡・桑原遺跡群2次調査は終了した。

2. 調査の概要

本調査区は、大原川の左岸に形成された沖積地上に立地し、一部は砂礫台地上にある。調査面での標高は上流川で18m、下流川で15mを測る。調査地付近は昭和40年代の大規模な圃場整備によって地形がかなり改変された模様であり、さらに対象地の北西に隣接する平川池の存在から、近世以降の地形改変も考えられる。したがって、全体として遺構の遺存状況は良好ではなく、むしろ本来は斜面下方であったと思われる遺物包含層が主体として検出された。試掘調査（1次調査）では、対象地区の一部について地表下20～100cmでの遺跡の存在を確認していた。調査はまず、遺構を検出していた試掘トレンチ周囲を広げるように重機で掘削することから開始した。以下は「調査の経過」のとおりである。なおすでに記したが、造成計画が途中で変更したので、現況の水田区画を維持することになり、その区画に規制される形で1～7区の任意の調査区を設定した（Fig. 3）。また調査区の座標は任意のものである。

各区の検出遺構と遺物については、以下の各区の報告で触れる。なお、現場における遺構名称（番号）が不統一でかつ混乱が合ったので、整理報告に際して別表のように遺構名称を改めている（tab. 1）。出土遺物は、当初は中パンケース35箱分であったが、これは遺物片を詰めた結果であり、整理作業の過程で特に3区や4区の土器溜の土器群の接合が進み、最終的に100箱前後となった。遺物の種類としては、縄文時代から平安時代までの土器類、旧石器・縄文・弥生時代の石器、奈良時代の鉄滓、縄文時代

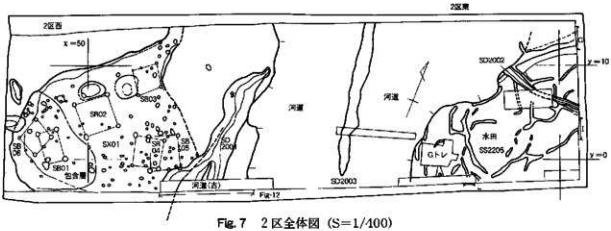


Fig. 7　2区全体図（S=1/400）

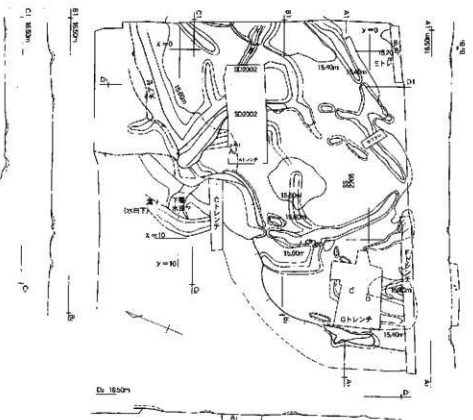


Fig. 8　2区東半水田平面図・断面図（S=1/200）

の堅果類、縄文時代の木製品（割板）がある。また、現場において土壌サンプルを採取し、堅果類の同定と合わせて自然科学分析を委託している（Ⅳ　自然科学分析報告）。なお2次調査の全体の調査面積は3,007㎡である。以下、各調査区の遺構について報告する。

3. 遺構の調査報告

1）1区の調査（Fig.4）

・SS1004（水田）

基本土層はFig.6に記す。現地表下60～70cmで粗砂まじりの砂質シルト層となり、この面で水田畦畔らしき暗灰色シルトの帯を検出

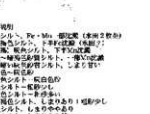


Fig. 11　土層説明

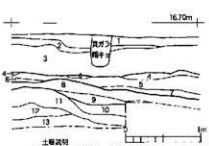


Fig. 9　2区上層G（1/50）

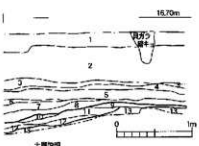


Fig. 10　2区上層Ⅰ（1/50）

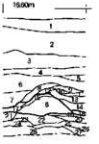


Fig. 11　2区上層L（1/50）

Fig. 12　2区南壁土層（1/60）

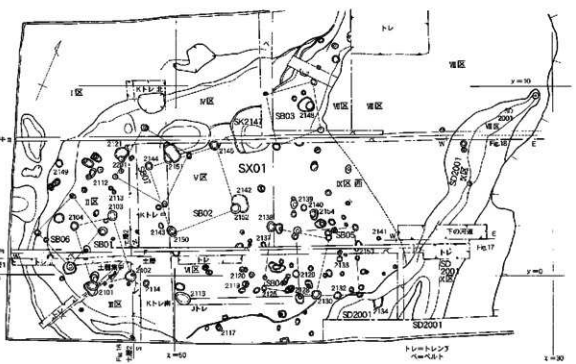


Fig. 13　2区西半SX01・SD2001他平面図（1/200）

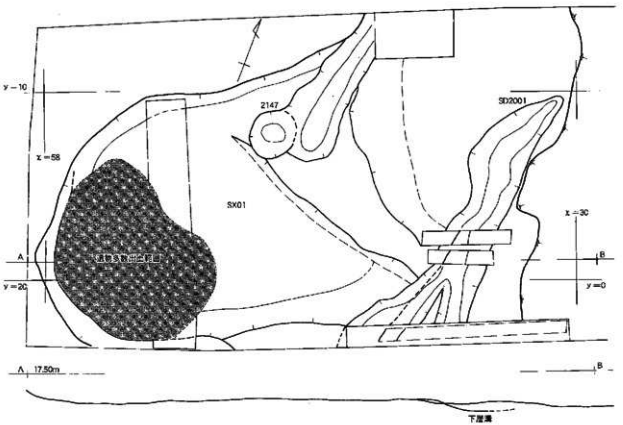


Fig. 14　2区SX01半面図・断面図（1/200）

した。土質の違いが当初分かりにくく、また水田面や畦畔自体の残存が著しく悪かったために、重機での表土掘削時にやや下げ過ぎ、人力で掘削精査する際には、畦畔や水田面そのものが僅かしか残らず、多くは畦畔痕跡（畦畔の土の下の盛り上がっている部分や、鉄分の沈澱の違いで畦畔状になる部分）を検出・記録することになった。しかし、次の2区のより明らかな水田面と同一の広がりと考えられる（図版1－1）。畦畔（痕跡）は以上の理由から真の畦畔でないものを含む可能性があるが、かなり小さい水田を区画する形になると思われる。

・SE1001（Fig. 5、図版1－2）

1区北側砂礫面で検出。灰色シルトと砂を覆土とする。径150cm、深さ80cmを測る。底面付近で湧水が若干みられた。出土遺物がなく、時期不明だが、水田を侵食した河川の砂の堆積以前である。

1区は、北側と西側、南東側は旧河川とみられる砂礫層で侵食され他は遺構がほとんどない。また水田面を切り込む土坑とみられるものもあるが性格は不明である（人為的なものかも不明）。出土遺物はわずかで、水田面上とみられる層位から古代末の土師器坏が（Fig. 64－1）、水田面の下部から奈良時代の須恵器片（Fig. 64－2）が出土している。水田の時期もその間に求められよう。

なお1区の調査面積は275.2㎡である。

2）2区の調査（Fig. 7）

2区は「調査の経過」でも触れたように、その東西で遺構の様相が大きく異なる。東半では1区および5・6区に続く水田址を、西半では遺物包含層と柱穴群を主に検出した。調査区中央は南北に粗砂礫層が走り、旧河川の氾濫部分と考えられる。これの埋没後、中央に南北に浅い溝があり（SD2003）糸

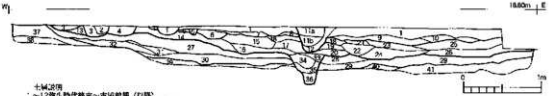


Fig. 15　2区SX01土層1 (1/50)

Fig. 16　2区SX01十層2 (1/50)

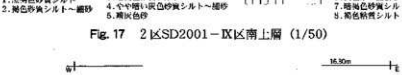


Fig. 17　2区SD2001－IX区南土層 (1/50)

Fig. 18　2区SD2001－IX区北土層 (1/50)

切り上師器(Fig.64－13)を出土している。また河川跡の礫層中から土師器の坏(ヘラ切り)が出土している(Fig.64－12)。水田を侵食した河川の氾濫の時期の上限と下限を示す。

2区東半の基本土層はFig.9～11に記し、また西半の基本土層はFig.12に記した。

・SS2205 (水田) (Fig.8)

地表下60～100cmで白色砂ないし砂まじりの灰色砂質シルト層を認め、この間に暗灰色シルトの畦畔と見られる帯を検出した。砂ないし砂質シルトを除去して水田面を検出した。1区の水田に比べて残りはやや良好であったが、一部畦畔が分かりにくい(残りが悪い)部分と、覆土のシルトが水田面のシルトと近い部分があったので、一部の畦畔としたものは実際は異なるかもしれない。しかし、水田面の一部には

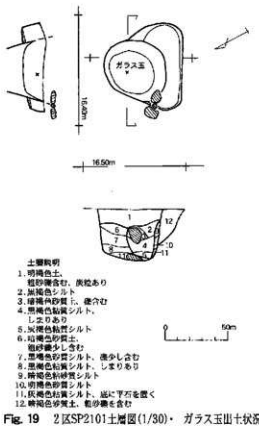
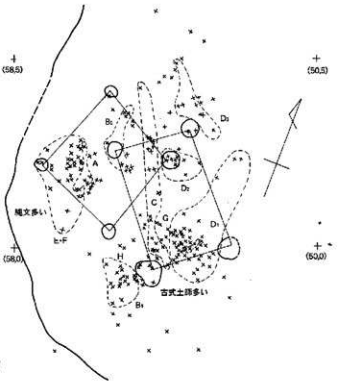


Fig. 19　2区SP2101土層図(1/30)・ガラス玉出土状況図



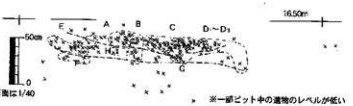


Fig. 20　2区SX01遺物分布図 (1/100)

あまりはっきりしないが足跡も残り(図版1－4)、また畦畔が切れて水口状を呈する部分も認められ、土壌分析をしていないが水田としてよいだろう。水田区画は全てきわめて小さいやや不整形の小区画である。北側には、幅50cm前後の大畦畔が東西に認められる。1区検出の水田面とは若干のレベル差があるのでこれを調整するものだろうか。また大畦畔の延長の西側の下部には別の下層の水田面とみられる部分を検出したが、残りが悪く、その広がりを検出することができなかった。なお水田の西側は河川跡とみられる砂礫層で削られている。(2区東半水田写真は図版1－2～図版2－3)

水田の年代であるが、下層に奈良時代の遺物を含むことからこれより以後に水田が形成され、水田を覆う砂層からヘラ切り底の土師器坏が出土するが、法量・形態的に11～12世紀前半までのものであり、水田の埋没時期を知ることができる。なお水田面下層の状況を調査するためにトレンチを数本入れている。Gトレンチからは水田層より下層の砂礫層中から鉄滓と奈良時代の須恵器・土師器が出土している(図版2－4)。上流の製鉄遺跡から流されたものであろう。他のトレンチからは、シルト層中より主に古式土師器が出土している。

・**SD2002** (Fig. 8、図版2－1)

水田SS2205を切り、東西に走る浅く、幅の狭い溝。灰白色砂と礫を覆土とする。時期不明。

・**SX01および柱穴群** (Fig. 13・14、図版2－5～図版3－3、図版4－3～8)

2区西半で検出した遺物包含層。東西20m、南北15mの範囲に土器・石器片を含む暗褐色～黒褐色土が広がり、これを掘削・精査した。なお遺構の深さは25～30cm前後であり、断面はなだらかな皿状を呈

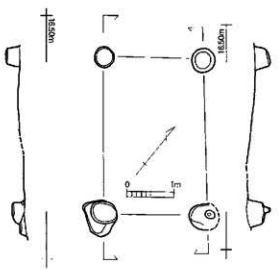


Fig. 21　2区SB01（1/80）

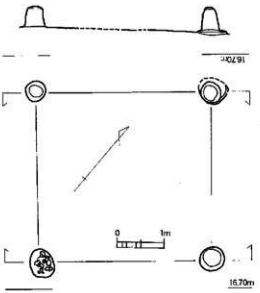


Fig. 22　2区SB02（1/80）

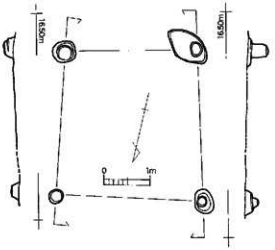


Fig. 23　2区SB03（1/80）

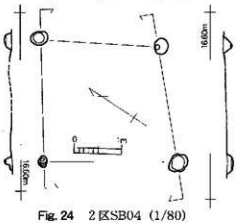


Fig. 24　2区SB04（1/80）

する。東側の立ち上がりははっきりせず、上層の黒褐色土が削平されているのだろう。土層はFig. 12・15・16に記すが、上層の黒褐色土からは主に弥生時代後期から古墳時代前期の、下層の暗褐色～褐色土からは縄文時代の遺物が出土している（Fig. 20）。中層の暗褐色土からは弥生前期～中期の土器も出土したが、大半は弥生時代終末～古墳時代前期前半と、縄文時代後期～晩期である。同色・同質の土の広がりは以上の通りだが、遺物が多く出土するのは西側の径10m前後の部分であり、他は散漫にしか出土していない。西側に本来高台があって（そこにおそらく集落があって）、下の凹みに放り込まれたものだろう。また、整理後に出土位置と遺物の時期をつきあわせてみると、弥生終末から古墳初頭の遺物は「一括」に準ずるまとまりがあるが、縄文時代の遺物にはあまりまとまりがない。縄文土器は遺存率も低く、二次的堆積の可能性もある。遺物集中部分の大部分は全点ドットで取り上げ、その他は層位とグリッドで取り上げている。なお埋上の一部に焼土や炭化物をよく含む部分があることなどから、竪穴住居址ではないかとの意見も現場作業中にあったが、土層や平面をいくら精査しても竪穴住居状の立ち上がりは見えず、さらにほぼ同じ場所に上層に古式土師器、下層に縄文土器があることから、地形上の凹みに形成された遺物包含層とした判断で誤りはないと考える。また、最上層の黒褐色土上半を除去したあたりから柱穴のいくつかが検出されたが、暗褐色ないし褐色土まで除去しないと検出できなかった柱穴もあり、柱穴群としたものには新しいものは古墳時代、古いものは縄文時代のものもありそうである。柱穴の土色には黒褐色、暗褐色、褐灰色があり、包含層の各層位と時期が一致する可能性がある。ただし、一部シミ状で浅く、色の薄い穴もあり、これらは植物の生根の可能性があり、現場では

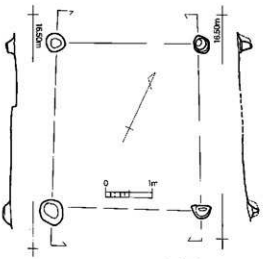


Fig. 25　SB05（1/80）

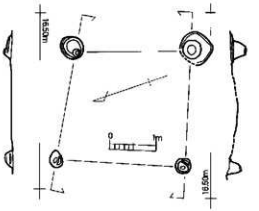


Fig. 26　SB06（1/80）

記録したが、Fig.13からはこれらの多くを除去した。柱穴は、概して浅く、建物を構成するものもあるが、上部構造のしっかりしたものではなかったと考えられる。（SX01出土の遺物実測図はFig.66・67、Fig.95～99）

・**SP2101**（Fig.19、図版４－１・２）

建物SB01を構成する柱穴。SX01上層の黒褐色土下半から切り込むと見られるので、SX01の最上層の古式土師器ⅡC～ⅢA期古相（古墳前期前半）とほぼ同時期の可能性がある。上層より、ガラス小玉（Fig.109）を出土。

・**SB01**（Fig.21、図版３－４）

SX01西側やや南側で検出した１×１間の掘立柱建物。3.4×2.1m。方位はN（磁北）－39°－W。柱穴からのガラス小玉の出土や層位的関係から古墳時代前期以降か。

・**SB02**（Fig.22、図版３－５）

SX01中央で検出。１×１間の掘立柱建物。3.6×3.7m。N－45°－W。SX01の暗褐色土の途中で確認する。弥生時代以降から、古墳時代か。小礫が落込む柱穴あり。

・**SB03**（Fig.23、図版３－６）

SX01北東部で検出。１×１間の掘立柱建物。2.6×2.8m。N－32°－W。プランがいびつな台形状。柱穴は概して浅く小さい。暗褐色土を切る。柱穴は暗褐色～黒褐色土。

・**SB04**（Fig.24、図版３－７）

SX01南東部で検出。１×１間の掘立柱建物。3.16×3.1m。N－15°－W。プランが台形状。柱穴は暗褐

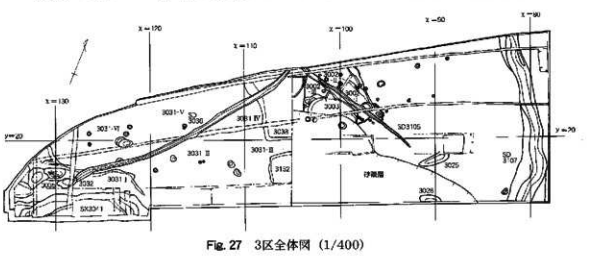


Fig. 27　3区全体図（1/400）

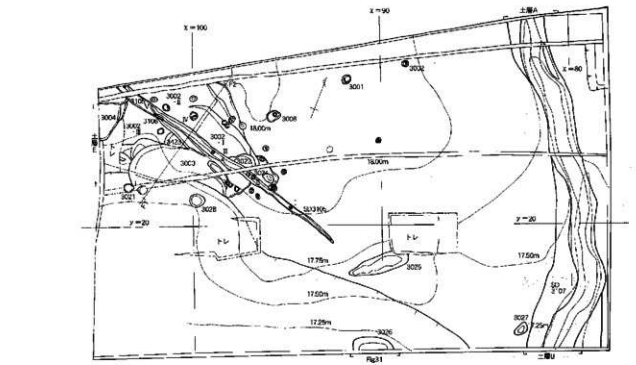


Fig. 28　3区東半全体図（1/200）

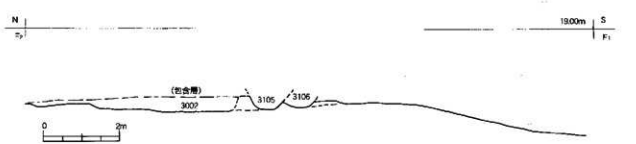


Fig. 29　3区東半F_2－F断面図（1/100）

色から黒褐色の覆土で、弥生終末から古墳前期か。SB05と重複関係にあるが、柱穴どうしの直接的切り合いは無いので先後関係は不明。

・**SB05** (Fig. 25)

SX01南東部で検出。1×1間の掘立柱建物。3.76×3.56m。N－25°－W。暗褐色～褐色の柱穴を主とし、縄文時代晩期～弥生時代の可能性がある。

・**SB06** (Fig. 26)

SX01西部で検出。1×1間の掘立柱建物。3.6×3.7m。N－20°－W。小規模な建物で、プランがいびつである。縄文時代晩期の可能性がある。

・**SB07** (Fig. 13)

SX01中央北西で検出。1×1間の掘立柱建物。2.95×3.0m。N－5°－W。SB02と重複する関係にあるが、柱穴の切り合いは無く先後関係は不明。黒褐色土の柱穴覆土主体。古墳前期かそれ以降か。

・**SD2001** (Fig. 14、図版5－1)

SX01の東側で検出。土層はFig.17・18に記す。SX01を切るように見えるが、実際の関係はやや不明な部分がある。2区中央の河川跡に平行するより古い河道（4区SX4011に続くか）の埋没途中で形成さ

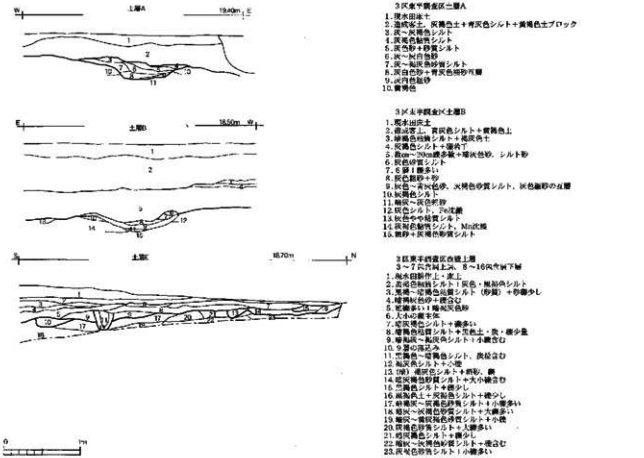


Fig. 30　3区東半SD3107・西壁上層図（包含層断面図）(1/50)

れた幅２～３m、深さ30cmの溝。溝は調査区南側で二股に分かれる。遺物はSX01上層と同様のⅡC～ⅢA期古相の土器を出土する（Fig.67右下）。上記の遺構の先後関係が正しければ、４区SX4011と逆転してしまうので、これらはむしろSX01上層に伴う土器の混入であろう。

なお、２区の調査面積は1059.4㎡。

3）３区の調査（Fig.27）

３区は、「調査の経過」で述べたように土層場の都合上から東西に反転して調査している。反転前を３区東半（Fig.28）、反転後を３区西半（Fig.33）としている。３区東半では遺物包含層、溝２、土坑２、柱穴若干を検出し（図版５－３）、３

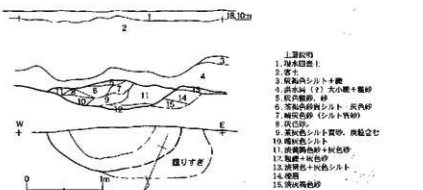


Fig. 31　SK3026平面図・土層図（1/50）

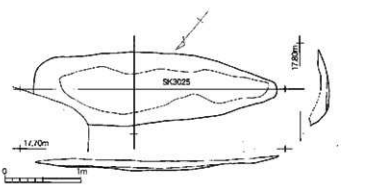


Fig. 32　SK3025平面図・断面図（1/50）

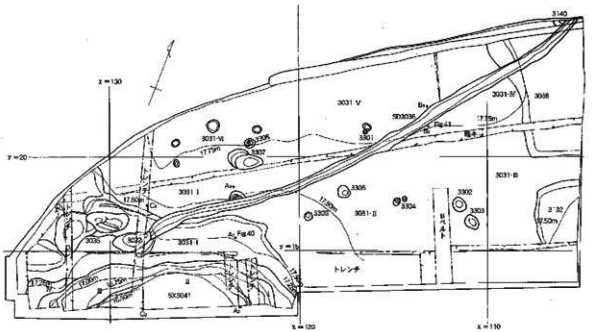


Fig. 33　3区西半全体図（1/200）

区西半では遺物包含層、土器溜（落込）、溝1、土坑4、柱穴若干を検出した(図版5－5、図版6－2)。特に土器溜SX3041からはやや大量の弥生土器～古式土師器を検出した。基本土層は、Fig.30下段を参照されたい。なお3区東半の南西部は礫層を重機で下げ、下層の砂・シルト層で確認したので、遺構検出面が3区西半と異なっている。

・SX3102, SX3103, SX3104 (Fig. 28)

3区東半北東部で検出した遺物包含層。礫を多く混じる黒褐色（上層）～暗褐色土ないし褐色土（下層）の覆土。SX3104は西側の、SX3103は南側の岩干落込む部分。土層はFig.30下段を（図版5－4）、横断面はFig.29を参照。3区西半のSX3031と連続する。遺物はあまり多くなく、細片が多い。3区西半SX3031と同じとすれば、古墳時代後期以降の包含層形成が考えられる。斜面上方の北側方面に遺跡が広がっていたのだろう。

・SD3107 (Fig. 28、図版6－1)

3区東半東側を南北に走行する溝。南に向かって流れる。やや蛇行し、砂を覆土とするところから（土層はFig.30上・中段）、自然の流路であろうか。遺物の出土も無く、時期不明である。

・SK3026 (Fig. 31)

3区東半南側で検出。長径170cmを測る。地山との違いが分かりにくく、やや掘り過ぎてしまった。人為的な遺構と言うよりは風倒木痕などの可能性がある。

Fig. 34　SX3041グリット図（1/100）

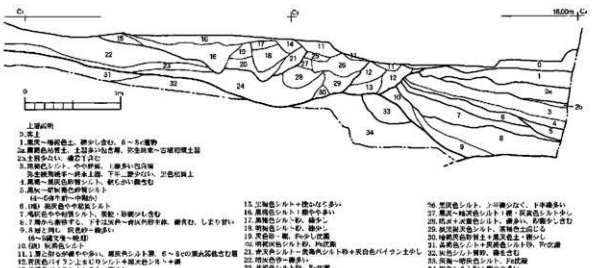


Fig. 35　SX3041他Cベルト土層（1/40）

・SK3025 (Fig. 32)

3区東半中央南で検出した溝状の浅い土坑。3.2×1.0m。出土遺物は無く、時期・性格不明。

・SD3105 (Fig. 28、図版5－3)

SX3102を切る細く浅い溝。黒褐色土に礫を多く含む。東西にのびるが、東側は削平されたためか途切れる。N－75°－W。弥生終末前後の土器を出土しているが、小片ばかりで時期を示すか疑問。3区西半のSD3036と類似した埋土であり、また方位的関係も直角に近く、関連する遺構とすれば奈良時代か。なお類似する遺構であるSD3106と同一方向で重複関係にある。

・SX3031 (Fig. 33)

3区西半でほぼ全面にわたり検出された遺物包含層。北側に高い斜面堆積の包含層である。暗褐色ないし黒褐色土に礫を多く混じる。包含層は厚さ5～20cm程度。須恵器の破片が目立ち、古墳時代後期ないし飛鳥時代（6～7世紀）に形成されたものであろう。遺物はグリッドごとで取り上げている。須恵器に大甕の破片が多くあり、あるいは斜面上方北側に古墳ないしは窯跡などが存在した可能性も想起される状況である。

・SX3032 (Fig. 38)

包含層SX3031－I区の落込み。浅い土坑状。黒褐色～暗褐色＋礫の土層と灰色シルト土の混合 (SX3035と同様)。あるいは風倒木痕か。出土遺物はSX3031と同じ時期で、接合関係もある。SD3036との関係は不詳。

Fig. 36　SX3041Aベルト土層（1/40）

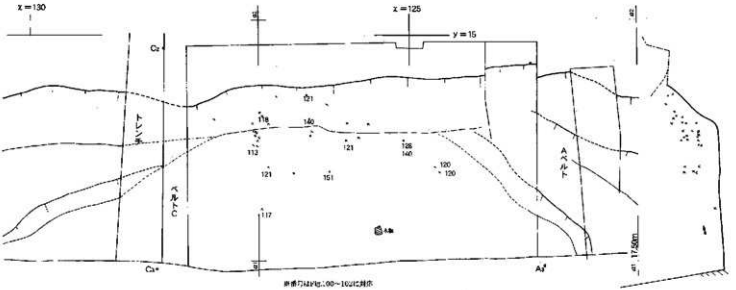


Fig. 37　SX3041下層縄文時代遺物出土状況（1/50）

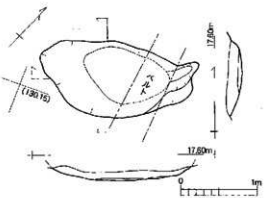


Fig. 38　SX3032平面図・断面図（1/50）

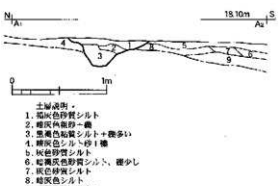


Fig. 40　SD3036Bベルト土層（1/40）

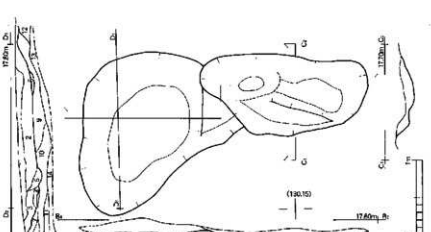


Fig. 39　SX3035平面図・断面図（1/50）

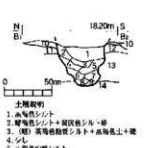


Fig. 41　SD3036土層（1/40）

・SX3035 (Fig. 39)

包含層SX3031－Ⅰ区の落ち込み。土層はFig. 39に記す。二つの土坑ともみられるが、SX3032と同様に風倒木等かもしれない。底面が一定でない。SX3031の遺物と同様の時期か。

・SD3036 (Fig. 33・40・41、図版5－6)

3区西半を北東から南西に横断する細い溝。幅50～90cm、深さ30～50cm。土層はFig. 40・41に記す。3区東半のSD3105と方位的に直交し、関連があるかもしれない。SX3032はこの一部の可能性もある。出土遺物には弥生土器、古式土師器を含むが、奈良時代の遺物があり遺構の時期もその時期であろう。

・SX3041 (Fig. 34、図版5－7、図版6－2～7－9)

南西部で検出した落ち込み状の土器溜。今回の調査の出土遺物の約半数の量がここから出土した。最上層はSX3031と同じであるが（黒褐色土＋礫）、これを取り除くと土器溜があらわれた。この落込み自体は調査区のさらに南側に広がると考えられ、今後の遺成計画によっては調査する必要がある。

「調査の経過」でも記したように、時間的な制約から出土状況図を作成できなかった。そのかわりに、層ごとで出土状況写真を記録し、グリッド（a～k）を設けて取り上げた。また、当初はグリッドa～eをSX41、f～gをSX37、h～kをSX40と呼称していた (Fig. 34, tab. 1を参照)。なお、出土遺物が多いために途中で掘削範囲を南側に拡張している。取り上げは、出土状況写真の順番ごとに「第1回写真」「第2回～」と呼称して取り上げている。はじめの2回の撮影は、Ⅱ区 (a～e) とⅢ区（f～j東）はほぼ同時に出土状況を清掃でき、ほぼ同時に撮影したのでこれを「第1回」「第2回」としたが（「Ph. 1」、「Ph. 2」と略称)、以後は作業の進行にズレが生じてきたので、「Ⅲ区第3回」はPh. 4、Ⅱ区第3回はPh. 4、Ⅲ区第4回はPh. 5、Ⅱ区第4回はPh. 6となっている。撮影の前後で「Ph. 2前」「Ph. 1後」などとして掘削途中の破片を取り上げている。原則的には撮影の順序が層位の新古（上・下）になるが、掘削を進行しながら調査区南壁部分をより真直ぐにしつつ南へ少しずつ拡張していったので、特に「南壁」（「南」と略）などと注記されているものはより上の層位（Ph. 1～Ph. 2の層位）と対応する（特にPh. 4～Ph. 5「南」）。またPh. 6（Ⅱ区第4回写真）では、北側の落込み立ち上がり付近に集中するものは縄文時代の遺物だが、南側の調査区壁際下にあるものは弥生時代中期～後期の遺物である。また、

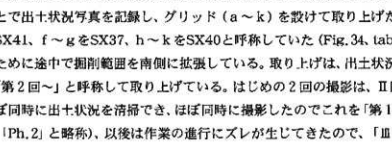


Fig. 42　SX4011区割り図 (1/200)

Fig. 43　4区SD4101・4102平面図 (1/200)

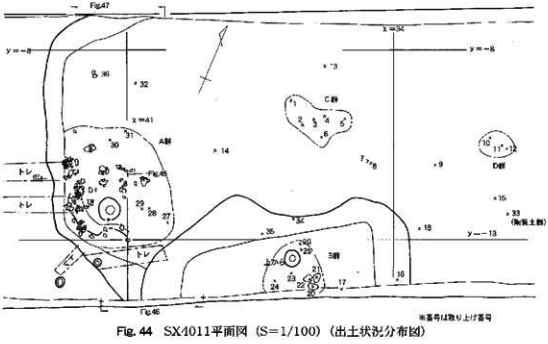
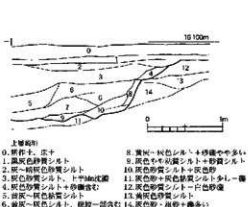


Fig. 44　SX4011平面図（S＝1/100）（出土状況分布図）

上層説明
1.暗灰色砂質シルト、しまりはい
2.明灰～灰色シルト、しまりよい
3.灰色礫混～シルト砂！小礫少し
4.暗灰色細砂～シルト+炭化物、
　炭少量
5.灰色砂＋暗灰色シルト、炭化少
　量
6.暗灰色シルト、しまりあり、
　炭少量
7.淡黄褐色シルト！灰色砂
8.淡褐灰色シルト、しまりあり、
　19層ゃゃむる
9.暗褐灰～淡灰褐色シルト、粘質
　やゃあり、しまりあり炭化物、
　十焼ネト、上面は炭層～灰色
10.灰色砂＋暗灰色シルト
11.灰色シルト、しまりゃゃ悪い
12.暗灰褐色シルト、粒！炭化物ご
　上部に焼土灰色粘質シルト
13.黒灰灰色粘質シルト、下部に土
　器
14.灰褐灰色粘質シルト＋灰色シル
　ト質
15.灰色細砂、暗灰、灰色小粘砂の
　互層
16.暗灰色砂、しまり悪い
17.（欠）灰色褐灰シルト＋灰色砂
18.灰色砂＋灰砂質
19.明灰色細砂～砂質シルト
20.灰色シルト＋灰色砂
21.灰色シルト＋灰色砂
22.20層より細かい砂層
23.暗灰色シルト、しまり悪い
24.人為の撹乱層の砂礫層
（SX4011埋土）

Fig. 45　SX4011調査区中央ベルト西側（1/50）

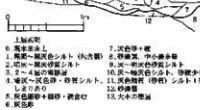


上層説明
0.耕作土、広十
1.黒灰色砂質シルト
2.灰～暗灰色砂質シルト
3.灰色砂質シルト、下部粘化層
4.灰色砂質シルト＋砂礫混じり
5.淡灰～灰色砂質シルト
6.淡灰～灰色シルト、細粒～部含む
7.淡灰～灰色砂質シルト＋灰色砂
8.黄灰～灰色シルト＋砂礫やや多い
9.灰色やや砂質シルト＋砂質シルト
10.灰色砂質シルト＋灰色砂
11.灰色砂＋灰色砂質シルト少し～層
12.灰色砂質シルト～灰色砂礫
13.淡灰色砂質シルト

Fig. 46　SX4011調査区南壁西側土層（1/50）

Ph.3とPh.5はⅢ区、Ph.4とPh.6はⅡ区だが、一部取り上げ時の混乱があり、例えばⅡ区であってもPh.5に対応する層位のものは「Ph.5層」として上げてしまったものがある。一応、今回の報告ではこれらの混乱は整理している。今一度、写真取り上げと土層の対応を記せば（Fig.35の土層）、Ph.1～2およびPh.4南が2層、Ph.5南が2層から3層、Ph.3・4と5の一部が3層、Ph.5の一部とPh.6の南側弥生遺物が4～6層、Ph.6の北側縄文遺物が7～9層におおむね対応する。

土層はFig.35・36に記す。上層は黒色粘質土であり、古墳初頭～弥生終末の土器を含む。その下は黒褐色シルト土となり、弥生後期後半～終末の土器を含む。弥生後期後半以降の遺物はきわめて多いさらに下に暗褐色～黒灰褐色シルトが若干あり、弥生前期～中期の土器をわずかに含む。下層は、褐灰色シルト～灰色シルトで、縄文時代の遺物を含み出土状況を記録



上層説明
0.現代耕土
1.暗灰～黒灰色シルト（灰色砂）
2.暗灰～黒灰色砂質シルト
3.ダーキ灰色粘質土
4.暗灰～灰色砂・砂質シルト、しまりあり
5.灰色細砂（砂利）シルト！強含む
6.灰色砂
7.灰色砂＋礫
8.砂礫混、中小礫多層
9.灰色やや砂質シルト
10.灰～明灰色砂質シルト
11.灰色細砂（砂利）シルト！強含む
12.砂礫層
13.大小の礫混

Fig. 47　SX4011調査区北壁西側土層（1/50）

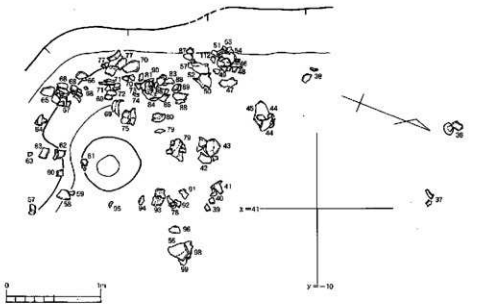


Fig. 48　SX4011A群遺物出土状況平面図（S＝1/40）

したが（Fig. 37）、整理後の検討で時期（型式）にあまりまとまりがないので一括性には乏しい。上層の弥生後期後半以降の遺物は厳密な一括性は疑問だが、層位的にある程度の時期的傾向がある。したがって、おおまかな時期的変遷を述べるための資料としては使用可能と思われる。またこれだけの量の土器を廃棄した当時の生活領域（集落）が、本来斜面上方に存在したはずであるが、調査区内では検出できなかった。なおSX3041の各層位の土壌をサンプリングし、花粉分析から周囲の環境の変遷を明らかにしようと試みたが、花粉化石の残りが不良で、期待した成果は得られなかった（自然科学分析の項を参照）。（SX3041出土の遺物実測図はFig. 68～80）

なお、3区の調査面積は775.8㎡である。

4）4区の調査（Fig. 42～44）

4区は、遺物を包含する河道跡であるSX4011、SX4011の埋没後に形成されたSD4101、SD4102、柱穴と岩干を検出した。SX4011の西側には灰褐色土のより古い層があり、2区SX01の下層の包含層と連続する可能性があるが、トレンチを入れたものの遺物が認められず全体を調査していない。なお、4区の調査面積は172.8㎡である。

・SD4101、SD4102（Fig. 43、図版8－2）

SX4011の上に検出された2条の浅い溝。調査区北側の2区SD2001の一股に分かれた部分から続くとみられる。ただし、平面的には図のように遺構を捉えたが、調査区南壁（Fig. 46）、北壁（Fig. 47）

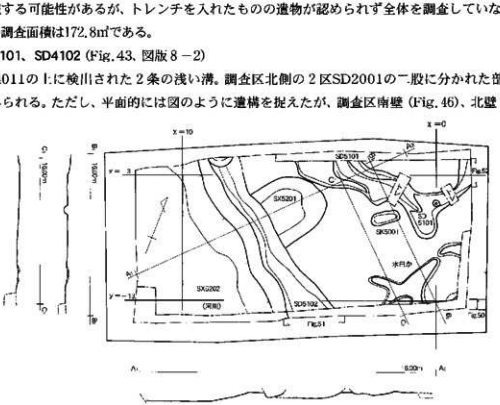


Fig. 49　5区全体図（1/150）

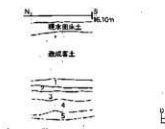


Fig. 50 5区土層3 (1/50)

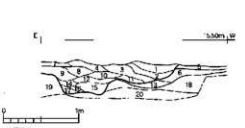


Fig. 51 5区土層4 (1/50)

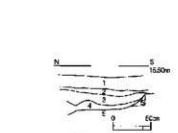


Fig. 52 5区土層2 (1/50)

の土層の検討では対応する層位がよく分からなかった。

・SX4011 (Fig. 44)

4区の多くの部分がこの遺構でしめられる。はじめにトレンチを何本か入れたところ、下層に密な遺物の出土が認められたので、便宜的にグリッドを設け掘削した(Fig. 42)。遺物の取り上げは、上層や小片はグリッドによるが、中層以下は出土状況を記録している。土層はFig. 45～47に記した(図版8－6)。中層以下の遺物の分布は4ケ所に偏在し、それぞれA～D群とした。A群は(Fig. 48)、薄み状の暗褐色粘質土主体の窪土中から検出され、SX4011の西側立ち上がりから床面に貼り付き、また折り重なる状況で出土したものであり、完形に近く復元できるものも多く、状況的に一括とみてよい(図版8－1・3～5・7、図版9－1～3)。西側から投げ込まれた状況であり、SX4011西側は現状では遺構が存在しないが、2区西側に想定されると同様に、本来は高い地形であり、集落があったのが削平されたものと考えられる。またB群はSX4011が調査区南側で落込む部分であり(図版9－7)、層位的にA群より埋没が古い可能性があり、また完形に準ずるものが多くこれも一括に準ずる(図版9－5・6)。C群、D群は同一個体が散っている範囲である。SX4011西側の土器A群の埋没する層位や、B群の落込み部分は古い河道(2区SD2001下層溝に続くか)の埋没であろうが(A群は土質的に河川そのものというより、河川際を凸状に人為的に整形したような部分の堆積か)、西側でも上層の砂礫層や中央から東側の最下層を除く大部分は、より新しい河道(2区中央河川跡と同じか)の砂礫層を検別できずに掘削していると考えられる。したがってSX4011は全体としては新旧の河道が重なったものと捉えておきたい。その上で西側下層のA群の層位や、南側落ち込みのB群の層位は古いプライマリーな堆積が残っていると判断する。なおSX4011中央下層の砂礫層中より陶質土器片が出土したが(図版9－4)、

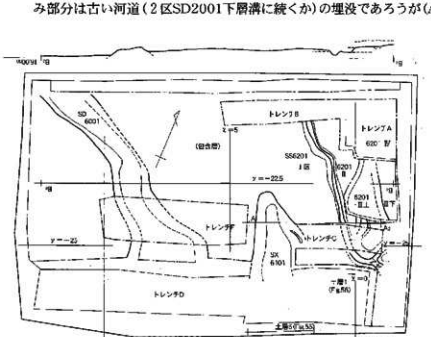


Fig. 53 6区全体図 (1/150)

層位的にA群やB群などの一括土器群と伴うと言える状況ではない。(SX4011出土の遺物実測図はFig.85～89)。なお、SX4011の河道は南側にも続くであろうし、また同様な遺物の一括出土もある可能性があるが確認していない。今後の造成計画によっては試掘調査により確認する必要があるだろう。

5) 5区の調査 (Fig.49)

5区では、2区東半からの広がりと見られる水出址、土坑(?)溝状遺構、河川跡を検出した(図版10－1)。基本土層はFig.50に記す。そのうち水田址は1区と同様に痕跡的であり、水田面の残りが悪く、平面的にあまりとらえられなかった。上層において2区や次の6区との対比から水田層と推定している(Fig.51・52)。なお5区の調査面積は91㎡である。

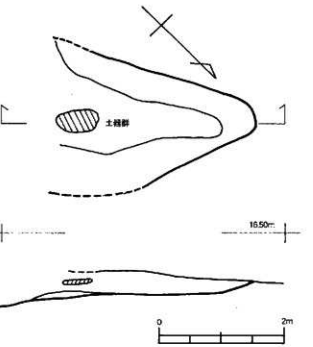


Fig. 54 SK6101平面図・断面図 (1/60)

・SD5102 (図版9－8)

調査区西側中央寄りを北西－南東に走行する溝。土層はFig.50に記すが、砂主体であり、自然流路か。水田址を切るとみられるが、西側の河川跡SX5202(2区の中央河川跡の延長)との関係は不明。

その他、SD5101は水田址を切る不整な溝であるが自然の溝か。シルトと砂を覆土とする。SK5001は110×25cmの浅い土坑。時期・性格不明。SX5201はSD5102に切られる径2.5mの土坑状。シルトと砂を覆土とする。時期・性格不明。5区は、いずれの遺構も遺物の出土はごくわずかである。

6) 6区の調査 (Fig.53、Ph.10－2)

6区は、2区・5区から続く水出址を東側で検出したほか、包含層、溝状土坑、溝状遺構を検出した。はじめ土の違いが分かりにくく、トレンチを数本入れている。地表下50～70cm(現在の水田耕作土10～20cmを含む)。基本土層はFig.55に記した。6区の調査面積は144.9㎡である。

・SS6201 (Fig.53、図版10－3・4)

調査区東半で検出した水出址。5区などよりは残りがやや良好で、暗褐色～暗灰色シルトの水出土層を検出した。水田を覆う土砂が砂礫主体の部分は畦畔が比較的よく検出できたが、シルトがかぶっているところは一部不明な状況となってしまった。また水田層自体は薄くしか残っていない。また東側では、下層の別の水田と思われる面を検出したが(SS6201－Ⅲ区)、上層水田との間にごくわずかしか砂を挟まず、上層水田を掘り遣ごして検出してしまった状況である。したがって検出した畦畔の関係が、図面上つじつまが合わない部分がある。上下の水田面はあ

Fig. 55 6区土層5 (1/50)

Fig. 56 6区土層1 (1/50)

まり時期差がないだろうと考える。また下層水田は残りが悪く、その広がりが不明である。畦畔は暗灰色シルトを積み上げて形成している（Fig.56、図版10－５）。水田面の西側は水田層自体の残りが悪く、調査区中央は砂－シルトの包含層となっている（遺物は少ない）。水田址の年代は、水田の下層の砂礫から奈良時代の遺物を出土している（Fig.90）のでこれ以後であり、２区の水田と同じであろう。

・SX6101（Fig.54、図版10－６・７）

調査区中央南寄りで検出した溝状の土坑。暗灰色～灰褐色シルトに砂礫を含む覆土。上層に土器片をややまとまって出土したが、奈良時代と古墳時代の土器が混在し（Fig.90・91、流れ込みのようである。水田との関係が不明瞭であったが、おそらく水田面が上に来ると思われる。

・SD6001（Fig.53）

調査区西側を北西－南東に走行する溝。砂主体の覆土で、５区のSD5102と同様に自然流路か。２区中央、５区西側から続いてくる旧河道の砂礫層の東縁を切り込むような形となる。奈良時代の遺物を出土するが（Fig.90）、遺構の時期はおそらくより新しく、流れ込みであろう。

７）７区の調査（Fig.57、図版11－２）

７区は地表下30～50cm（現況水田耕作土の厚さを含む）で遺構検出面とした。調査区の基本土層はFig.59・63を参照されたい。調査区の西側と南東端は砂礫まじりの灰色シルト地山であるが、調査区中央の広い範囲に黒褐色～暗褐色粘質土が広がることを確認し、この一部が遺物包含層であることが判明したので（SX7071）、この上面を精査することから調査を開始した。また下部にも縄文時代の包含層がある可能性も指摘されたので、調査区北側に長く東西のやや深いトレンチを掘削し、その有無を確認した。SX7071の黒褐色～暗褐色の広がりは、上面の精査では中央から南西側のみに遺物が含まれる様相であったので、その部分を先に掘削し、他の部分は調査工程の関係上、トレンチにより遺物包

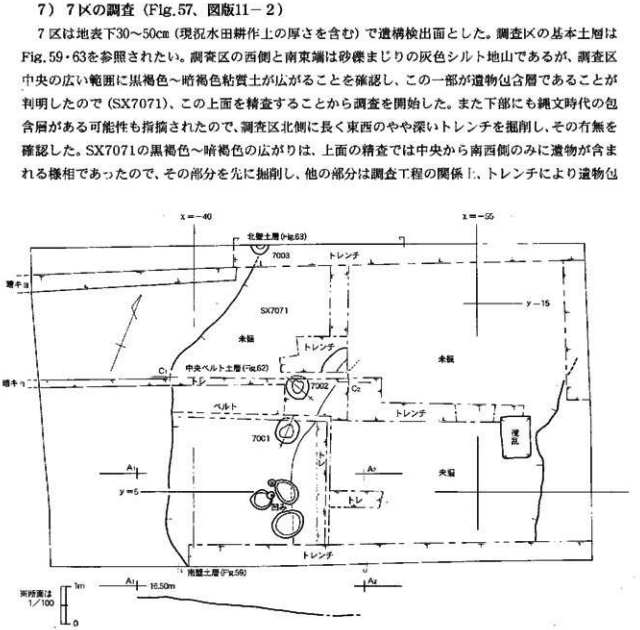


Fig.57　７区全体図（S＝1/200）

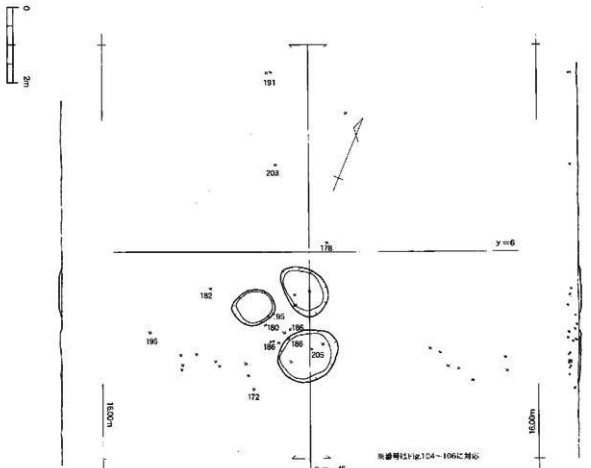


Fig. 58　7区遺物分布図（S=1/100）

含層の有無を確認した。結果として他の部分（北側から東側）には同様の土色・土質の層が広がるものの、遺物が包含されていないことを確認したので、これらの部分は掘削していない。また北側東西トレンチでも、下部により古い黒褐色～黒灰色粘質土層があることを確認したが（Fig. 63）、遺物は包含されていないと判断して下部は調査していない。7区の検出遺構は、包含層SX7071と、土坑3基などがある。土坑のうち1基は縄文時代のドングリピットであり、特筆される。また7区の調査面積は487.9㎡である。

・SX7071（Fig. 57・58、図版11－1～3）

上記のように、7区の多くの面積をしめる黒褐色～暗褐色の包含層である。七層はFig. 59・62に記した。包含層の深さは深いところが30～40cm程度で、上層に古墳時代の、下層に縄文時代の遺物を含むようである（下層は暗灰色上）。実際に遺物が広がるのは、調査区の中央から南西部分で、この部分のみを掘削・精査し（Fig. 58）、他はトレンチによる確認のみとした。遺物は古式土師器と縄文後～晩期の

Fig. 59　7区南壁土層（1/60）

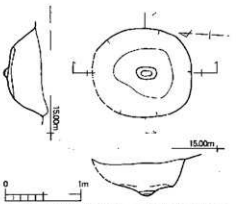


Fig. 60　SK7001平面図・断面図（1/50）

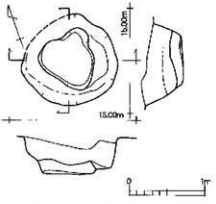


Fig. 61　SK7002平面図・断面図（1/50）

上器があるが、前者は比較的近い時期のまとまりがみられるが（Fig.92）、後者はそれほどのまとまりがない。遺物量はあまり多くない。包含層の浅い部分は縄文時代遺物と古墳時代遺物のレベル差はあまりない。2区SX01の状況と類似する。上層の古墳前期遺物は比較的プライマリーな堆積とも考えられるが、縄文時代遺物は二次的堆積とみられる。なお遺物がやや集中する部分の下に浅い凹みがあるので、あるいは掘込みがあった可能性があるが（Fig.58の遺物ドットはほとんどが縄文遺物である）、遺構があったとしても上記の理由から一括遺物とは考えられない。

・**SK7001**（Fig.60）

SX7071中央西側を掘削中、下層途中で礫群の落ち込みがあることで確認した（図版11－7）。130×120cmの楕円形、深さ50cm。底面中央がピット状。覆土は次のSK7002の中層以上と同様。SK7002のように堅果類の貯蔵状況は検出できなかったが、同様の層位状況で検出され、また近くに並んでいること、プランや規模も類似することから本来は堅果類貯蔵施設であった土坑か。

・**SK7002**（Fig.61、図版11－4～6）

SK7071中央西側、SK7001の北側で検出。SK7001と同様に、上層に礫群の落ち込みが見られた。SX7071との層位的関係と土層はFig.62を参照（図版10－8）。SX7071下層（縄文時代包含層）の途中から落込む状況である。最下層の厚さ5 cm前後の層に堅果類が水漬けのため保存良好な状態で検出された（図版11－6）。したがって土坑の性格はいわゆるドングリピット（堅果類貯蔵穴）である。SK7071自体からの出土土器はないが、上部の落込みから後期ないし晩期の粗製土器の破片が出土しているので土坑もその時期でよいだろう。堅果類のC14年代測定では2,820±110BPという結果が出た。なお同定の結果、堅果類は全てイチイガシであった（「Ⅳ　自然科学分析報告」）。

・**SK7003**（Fig.63、図版12－1）

調査区北側トレンチ西側で検出。黒褐色粘土層を切り込む灰色粘質シルト。径100cm程度、深さ80cm程度の土坑である。古墳前期の包含層よりは古いが、上限は不明である。弥生時代か？

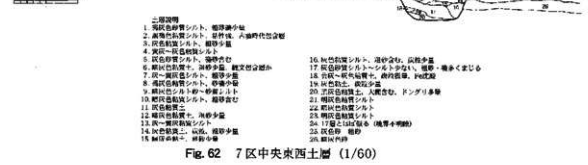


Fig. 62　7区中央東西土層（1/60）

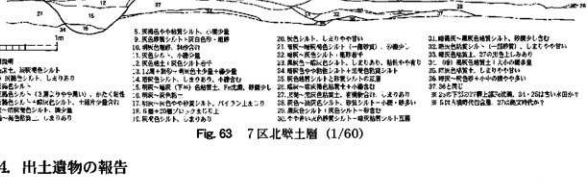


Fig. 63　7区北壁土層 (1/60)

4. 出土遺物の報告

以下、各遺構の出土遺物について報告するが、弥生時代以降の土器(陶磁器を含む)、製鉄関係遺物、縄文時代遺物(一部弥生時代以降の石器を含む)、旧石器時代遺物、その他の遺物の順で記述する。また挿図によっては、出土遺構・層位を図中に書き込んだものもあるので注意されたい。今回の報告では、破片を含めた比較的多くの遺物を図化報告するので、紙幅の都合上、各遺物それぞれについて詳しい記述説明ができない。ご寛恕を願いたい。また、特に３区十器溜の遺物については努めて図化を行なったが、量が多く、時間の都合上、図化可能な遺物の全てを取り上げることができなかった。また以下の記述説明において、弥生時代終末から古墳時代前期の上器の時期、器種・系統分類については、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の上器様相」(『庄内式上器研究』XIX、庄内式土器研究会、大阪)に拠るのでこれを参照されたい。また須恵器については、小田富士雄1964「九州の須恵器序説」(『九州考古学』22)における大別を用いるが、その様式内容については、高橋徹・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題」(『古代文化』VOL.42－4)におけるもので修正し、さらにⅢB期から Ⅵ期の細分と年代については、久住猛雄2001「出十須恵器の編年とE－2・3号墳の築造・追葬の年代について」(米倉秀紀編『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集)を参照されたい。時代名称については、古墳時代後期を６世紀末までとし、７世紀(須恵器Ⅳ期からⅥ期)を飛鳥時代とした。中世は博多遺跡群の動向とその報告にならい11世紀後半以降とした。奈良時代(８世紀)を古代前期、９世紀を古代中期、10世紀を古代後期、11世紀前半を古代末と呼称する場合がある。また十器の色調は主観的な色名を用いる場合と、『標準土色帳』の記号を用いる場合がある。他に参照する文献がある場合にはそのつど文中に示した。

１) 土器(弥生時代以降の十器・陶磁器)

(1) 1区出土土器 (Fig.64・65)

Fig. 64－１は土師器の坏。底面ヘラ切り。焼成良好。法量的に８世紀後半～９世紀前半か。あるいは須恵器の焼成が悪いものである可能性もある。その場合も９世紀代か。あるいは11世紀後半頃の可能性もある。２は須恵器の高台付坏。奈良時代。Fig. 65－１は古式土師器の小型丸底壺(鉢)。０類(久住猛雄1999)の形態だが、ミガキは内面のみであり、胎十は「精製器種B群」(次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第２号)のような水簸胎土ではなく(やや粗い)、模倣品である。7.5YR７/４。時期も精製品の型式より下り、ⅡA～ⅡB期前後か。

(2) 2区出土土器 (Fig.64～67)

Fig. 64－３・４は土師器の坏。いずれもヘラ切り底。時期不詳。５は白磁碗の破片。灰白オリーブ色。３～５は水田直上砂出土。５が埋没時期を示すか(11世紀代)。６は須恵器の鉢。平底は周囲ヘラケズリだがヘラ切りが残る。Ⅳ期新相～Ⅴ期か。７・９・10は土師器の坏・皿類。いずれもヘラ切り底。８

～9世紀か。水田はこれ以後のもの。8は須恵器の坏。外面は凹線状のヨコナデ、ヘラ切り底。8世紀後半～9世紀前半か。11は精製の土師器の塊ないし丸底坏か。外面にヘラ描きあり。12は須恵器の皿。8世紀～9世紀前半。13は土師器の坏。糸切り底。13世紀代か。14は須恵器の鼎の破片。肩部カキメ後ハケメ工具の列点押圧文。ⅢB期前後か。15は須恵器の甕の破片。外面格子目タタキ、内面は青海波に放射状の筋のついた当具痕。16は土師器の坏。精良な作りで奈良時代のものか。17は須恵器の坏蓋。つまみは欠損。焼け歪みあり。灰白色。18は土師器の甑か。古墳時代後期ないし飛鳥時代か。胴部内面はヘラケズリ。他はハケメ。19は須恵器の皿。ヘラ切り底。奈良時代。

Fig. 65－5は2区東半Eトレンチ出土の古式土師器の鉢。外面下部ハケメ、内面ケズリ後ナデ。A系統。色調7.5YR 6/6。6・7は東半Aトレンチ出土の古式土師器高坏。同一個体か。ⅢA期新相からⅢB期。5YR 6/6。7の接合法はB1類である（D類との折衷的類型）。

・SX01出土土器

Fig. 65－2はⅡ区褐色土層出土の弥生前期後半の甕形土器の底部。胎土に粗砂礫やや多い。7.5YR 7/4。

Fig. 66－1～21、Fig. 67－1～22はSX01出土。出土位置・レベルによってまとまりがあるので、先にこれを記しておく。Fig. 66－8, 12, 18, 21がA群、Fig. 66－2, 3, 5, 11, 20、Fig. 67－17がB1群、Fig. 66－10, 14、Fig. 67－18がB2群、Fig. 66－4, 9, 16、Fig. 67－3, 4, 12, 13でC群、Fig. 66－1, 2、Fig. 67－2, 9, 14, 20がD1群、Fig. 67－1, 6, 8, 15がD2群、Fig. 66－13, 15、Fig. 67－5, 7, 10がD3群である。二つの群にまたがっているものは破片が分かれて出土したものである。個々の説明の前となるが各群の様式を示す。A群は在地系（A系）と伝統的V様式変容系（B系）からなり、ⅡA～ⅡB期。B1群はFig. 66—4, 11が弥生後期後半～ⅠA期、Fig. 67－17がⅢA期新相の他はⅡB期前後で、ほとんどがA系、Fig. 66－20のみがB系大型壺底部である。B2群は全てA系でⅠA～ⅠB期。C群はFig. 67－12, 13は甕DでもⅢA期古相と新しいが、Fig. 67－3, 4は薄く精巧な作りでⅡB～ⅡC期、他はA系でⅡB期前後（Fig. 66－16は、接合技法はB系だが形態はA系）。D1群は、Fig. 66－1, 2が頸部の太さと短さからⅡA～ⅡB期のA系複合口縁部壺だが、Fig. 67－2, 9, 14はⅡC期ないしⅢA期古相の甕D、同20は弥生中期土器の混入。D2群は、ほぼ全てⅡC期としてよい甕D（Fig. 67－15は口縁部の延びはⅢA期的だが器壁が薄くシャープな作り）。D3群は、Fig. 66－13, 15はA系（15は同形のC－D系精製器種B群脚付鉢の模倣）、他は甕Dでこれらは全てⅡC期としてよい。以上のように、一部に混在があるが、おおむね出土位置で様式的まとまりがあることを記しておきたい。

Fig. 66－1はA系複合口縁壺。内外ハケメ。頸部にM字状となる二条の三角突帯を施す。2.5YR 5/6－5/8。ⅠB～ⅡA期か。2もA系複合口縁壺。口縁部と頸部以下は同一個体でよさそうだが図上復元は一案。頸部の三角突帯は一条。口縁部が広く、頸部が太く短く、バランス的に本来の範型を崩したものでⅡB期以降か。5YA 6/6。3, 4は甕A。3は口縁部の立ち上がりと頸部がしまりからⅡA期以降。10YR 8/3。4は弥生終末（ⅠA～ⅠB期）であろう。10YR 7/4。5はおそらく尖底丸底になる甕A。外面タタキ痕跡あり。他はハケメ。10YR 8/3。6は片口鉢の破片か。B系？ SP2101上層出土。外面に赤色顔料痕跡。10YR 8/2。7はA系の鉢。Ⅱ区北上層出土。ⅠA～ⅡA期。5YR 6/4。8はA系の鉢。薄手の丁寧な作り。内外摩滅するが、ハケメないし板ナデ。10YR 3/3～5YR 5/4。9は甕A。外面タタキ痕跡。他はハケメ。頸部しまるⅡA期以降の型式。5YR 6/6。10は甕A。底部外面付近にタタキ。尖底化した凸レンズ底でⅠA～ⅠB期。5YR 5/8～7.5YR 5/2。11は弥生後期後半からⅠA期を下限とする甕A。レンズ底。底部外面は板ナデ。2.5YR 5/6～7.5YA 7/6。12はA系の鉢。外面タタキ痕跡。丸底で坏状に浅く、ⅡA期以降。丁寧な作り。7.5YR 6/4～10YR 8/3。

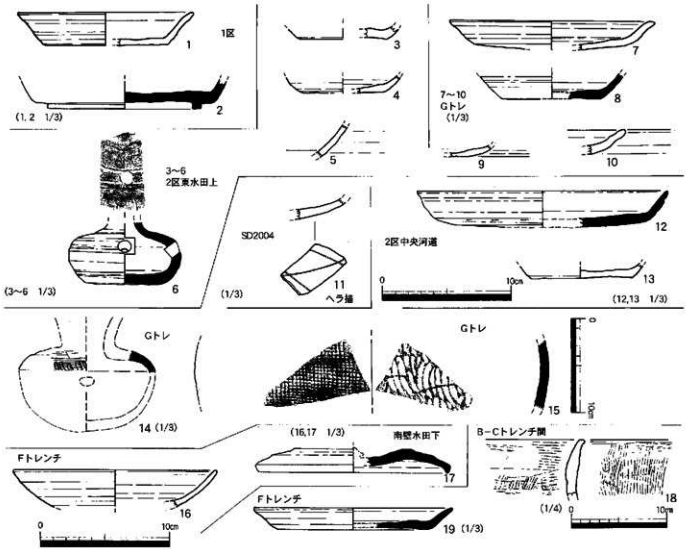


Fig. 64　1・2区出土土器(1) (S=1/3, 1/4)

13はA系の壺の底部。丸底。外面ケズリ、内面板ナデ→オサエナデ。7.5YR～5YR7/6～7/4。古墳初頭ⅡA期以降。14はA系の小型脚付鉢の脚部。外面タテハケ、内面ヨコハケおよびナデ。裾部端部面取り。古墳初頭には外来系でも類似形態品があるが、裾部端部形状などからA系統。2.5YR5/4。15も脚付鉢。脚部外面ヨコナデ、他は摩滅するがナデか。10YR8/4～4/4。鉢部を先に作り倒立して脚部を付加したか。16はB系統の高坏（脚裾の充填接合部）か。ただし形態は高坏Aに類似。外面タテハケ、内面シボリあり。坏部内面は縦のミガキ。坏部と脚部の接合はB4またはB/C類（Fig. 111参照）。5YR～7.5YR6/6。17はおそらくB系の小型器台の受部。外面は摩滅、内面ナデ。7.5YR6/6。

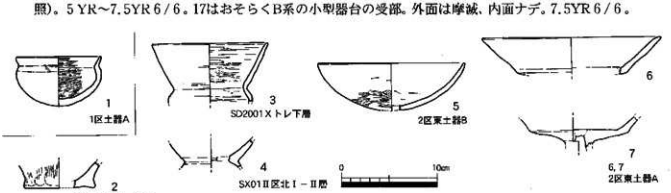


Fig. 65　1・2区出土土器(2) (S=1/4)

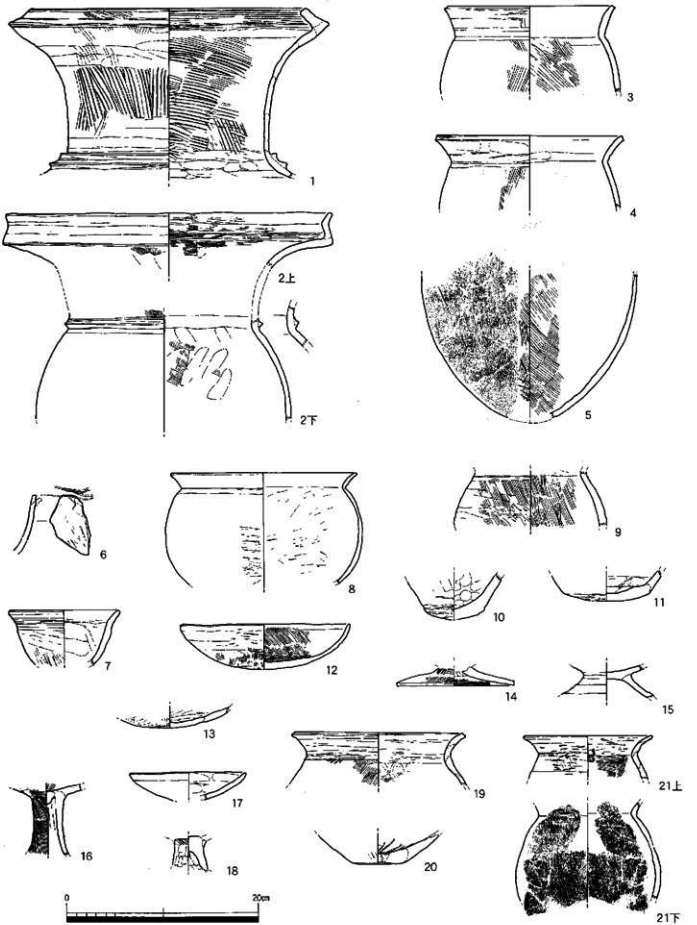


Fig. 66　2区SX01出土土器(1) (S=1/4)

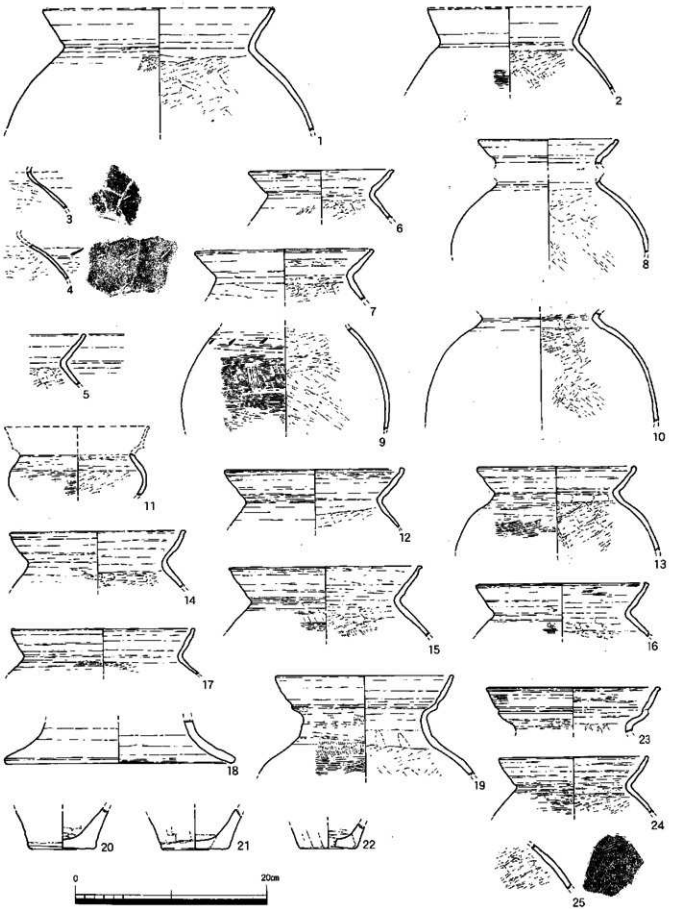


Fig. 67 2区SX01(2)・SD2001出土土器 (S=1/4)

18はB系統技法に寄る庄内系塊状高坏の模倣品と考える。脚部柱状部である。坏部との接合面は刻みがある。外面は板ナデ、内面ナデ。5YR～7.5YR 6/4。19はB系統の甕。甕B 6 型式でⅡA期以降。口縁部は短く外反する。胴部は、外面は粗いハケ、内面ハケ→ナデ。頸部や口縁部のヨコナデに隠れて右上がりのタタキの痕跡がわずかにある。口縁部の端面はむしろ甕A的な手法。7.5YR 7/4～10YR 6/4。20はB系統壺の底部。断面を観察すると、輪台充填法の可能性が高く、内面は編状板ナデである。突出しない半底でⅡA期以降。7.5YR 7/6～10YR 7/3。21は甕B。B 3ないしB 4 型式。ⅠB～ⅡA期。外面は、口縁部タタキ→ヨコナデ、胴部はタタキ→タテハケ。内面は、口縁部ヨコハケ→ヨコナデ、胴部はハケメ。7.5YR 5/2～10YR 7/2。

Fig. 67－ 1～10，12～17は北部九州型布留甕である甕D。1，2は推定だが長胴気味の器形だろう。1は口径23.4cm（復元）、口縁部長（頸部屈曲点から口縁部端部までの長さ、以下「口長」）4.6cm。口縁部は凹凸が甘いヨコナデ。胴部外面は摩滅不明（タテハケ？）、内面はヘラケズリ。5YR 6/6～6/8。2は口径17.3cm（復元）、口長4.1cm。口縁部は直線的に上に延び、端部は丸めるか。胴部は、外面摩滅するがヨコハケ痕跡、内面ヘラケズリ。5YR 6/6～6/8。器壁断面10YR 7/2。1，2はⅡC～ⅢA期古相。3，4は同一個体か。いずれもきわめて薄く丁寧な作り。他がⅢA期に下る資料が多いが、これはⅡB～ⅡC期。外面は摩滅するが、列点文がある。7.5YR 7/6～5/6。5は口長3.6cm。内面ヘラケズリが頸部屈曲の直下まで来るやや古相タイプ。ⅡC期か。7.5YR 7/3～5YR 6/6。6は口径15.4cm（復元）、口長3.3cm。口縁部のヨコナデの凹凸がやや明瞭。外面は、口縁部ヨコハケ→ヨコナデ、胴部は摩滅するがナナメハケ痕跡。内面は、胴部ヘラケズリ。5YR 6/6～7/6。ⅡC期か。7～9は胴部ナデ肩気味の器形。7は口径18.6cm（復元）、口長3.55cm。外面は頸部の下までヨコナデ、内面は口縁部ヨコハケ→ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。5YR～7.5YR 7/4。ⅡC期。8は口径14.7cm（復元）、口長3.1cm。口長は短いが頸部はしまる（頸部径11.0cm）ので、ⅡC期だろう。外面は摩滅し調整不明、内面はヘラケズリ。9は山陰系二重口縁壺になる可能性もあるか。外面は、肩部ヨコハケ→ヨコスリナデ、以下断続ヨコハケ、一部タテハケ。肩部に雨粒形列点文。内面はヘラケズリ。丁寧な作りでⅡC期か。7.5YR 7/4。10はやや肩の張る器形。器壁は薄く、ⅢA期古相か。外面は摩滅し不明、内面はヘラケズリ。7.5YR 7/6～2.5Y 5/6。11は小型丸底鉢（壺）か、調整とバランスから山陰系二重口縁小型壺か。外面は、肩部ヨコスリナデ、以下断続ヨコハケ。内面は上位はナデ、以下ヘラケズリ。10YR 7/3。12は口径19.4cm（復元）、口長4.05cm。外面は口縁部～頸部下まで回転ヨコナデ、内面は口縁部ヨコハケ→同転ヨコナデ、頸部ナデ、以下ヘラケズリ。7.5YR 7/6～6/3。器壁断面は黒灰色。ⅢA期古相か。13は口径16.8cm（復元）、口長3.2cm。口縁部は凹凸があり、端部は上方に肥厚し丸くおさめる。頸部もしまる。ⅢA期古相。外面は、口縁部～頸部はやや断続的な回転ヨコナデ、頸部下～肩部はヨコハケ→ヨコナデ、以下やや断続的なヨコハケ。内面は、胴部ヘラケズリ、頸部ナデ、口縁部回転ヨコナデ。5YR 6/6～7.5YR 7/4。14は口径18.8cm（復元）、口長3.75cm。口縁部はやや内湾するも上方に延び、端部は水平に近い小さい面を有する。外面は、口縁部～頸部下まで同転ヨコナデ。内面は、口縁部回転ヨコナデ、頸部横のナデ、以下ヘラケズリ。頸部外面に列点文（刺突文）状のキズが一つある。ⅢA期古相。5YR 7/6。15は口径20.3cm（復元）、口長4.35cm。口縁部はヨコナデの凹凸あるが直線的に延び、やや斜めだが水平に近い端面を有する。ⅢA期古相。外面は、口縁部タテハケ痕跡→回転ヨコナデ（～頸部）、胴部はタテハケ痕跡→肩部に回転ヨコハケ。内面は、口縁部同転ヨコナデ、頸部下ナデ、胴部ヘラケズリ。5YR 7/6～5/4。16は口径18.3cm（復元）、口長3.65cm。口縁部はヨコナデの甘い凹凸があるが直線的に延び、端部はやや斜めの少し凹む面を有する。ⅡC～ⅢA期古相。口縁部は、内外回転ヨコナデ。胴部は、外面タテハケ→肩部ヨコハケ、内面はヘラケズリ。7.5YR 5/2～7/4。17は口径

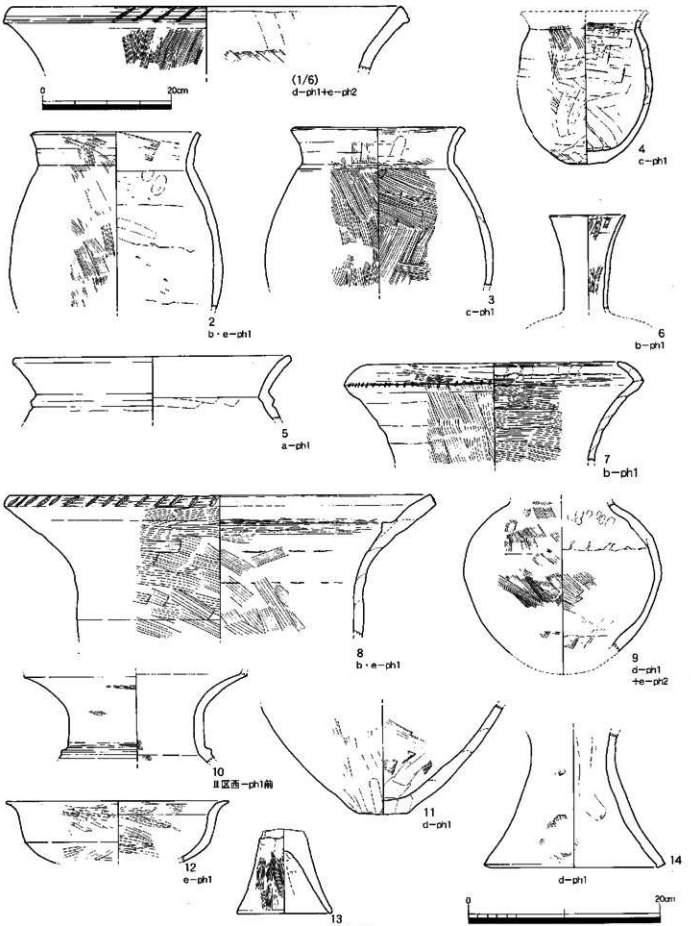


Fig. 68　3区SX3041出土土器(1) (S=1/6, 1/4)

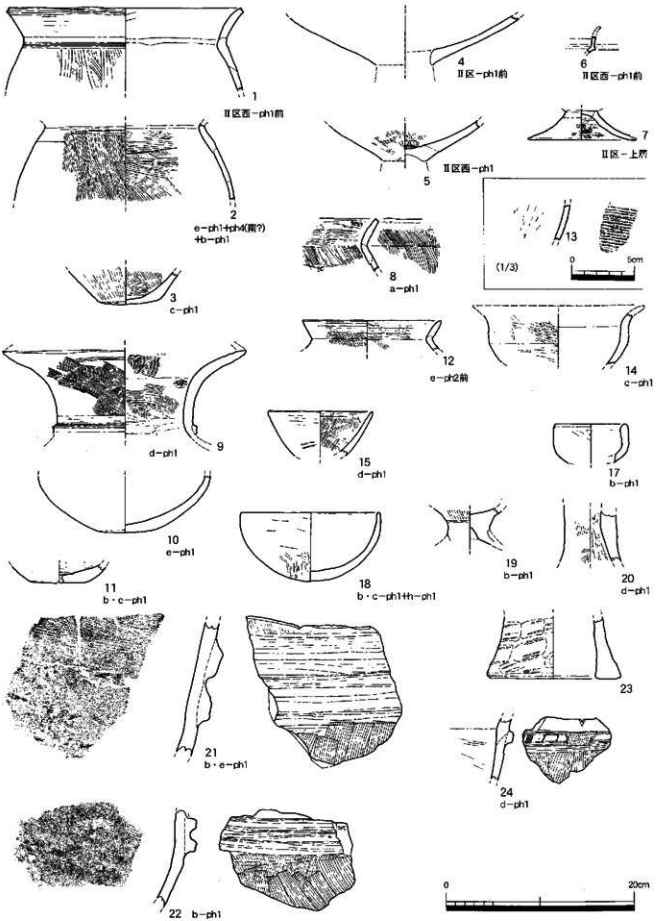


Fig. 69　3区SX3041出土土器(2) (S=1/4, 1/3)

19.4cm（復元）、口長3.2cm。口縁部は短いが、かなり上方に立ち上がり、端部にやや丸いが水平に近い面を有する。ⅢA期古相。口縁部は内外回転ヨコナデ。胴部は、外面タテハケ→ヨコナデ、内面ヘラケズリ。10YR 8/2～7.5YR 7/6。18は弥生時代後期前半の高坏の脚部裾部か。7.5YR 7/6。19は山陰系二重口縁壺。口径18.8cm（復元）。口縁部は、二次口縁部の根元がヨコナデで凹む他は凹凸が少なく、端部は肥厚せず上方にやや丸みを有する面がある。外面は、口縁部は回転ヨコナデ、頸部はタテハケ→ヨコナデ、胴部はタテハケ→肩部ヨコハケ。内面は、口縁部回転ヨコナデ、頸部ナデ、胴部ヘラケズリ。ⅡC期か。5 YR 7/8～6/8。20～22は弥生時代中期前半の甕の底部である。

Fig. 110－1、2もSX01出土。1はA系の壺ないし甕。外面は、口縁部ナデ、胴部タタキ→ナデ。内面は、口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ。7.5YR 6/6～8/3。粗雑な作りで、ⅡB期以降の在来系範型が崩れた段階である。2はA系の鉢か。底部は広い凸レンズ底。

・ SD2001出土土器（Fig. 67－23～25）

23は山陰系二重口縁壺の口縁部。口径18.4cm（復元）。二次口縁部はやや短く、端部がやや肥厚する。口縁部は内外回転的なヨコナデ（岩干の擦痕あり）、頸部外面はタテハケ→ヨコナデ。ⅡC～ⅢA期古相か。10YR 7/2～7.5YR 7/4。24は甕D。口径15.8cm（復元）、口長3.6cm。口縁部はヨコナデの凹凸が微妙で甘く、わずかに内湾して立ち上がり、端部はやや斜めの面を有する。ⅢA期古相か。口縁部は、内外擦痕のややある回転ヨコナデ。胴部は、外面タテハケ痕跡→回転的ヨコハケ、内面はヘラケズリ。ⅡC～ⅢA期古相。5 YR～7.5YR 7/4。25は甕Dの胴部破片。外面は摩滅するが、複線波状文がある。5 YR 5/6～6/6。

(3) 3区出土土器（Fig. 68～84）

・ SX3041出土土器（Fig. 68～80）

挿図の出土位置の表記で、a～jは小グリッド、Ⅰ～Ⅳは大グリッドであり（Fig. 34）、また層位については遺構の報告の部分を参照されたい。出土状況写真番号を示す「Ph. 1」や「Ph. 2」という表記は、ほぼ層位に対応し（遺構の記述を参照）、「○○＋△△」は同著が接合していることを示す。また図示した遺物数が多いので、以下の記述は詳細な説明を省略せざるを得なかった。

Fig. 68は主にSX3041のⅠ・Ⅱ区—Ph. 1層位出上のもの。1は弥生終末～古墳初頭のA系（在来系統）の大型甕の口縁部。口縁部の端部は広い面となり、斜めのハケメ工具の押圧刻みがある。2.5YR 7/4～10YR 5/3。2～5はA系の甕。2は口径17.9cm、頸部径16.3cm、最大径22.5cm。頸部径／胴部最大径比率は（以下、「胴部比」とする）、1.38。胴部内面の一部にヘラケズリがあり、プロポーションからも新しく、ⅡB期以降か。7.5YR 6/4～7/4。3は口径18.3cm、胴部最大径24.1cm、胴部比1.50。典型的なⅡB～ⅡC期の型式。外面7.5YR 6/3～5/4、一部5 YR 6/6、内面10YR 8/3。4は小型の甕。底部は、平底気味残る不安定な凸レンズ底。ⅠA期前後か。7.5YR 7/4～10YR 7/3。5は頸部に小さい三角突帯を有する甕。弥生後期後半の型式か。10YR 8/5。6は細頸長頸壺。胎土は精製。5YR 6/6～6/4。7は複合口縁壺。口縁部上半の反転部が内湾気味。屈曲部外面に細かい刻目が連続してある。頸部が太い形状からIA期～ⅠB期か。Fig. 66－1、2よりはやや古い型式。口縁部の内湾反転部は袋状口縁壺の名残りだが、弥生終末まで残るのは糸島地方の地域色である。10YR 6/4～6/3。8は広口壺。口縁部の端面にヨコハケ後、ハケメ工具先端で粗い刻目を施す。口縁部内側に粘土帯を貼付け、断面三角形の突帯とする。7.5YR 6/6～10YR 7/4。9は胴部上半内面の調整の状況や内面下部のハケメ、プロポーションからB系の壺と考えられるが、稚拙な作りで変容・折衷品かもしれない。10YR 7/3でやや白っぽく、早良平野から福岡平野の某所の製作か。ⅡA期以降か。10は複合口縁壺で口縁部反転部を欠損。頸部に小さい台形または三角形の突帯を一条。頸部がしまり、ⅠA期かそれ以前

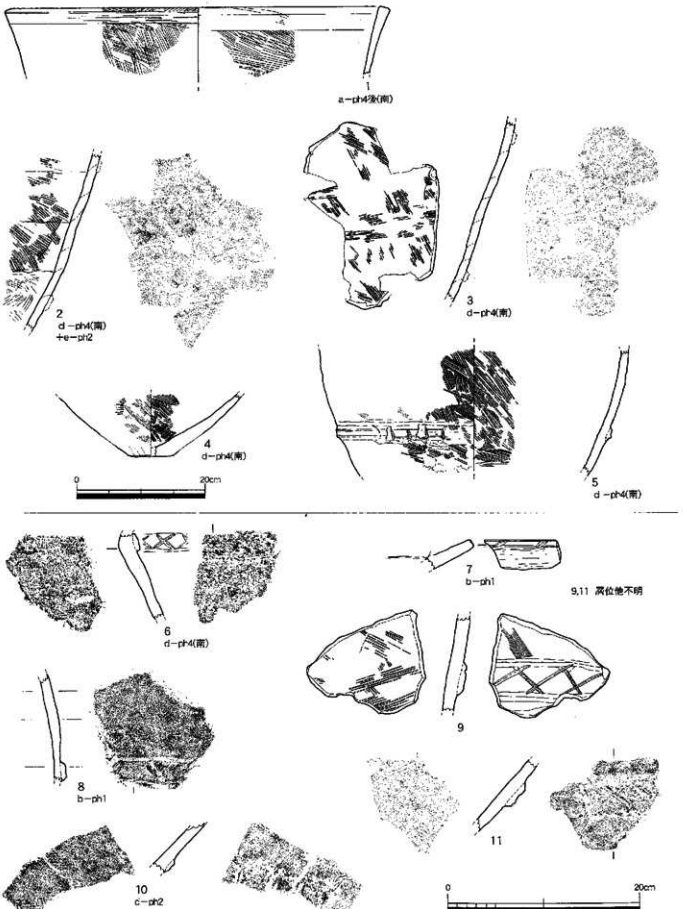


Fig. 70　3区SX3041出土土器(3) (S＝1/6, 1/4)

の弥生後期後半の型式。2.5YR 7/6。11は底部が不安定な小平底の壺。底部外側がわずかに凹み、B系の輪台底部の可能性がある。ⅡA期以降か。7.5YR 6/6～7/4。12はA系の鉢。内外面ともにやや粗い横ミガキ。あまり見ない器形であるが、脚が付くものか。胎土はやや精良。浅黄橙色～にぶい橙色。13はA系の器台で、香形器台の変異か。上部に剥離があり、受部がさらに付くもの。浅黄橙色～明黄褐色。弥生終末（ⅠA～ⅠB期）。14はA系の器台。器形が細く弥生後期後半か。浅黄色～浅黄橙色。

Fig. 69はⅡ区のPh.1相当層位のもの。1～3は在来系の甕。1は口径24.4cm（復元）、頸部径21.7cm。頸部外面はヨコハケ？→ヨコナデ。弥生終末か。10YR 4/2～2.5Y 5/3。2は頸部径17.2cm、胴部最大径23.6cm。ⅡA期以降か。10YR～2.5Y 6/3。3は甕の底部。やや小さい凸レンズ底。ⅠA期か。10YR 7/3～6/3。4，5は高坏A。4は摩滅し調整不明。坏部と脚部の接合法はE類（Fig. 111）。10YR 7/4（内面5YR 6/6）。5は外面ハケメ、内面ミガキ。接合法はC2類。高坏CまたはDの影響でⅡA期以降。5YR 6/6。6は山陰系の二重口縁甕の口縁部片。口縁部屈曲部の三角状となる部分がシャープで古相か（ⅡB期前後）。10YR 8/2～8/3で、色調から早良平野ないし福岡平野からの搬入か。7は精製の小型脚付鉢の脚部。胎土は精良で、C系統か。内面に細かいハケメ。5YR 6/3～7.5YR 7/4。ⅡA～ⅡC期。8は甕A。弥生終末か。10YR 3/2～6/4。9はA系複合口縁壺。頸部がややしまり、後期後半～終末の型式。頸部にM字状に近い三角突帯一条あり。7.5YR 7/6。10はA系壺の底部。凸レンズ底。底部からの立ち上がりが丸みを有し、終末期の型式。10YR 7/3。器壁断面は10YR 5/1。11は甕または壺の底部。平底に近い凸レンズ底。2.5Y～10YR 5/2。12は甕A。口縁部が短く、端部は丸くおさめる。ⅡA期以降か。7.5YR 4/2～5/4。13は筑前型庄内甕（久住1999）の胴部小片。外面細かいタタキ、内面ヘラケズり。器壁4mm。10YR 8/2～7/1、内面は黒灰色。14はA系の鉢。外面ミガキ。Fig. 68－12に類似。10YR～7.5YR 7/3。15は右上がりのタタキ痕跡があり、内面丁寧なハケメ。B系の小型鉢。2.5Y～10YR 7/3～5/2。福岡平野からの搬入か。17は手ずくね的な作りの小壺。きわめて精良な胎土。7.5YR 6/6～6/4。18はA系の小型鉢。ほぼ丸底。ⅠB～ⅡA期か。7.5YR 7/4。器壁断面7.5YR 4/1。19はA系の脚付鉢か。7.5YR 7/6～10YR 8/4。20は器台か。法量的に弥生中期か。5YR 6/6、内面10YR 7/2。21はA系大型甕の胴部下半破片。二条一組の突帯だが、突帯は断面扁平化した台形で、ⅠA～ⅡA期か。10YR 7/4。22はA系中型ないし大型壺の胴部破片。二条一組の突帯で、突帯断面は突出度がある台形。後期後半～ⅠA期。7.5YR 6/4～10YR 7/3。23はA系の器台。外面粗いタタキ→ナデ。粗雑な作り。後期後半～終末。10YR 7/4～7/2。24はA系の大型鉢の頸部下の破片か。断面台形ないし凸字状の突帯を有する。突帯頂面にはハケメ原体端で軽い押圧を施す。ⅠA期前後か。10YR 7/4～7/3。

Fig. 70はA系の大型甕と大型壺を集めた。1は口径60.2cm（復元）。口縁端部は厚くなり、斜め外方に面を有し、ハケメ工具先端で押圧を施す。7.5YR 6/8～5/4。2は3と同一の可能性があるが異なるかもしれない大型甕胴部破片。外面ハケメ、内面もハケメ。外面には摩滅し不明瞭だが一条の突帯があった剥離痕跡がある。橙色を呈し、一部黒斑。3は大型甕胴部破片。外面ハケメ、内面はハケ→ナデか。2と同様に二条の突帯剥離痕跡がある。明黄褐色～黄橙色。4は大型甕の底部。小さいやや凸レンズ気味の平底。大型甕の丸底化は遅いので、ⅠB期前後か。橙色～褐色。2（または3）と同一か。5は大型甕胴部破片。胴部下半の突帯が一条ある。突帯は、断面M字に近い台形で扁平化している。3と同一の可能性がある。橙色～褐色。6は大型甕の頸部破片。扁平な突帯を有し、×印状にハケメ工具先端による刻目を連続して施す。2と同一の可能性がある。橙色。7は大型壺の口縁部。口縁部内側にやや幅広の扁平な突帯を貼付するものだが剥離している。口縁部端部の面にハケメ工具による斜めの刻目がある。にぶい橙色。8は大型壺の胴部か。7と同一の可能性がある。扁平な突帯に斜めのハケメ工具に

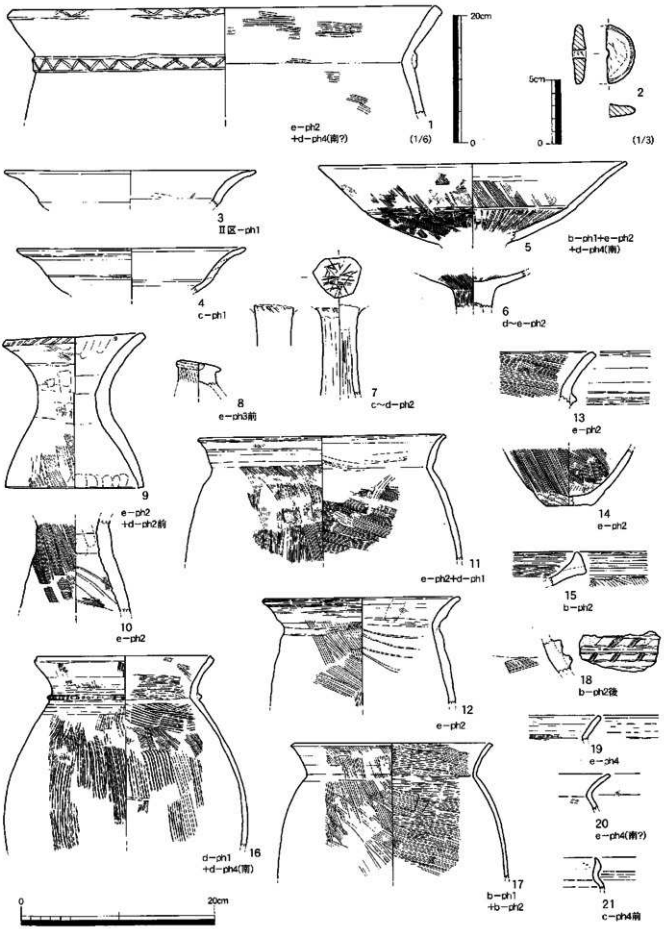


Fig. 71　3区SX3041出土土器(4)（S＝1/6，1/4，1/3）

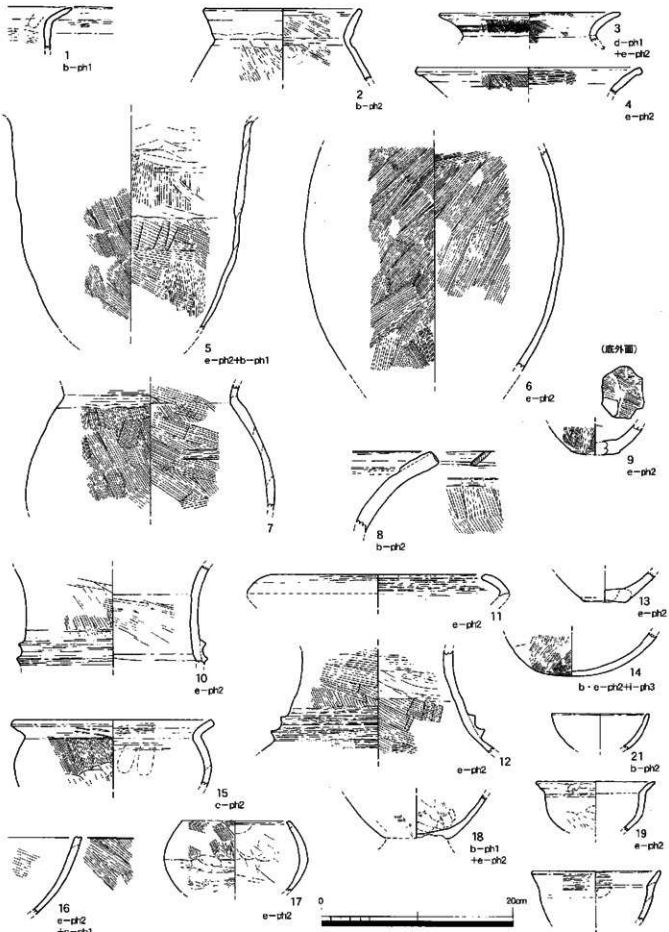


Fig. 72　3区SX3041出土土器(5) (S=1/4)

よる刻目を施す。にぶい橙色～にぶい褐色。7，8は突帯からⅠB期以降。9は大型壺の胴部中位破片。やや幅広の扁平突帯に連続山形状にハケメ工具先端で刻目を施す。橙色～にぶい橙色。11と同一か。11は胴部下位の破片。扁平な突帯に×印状に連続してハケメ工具先端による刻目を施す。橙色～にぶい橙色。突帯から9，11はⅡA期以降で，Fig．71－1と同一の可能性がある。10は大型甕ないし壺の胴部下位破片。扁平な突帯を有し，縦位のハケメ工具による刻目を有する。2，4，6と同一の可能性もある。橙色～にぶい橙色。

Fig．71は1～5はSX3041－Ⅱ区のPh．1相当層位を，以下は主としてⅡ区Ph．2相当層位資料を掲げた。1はA系大型甕。口径68．0cm（復元）。頸部に扁平な突帯を有し，頂面に連続山形文状にハケメ工具先端による刻目を施す。口縁部端部の面にも同様の刻目を施す。ⅡA～ⅡB期か。橙色。2は上製紡錘車。径4．6cm。精良な胎土。にぶい褐色～灰褐色。器壁断面は暗灰色。3～7は高坏A。3，4は坏部上半がやや短く，外反する比較的古相の高坏。3は坏部上半長／坏部屈曲部径の比率（以下，「坏部比」とするが0．35。溝口孝司の分類のAⅢ型式にあたるが（溝口孝司1988「古墳出現前後の土器相」『考古学研究』第35巻第2号），その中でも古相（溝口1988で資料が空白の坏部比0．57～0．63をAⅢ型式新相とする）。久仕編年ⅠA期か。7．5YR 6／4。4は坏部比0．57でAⅢ型式新相。ⅠA～ⅠB期。7．5YR 7／6～5YR 6／8。5は口径32．5cm，坏部比0．67でAⅣ型式の在来系高坏。AⅣ型式でも古相（溝口分類を細分し，坏部比0．63－0．70を古相，0．71－0．79を中相，0．8－0．87を新相とする）。また坏部上半と下半の屈曲稜線が不鮮明化しているので，同じAⅣ型式古相でも新相のものでありⅡA期に下る資料（屈曲稜線が比較的明確なAⅣ型式はⅠB期に出現）。10YR 6／5。6は坏部下半から脚柱状部上部で，接合法はD類か。10YR 7／3。7は脚柱状部で，接合法はC2類。高坏D等の影響でありⅡA期以降。10YR 7／2～6／3。8はA系の支脚ないし香炉器台。上面中央が凹む。10YR 6／4～7／4。9はA系の器台。口縁部に斜めの刻目があり，弥生終末か。10YR 7／2～6／3。10も器台（A系）。5YR 6／4。11～14は甕A。11は口径26．2cm（復元），胴部比1．26。胴部上位に重心があり，ⅠA～ⅠB期。7．5YR 7／4。12は胴部が張らないタイプの甕A。口径20．8cm，胴部比1．2。ⅠA期前後に多い型式。10YR 6／2～7／4。13は頸部に小さい断面三角突帯を有する甕A。後期後半～ⅠA期。やや大型品か。7．5YR 6／6～6／4。14はやや不安定な半底の甕。外面の底部近くはケズリ。弥生後期中頃か。5YR 4／1～内面10YR 7／6。15はA系の広口壺の口縁部。口縁部内側に断面三角形の粘土帯を貼付ける。口縁部外側の面は擬凹線状に見えるヨコハケ。10YR 7／3。16は長胴の広口壺（A系）。頸部に断面三角形の小さな突帯を巡らせ，小さい刻目を連続して施す。10YR 7／4～5／4。福岡平野からの搬入か。ⅠA～ⅠB期か。17は甕A。口径21．3cm，胴部比1．36。胴部中位に重心が来るもので，ⅠB～ⅡA期か。10YR 7／2～6／3。18は大型のA系壺の頸部破片。二条一組の突帯で，突帯の断面は小さい台形。ハケメ工具先端で斜に刻目を施す。ⅠA期前後か。10YR 7／4～4／2。19は甕Aの口縁部。口縁部が短い。7．5YR 5／3～5／4。20は外反し短い口縁部の甕。B系統の可能性がある。7．5YR 7／4～7／3。21は鉢であろうが，摩滅し調整不明。あるいは形態から手焙形土器の鉢部の可能性もある。胎土は精良だが砂礫をやや多く含む。橙色。

Fig．72はⅡ区のPh．2相当層位資料を主に掲げた。1は甕Aの口縁部だが，口縁部が外反し短く，端部が細く丸めるもの。5と同一個体と思われ，胴部が全く張らないタイプであり，長胴の鉢とでも言うべきか。7．5YR 7／4～10YR 7／2。5は1と同一個体であろう長胴の鉢と言うべき器形の甕。胴部の器面の凹凸が顕著。ⅠA期に多い型式。7．5YR 6／6～10YR 7／3。2は甕A。口径16．7cm（復元）胴部比1．5。ⅡB期以降の型式。7．5YR 7／3～7／2。3は外反する口縁部で，口長は短く，端部は丸めるものでB系統の可能性が強いもの。口径19．1cm（復元）。10YR 4／2～内面7．5YR 7／3。福岡平野からの搬

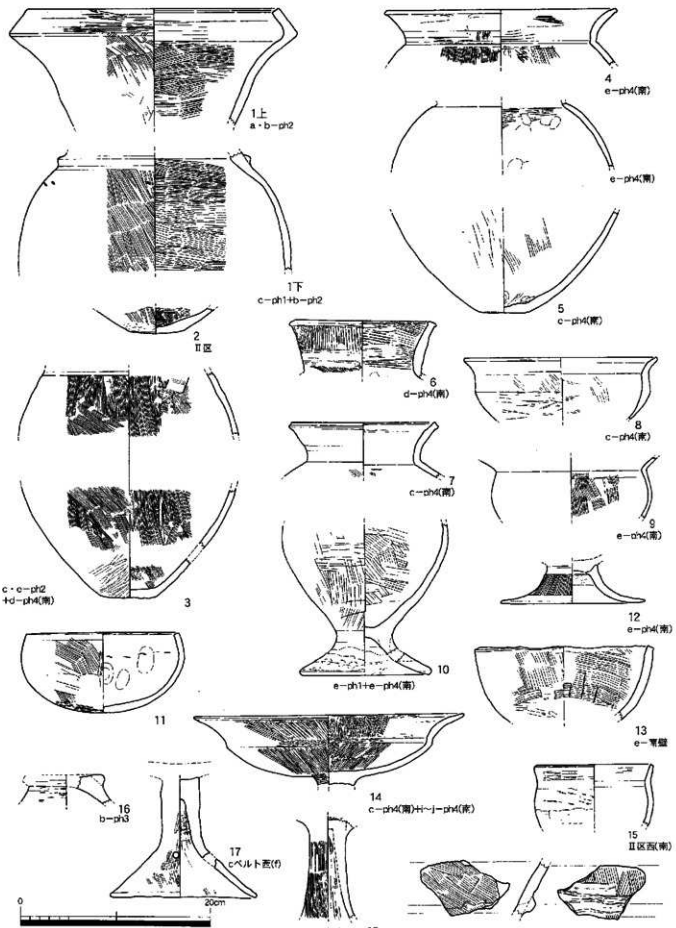


Fig. 73　3区SX3041出土土器(6) (S=1/4)

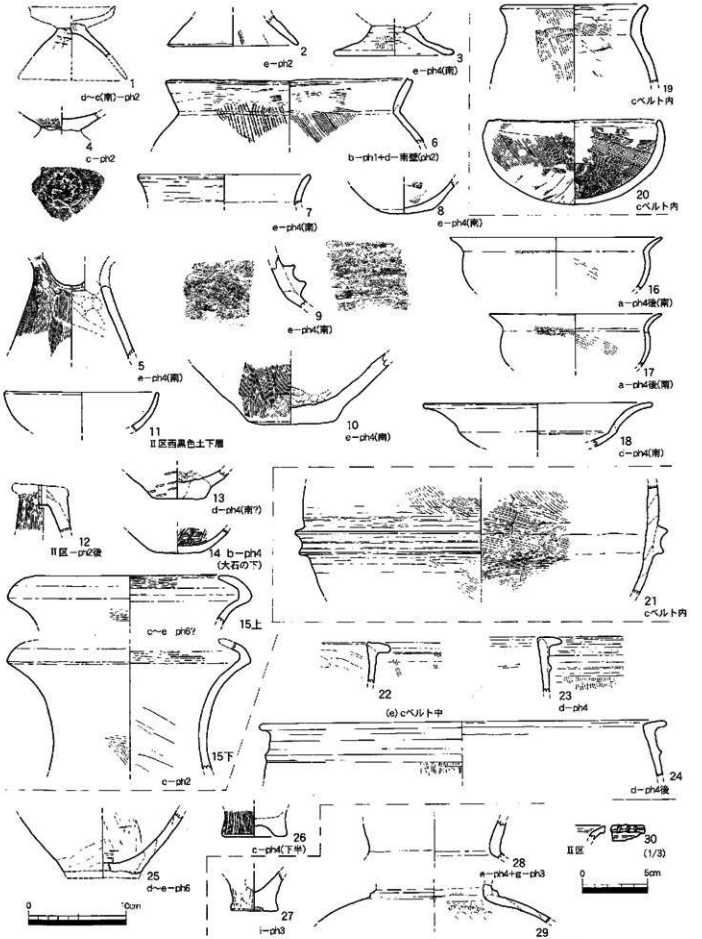


Fig. 74　3区SX3041出土土器(7) (S=1/4, 1/3)

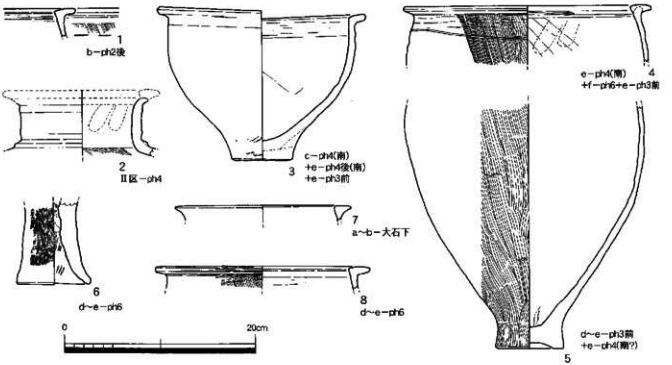


Fig. 75　3区SX3041出土土器 (8) (S=1/4)

入か。4は甕Aで口縁部の立ち上がりが低いもの。弥生後期後半か。7.5YR/1～5/3。6は甕Aで胴部中位に重心があり長胴化したもの。ⅠB期前後の型式。10YR 7/3。7は甕Aで、頸部がしまり胴部が球形化した新しい型式。胴部比1.43。ⅡB期以降。10YR～2.5Y 7/2。8はA系広口壺。薄く扁平で幅広の粘土帯を口縁部内側に貼付ける。口縁部の端部面にはハケメ工具による斜めの刻目がある。ⅠB期前後か。10YR 6/4～7/4。9は甕Aの底部。やや小さい凸レンズ底。底部から胴部への立ち上がりラインは若干凹む部分があり、弥生後期後半新相～ⅠA期か10YR～2.5Y 4/2。早良～福岡平野からの搬入品の可能性あり。10はA系複合口縁壺の頸部。頸部付け根に二条の三角突帯を有する。頸部の太さからⅠB期以降。10YR～2.5Y 4/2。11，12は同一個体の可能性のあるA系複合口縁壺。11は口縁部反転部が丸みを帯び内湾する。12は頸部に二条の突帯を有する糸島地方の地域色を持つ壺（10も同様）。断面三角突帯が二条だが、一見M字状にも見える。頸部の太さから後期後半～ⅠA期前後。11は10YR～7.5YR 7/4、12は7.5YR 6/6。13は壺の底部だが、輪台成形の可能性があり、B系統か。底部は突出せずⅡA期以降だろう。7.5YR 7/4～7/6。14はA系の壺の底部。完全に丸底化しており、ⅡA期以降。10YR 7/2～7/3。15はA系の鉢。口縁部外面にタタキ痕跡、胴部下半外面はケズリ。ⅠA～ⅠB期か。5YR 7/4～6/6。器壁断面は10YR 5/6。16はA系の鉢。深い器高で、口縁部の端面が明瞭なタイプでⅠA期前後か。10YR 5/2～7/3。17はA系の体部が内湾する鉢で、あるいは脚部が付くものかもしれない。体部下半外面はハケ→ケズリ。弥生終末であろう。7.5YR 6/2～7/4。18はA系の脚付鉢。脚部との接合面が剥離する。脚部との接合法は付加法で、おそらくⅡA期以降。胎土は精良。10YR 4/6～4/3。19，20はA系の小型鉢。畿内系小型丸底壺（鉢）と一見類似するが、全くの別物（別系統）。19は、外面下半はケズリ。口縁部の形態と手法はB系の影響か。10YR 7/3～8/2。20は頸部の屈曲が曖昧な鉢。7.5YR 6/6～6/4。21はA系の小椀状の鉢。7.5YR 7/4、器壁断面7.5YR 4/1。

Fig. 73はSX3041Ⅱ区のPh.2層位相当と「Ph.4南」（Ph.1層位相当）を主に掲げた。1はA系複合口縁壺。口縁部反転部は直線的。頸部と胴部に横のハケメが丁寧にびっしりと施されるのが特徴的。頸部の付け根は低い台形突帯が巡る。肩部に米粒形状の列点文があり、畿Dからの要素の借用か。頸部の

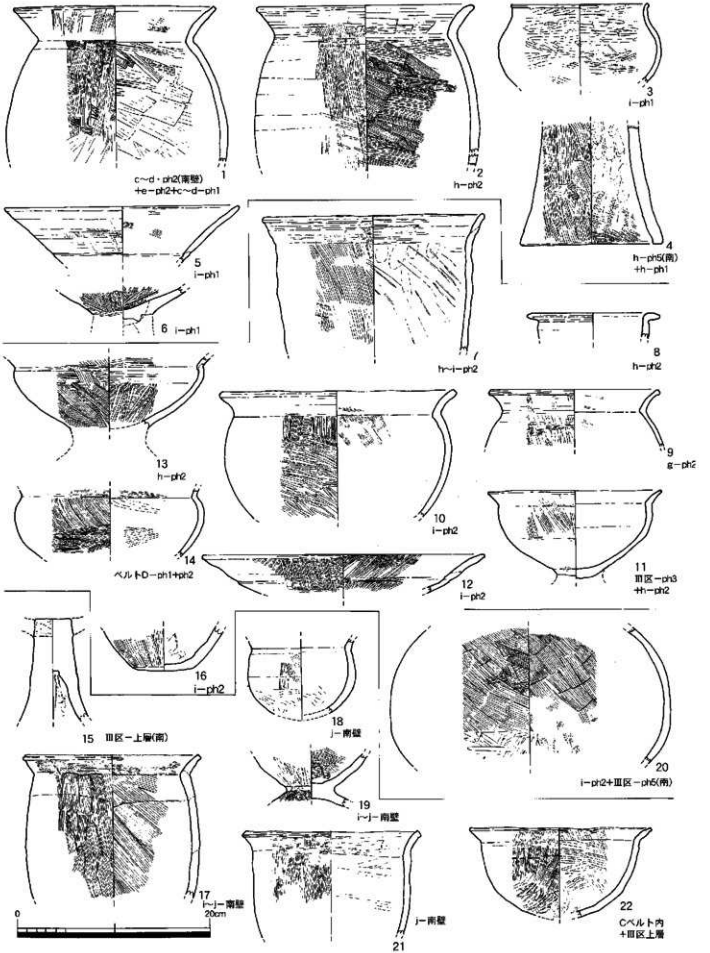


Fig. 76　3区SX3041出土土器 (9) (S=1/4)

太さも勘案してⅡA期以降。10YR 7/3～6/4で、あるいは早良～福岡平野方面からの搬入品か。2は1の底部の可能性がある。小さい凸レンズ底を呈し、底部の器壁が薄い。底部内面調整は撫状ハケメであり、底部成形は輪台の可能性がある。B系とA系の折衷か。10YR 7/3～6/4。3は在来系の甕A。外面は、胴部下部～底面はミガキ。底部は不安定な平底。後期後半。10YR 7/4～7/6。4は口縁部の形状からB系の甕。胴部外面はタテハケでB4～B5型式。頸部にタタキ痕跡。7.5YR 6/2～6/5。5は不安定な平底(わずかに凸レンズ底状)で後期後半の甕。底部内面は顕著なオサエナデ(ハケメ痕跡後)。10YR 7/3～7/6、内面10YR 7/3～7.5YR 6/4。6は口縁部が直立気味の甕A(短頸直口壺の可能性もあるが)。口縁部端部は、内外に汚く拡張する感があり、頸部がしまることも加え在来系範型が崩れたⅡB期以降の型式か。5YR～7.5YR 6/4。7は在来系の広口壺。口縁部端部が内外に少し拡張し、端面はわずかに凹線状となる。後期後半か。2.5YR 7/6～7/8。8はA系の鉢。体部外面上半はミガキ、下半はハケ→ナデ。10YR 7/3～6/4。9はA系の鉢。5YR 6/6～6/8。8、9は弥生終末か。10は脚付の甕。一応A系とするが、佐賀平野から肥後北部系統の可能性。外面は、胴部タテハケ→一部ヨコハケ、脚部はナデ。内面は、胴部ハケメ、底部ナデ、脚部ナデ、脚裾部ケズリ→ナデ。5YR 6/3～6/6、内面7.5YR 6/6。胎土に長石、石英を多く含み、雲母、角閃石のほか白雲母があり搬入品の可能性がある。11はA系の鉢。底部はほぼ丸底。口縁部端部は面取り。体部内面中位に爪状痕。器高やや深く、体部内湾し、ⅠA期前後か。10YR 7/3～7/4。12は脚付鉢。A系か。5YR 6/4、内面10YR 7/6。13はA系の鉢。ⅠA～ⅠB期。10YR 7/4～5/3。14は一見高坏Aだが、接合法がA3類で、17と接合し、むしろB系統の高坏か。坏部比は0.45だが(溝口分類のAⅡとAⅢの中間)、異系統ならば型式は別の評価が必要。坏部内外面ともに顕著なヘラミガキを施す。7.5YR 6/6～10YR 7/6。17は上面の接合剥離面で14と接合する高坏脚部。外面はミガキ。内面は、柱状部はシボリ→横のケズリ、以下ナデ。接合法や柱状部内面臭と坏部内底の間が厚く、A系統と異なる。10YR 7/3～5/3、内面は5YR 4/1。14、17ともに器壁断面が黒灰色。また胎土などから福岡平野からの搬入品か。15はA系の小型鉢。体部外面は、上半タタキ→ナデ、下半ケズリ。7.5YR 7/3～7/4。ⅠB～ⅡA期かいずれか。16はA系の壺形器台か。外面タタキ→ナデ。7.5YR 7/8～6/6、内面7.5YR 7/3。18はA系高坏の脚柱状部。接合法はE類。坏部内面底はハケメ→ミガキ。5YR 5/8～7.5YR 7/4。19はA系のやや大型壺または甕の胴部下部。台形の突帯を巡らす。10YR 7/4～7/3。ⅠA～ⅠB期。

Fig. 74は1～21が主にSX3041－Ⅱ区のPh.2相当層位を掲げた。22～30は弥生前期～中期の土器で、多くはPh.6層位である。1は精製の小型器台の脚部。外面は裾部方向への板ナデ、内面はナデ。上部接合面は刻みがあり、中央に針穴状軸芯痕跡あり。脚部は内湾気味で古相。ⅠB～ⅡA期か。10YR 7/3～7/4、器壁断面は暗褐灰色。砂礫少量の水漉胎土。2は脚付鉢またはB系小型器台の脚部か。7.5YR 6/6、内面10YR 7/3。3はA系の小型脚付鉢の脚部。内面はケズリ→ナデ。ⅡA期以降か。なお外面に朱圧痕あり。7.5YR 6/2～7/4。4はA系の高坏ないし脚付鉢の坏(鉢)部。接合法はA3類か。ⅡA期以降だろう。10YR 6/4～6/3。5はA系の器台だが、受部に窓状の円形の抉りがある。豊前系とされる器台は径の広くなる裾部に窓状抉りがあるのでこれと少し異なる。10YR 4/2～5Y 6/3で、色調が糸島ではあまり見ない。搬入品の可能性もあるが、何処の製品か不明。6は甕A。口径24.9㎝(復元)だがもう少し小さい可能性。いずれにしても頸部がしまる型式でⅡA期以降か。10YR 3/2、内面2.5Y 6/2。雲母、角閃石やや目立ちいずれかからの搬入品か。7は甕AかA系の短頸広口壺か。7.5YR 5/2～4/1、内面7.5YR 7/4。8は甕Aの底部。凸レンズ底。ⅠA～ⅠB期。7.5YR 7/4～7/3。9はA系複合口縁壺の頸部。三角突帯が二条結合してM字状となる。終末であろう。10YR 7/3～7/4。10はA系の大型壺の底部。平底に近い凸レンズ底で、底部から一度外反気味に立ち上がる

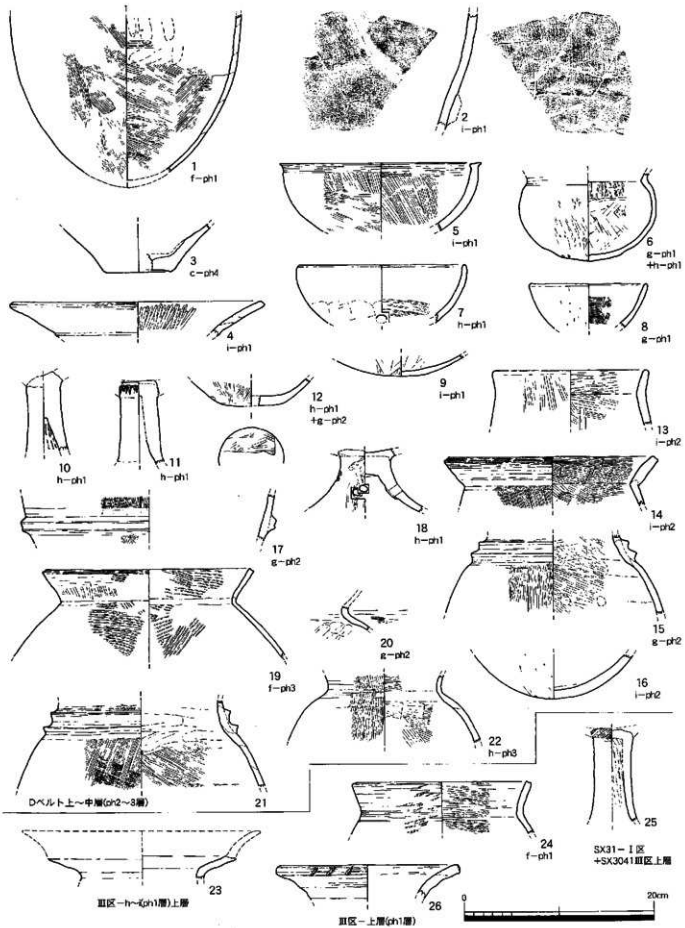


Fig. 77　3区SX3041出土土器 (1) (S=1/4)

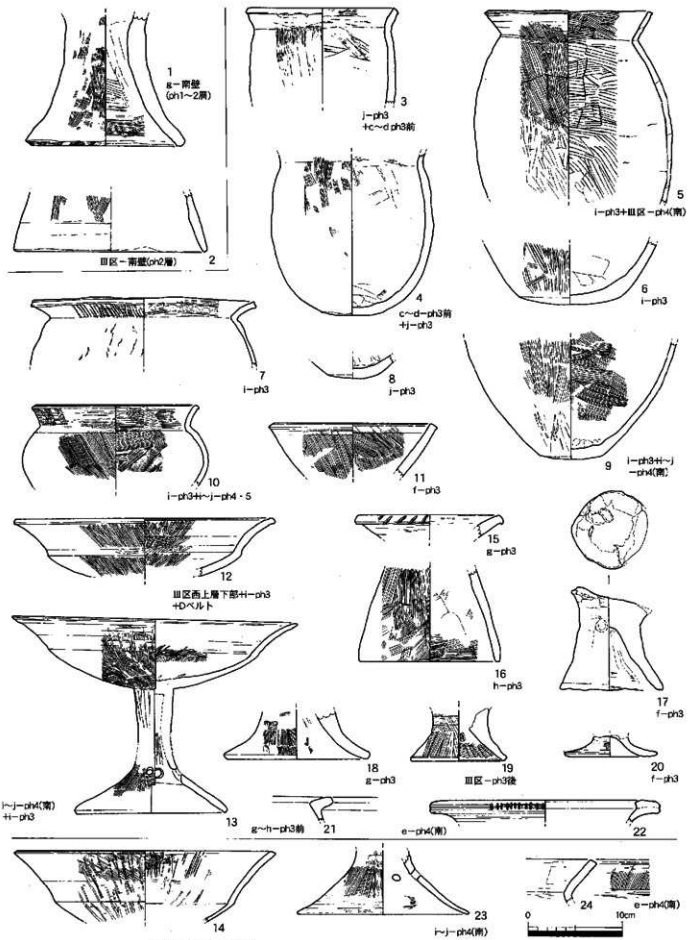


Fig. 78　3区SX3041出土土器(1)　(S=1/4)

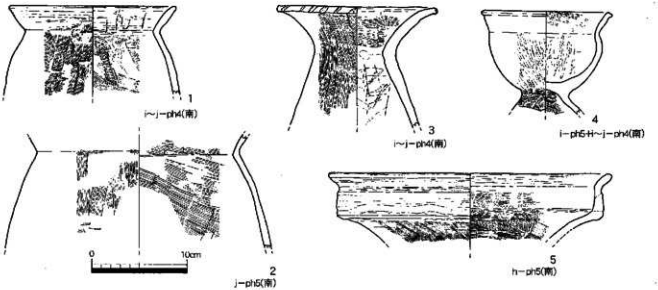


Fig. 79　3区SX3041出土土器 (2)　(S=1/4)

後期後半のもの。底部内面オサエナデ。2.5Y 6/3～5/2。11はA系の塊状の鉢。7.5YR 7/4～10YR 7/3。12はA系斉形器台の小型品。5 YR 5/8～6/6。13はB系の壺の底部。外面は右上タタキ痕跡、内面はオサエナデ。底部は輪台充填成形。10YR 7/3～2.5Y 7/2。ⅡA期以降か。花崗岩の粗粒を含み、B系（伝統的V様式系）の多い那珂川中・上流からの搬入品の可能性がある。14はA系壺の底部。外面はナデ、外底面はハケメ→ナデ。平底の名残りある凸レンズ底だが、胴部への立ち上がりは丸みを有する。ⅠA～ⅠB期。7.5YR 6/6～5/2。15はA系複合口縁壺。口縁部反転部は内湾するタイプ。頸部のしまりから後期後半の型式。2.5YR 6/8～5 YR 6/6、16、17は同一個体の可能性大。復元径が異なってしまったので両方掲載した。口縁部が外反し、端部をすぼめ丸めるものだが、これはB系ではなくA系の鉢。頸部にかすかな水平のタタキ痕跡。後期後半～ⅠA期か。5 YR 5/8、内面7.5YR 6/6。18はA系高坏。坏部比は0.55でAⅢ型式古相。ⅠA期。2.5YR～5 YR 6/8。19は甕A。胴部内面はケズリ→ナデか。ⅡA～ⅡB期頃の型式。7.5YR 7/4～5 YR 6/8。20はA系の鉢。器高がやや深く、体部は内湾。口縁部端部は丸くおさめる。ⅠA～ⅠB期か。7.5YR～10YR 7/4。21はA系大型壺の胴部中位。M字状突帯を巡らす。後期後半～ⅠA期。5 YR 5/6～7/6、内面7.5YR 7/4。器壁断面の一部暗灰褐色。22～29は城ノ越式から須玖Ⅰ式古段階の土器。22は2.5YR 6/8、内面7.5YR 6/6。23、24は同一個体か。10YR 7/3。25は底部の円板が剥落。須玖Ⅰ式の壺？か。5 YR～7.5YR 7/4～6/4。器壁断面が黒い。26、27は城ノ越式の甕の底部。26は7.5YR 6/6～5/4。27は5 YR 6/8。28、29は壺の頸部前後。7.5YR 7/6～5 YR 6/4。29は5 YR～7.5YR 6/6。30は板付Ⅰ式の甕の小片か。10YR 6/3～4/2。

Fig. 75はSX3041－Ⅰ・Ⅱ区出土の弥生中期土器を掲げた。いずれも城ノ越式の新相から須玖Ⅰ式の古相の微妙な過渡期の土器か。1、4、5、8は甕、2は鉢、3、7は鉢、6は器台である。4、5は同一個体。口縁部の下に一条の沈線が巡る。1は10YR 7/2～7/4。2は10YR 7/4～7/6。3は5 YR 6/4～6/8、内面7.5YR 7/3～6/6。4は10YR 6/2～7/3。5は7.5YR～10YR 6/4。6は7.5YR 7/3。7は5 YR 6/6～6/3。8は7.5YR 7/3～6/3。

Fig. 76はSX3041－Ⅲ区のPh.1～Ph.2相当層位の土器を主に掲げた。1、2は甕A。1は口径21.1cm（復元）、胴部比1.44。胴部外面は、タタキ痕跡→タテハケ。ⅡB～ⅡC期。7.5YR 6/6～6/4。2は口径22.9cm、胴部比1.22。ⅠA～ⅠB期。胴部外面タタキ→タテハケ。7.5YR 4/2～5/6、内面6/3～4/3。3は巾着形の無頸壺。外面はミガキ、内面はナナメハケ→ミガキ。韓半島の瓦質土器の袋状壺

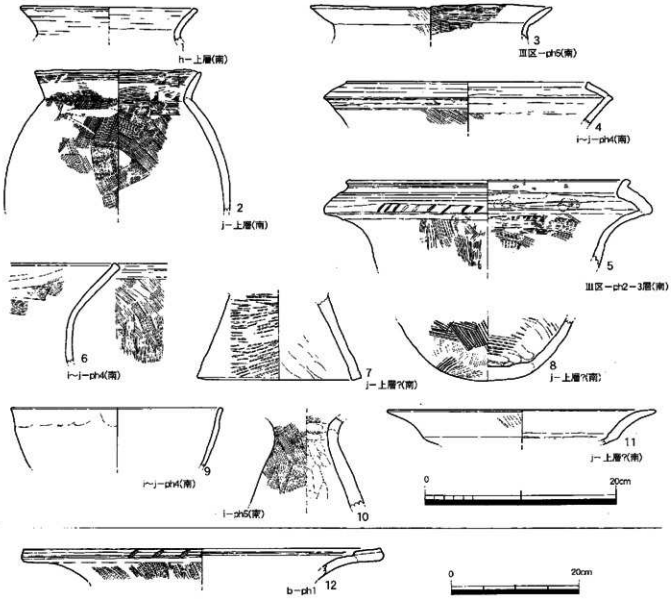


Fig. 80　3区SX3041出土土器(3) (S＝1/4)

の模倣品の可能性もあるが、本例は層位的に弥生終末とみられ、類似品の韓半島での時期と合致しない。ただし系統的に存在する器形ではないので注意される。10YR 6/4～5/4。胎土は砂礫少量で比較的精良。在地品の可能性もあるが福岡平野に胎土が類似する。4はくびれ径と胴部径の差が小さい器台で、弥生後期後半でも古相か。7.5YR 7/4～5YR 6/6。5は高坏A。口径24.4cm。坏部比1.05、AVI型式。坏部の上半と下半の屈曲はわずかな凹みが入るが曖昧。ⅡB～ⅡC期。10YR 7/3～7/4。6は高坏Aの坏部底部。脚部との接合面で剥離。接合法B4類か。10YR 7/3～7/4。7は甕Aだが口縁部と胴部の屈曲が曖昧で、胴部が張らない形式。胴部は成形の凹凸が残る。ⅠA期前後。外面にわずかにタタキ痕跡。7.5YR 6/4～10YR 7/4。8は須玖1式古相の小型甕か。2.5YR 5/6～5YR 6/8。器壁断面は黒灰色。9は甕であるが、胴部外面はタテハケ→肩部に断続ヨコハケ→ミガキとなり、口縁部端面に微妙な凹みが走るもので在来系としてよいか疑問が残る。7.5YR 4/1～5/3、内面7.5YR 6/3。10はA系のやや大型の鉢。胴部外面は、タテハケ後、頸部下を除きミガキを施す。ⅠA～ⅠB期前後だろう。7.5YR 6/6、内面は10YR 5/1で全体的に黒色吸着か。11はA系脚付鉢。ⅠA～ⅠB期か。7.5YR 6/6～6/4。12は高坏A。口径29.8cm(復元)、坏部比0.44。AⅡ型式でも新相か。後期後半新相～ⅠA期。10YR 7/4～7.5YR 6/4。13はA系脚付鉢。体部内面中位以下に縦のミガキ。器

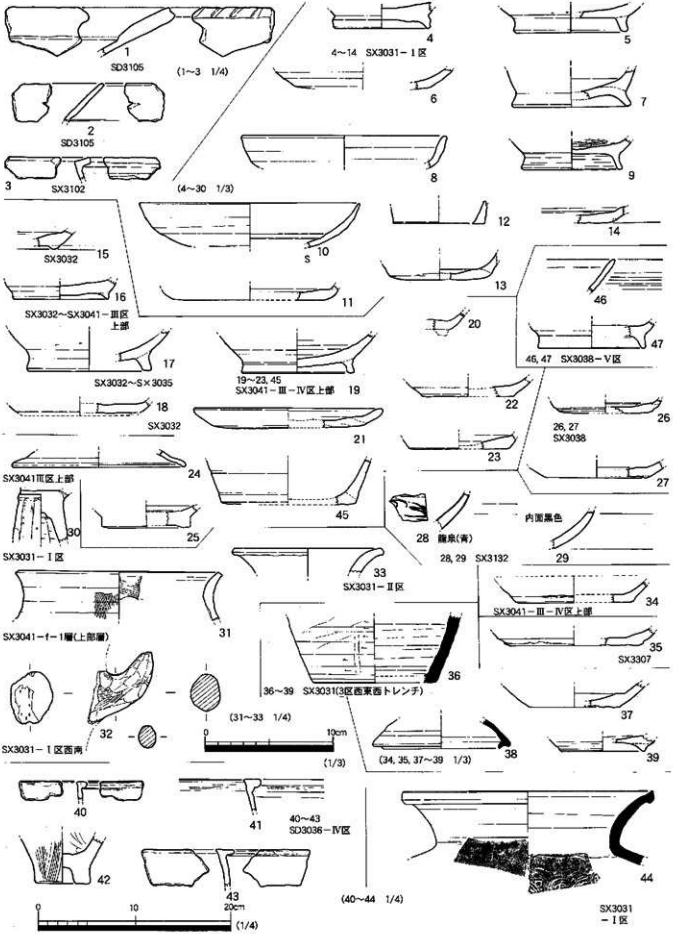


Fig. 81 3区出土土器(1) (S=1/4, 1/3)

形から後期後半～ⅠA期か。10YR 6/4～7.5YR 6/3。14はA系の鉢で脚付鉢の可能性あり。体部外面はナナメタテハケ後、ハケメ原体に類似する工具による横のケズリ。弥生終末か。10YR 7/3～6/5。15は高坏Aの脚柱状部。坏部底面と柱状部内面奥の問が厚い。接合法C3類。ⅡA期以降か。2.5Y 7/3～5/3。早良～福岡平野の製作の可能性が高い。16は甕Aの底部。凸レンズ底でⅠA期前後。7.5YR 8/4～7/4。17は甕A。胴部の張りがあまりないもの。後期後半～ⅠA期か。5YR 6/6～6/4。18はA系の小型の丸底鉢。体部外面下半をケズリ、内面下半もケズリがある。ⅡA期以降か。7.5YR 6/6～6/4。19は脚付鉢だが、体部内面は簾状ハケメに近く、B系とA系の折衷ないしB系技法によるA系器種の模倣の可能性がある。体部外面は縦のミガキ。脚部内面はハケメ→ナデ。ⅠB期以降だろう。7.5YR 7/6～7/4。20は器形と内面の規則的なナナメハケから、おそらくB系の壺。外面下位はハケ後ケズリ→粗いミガキ。ⅠB期以降か。7.5YR 6/4～7/4。21は胴部が張らない甕A。ⅠA期前後か。10YR 7/3。22はA系の鉢。体部外面はタテハケ→下位に粗いハケメ。体部内面はナナメハケ→中位以下ミガキ。ⅠA～ⅠB期か。7.5YR 7/6～7/8。

Fig. 77は主にSX3041－Ⅲ・Ⅳ区のPh.1～3相当層位を掲げた。1は甕A。丸底になると予想される。ⅡA期以降。7.5YR 6/4～7/6。2はA系の大型甕の胴部。突帯剥離痕跡がある。10YR～7.5YR 7/4。3はSX3041－Ⅱ区Ph.4取上の壺の底部。須玖Ⅰ式。5YR 6/6、内面7.5YR 8/4、器壁断面は黒い。4は高坏A。口径26.2cm（復元）、坏部比0.65。屈曲部は比較的明瞭。AⅣ型式古相。5はA系鉢。口縁部端部の面取りが明確で水平。ⅠA～ⅠB期か。10YR 7/2～7/3。6は系統の理解に不安が残るが、一応A系の小型壺とする。体部外面は、板ナデ→ナデ、下部ケズリ。内面は縦の板ナデ？→ケズリ→ナデか。ⅡA期以降であろう。10YR 7/4～6/2、内面10YR 2/1で黒色吸着処理か。7はB系の埦状の鉢か。内面下位にヨコ（ナナメ）ハケが残る。外面下位はケズリ。体部下部に穿孔がある。7.5YR 7/4～6/4。8もB系の小型鉢。外面ケズリ→ナデ。7.5YR 6/4～5YR 6/6。9は丸底のA系壺底部。外面はタテハケ？→ナデ。7.5YR 7/3～6/4。10は高坏Aの脚柱状部。接合法C3類。ⅠB期以降か。2.5YR 6/8。11は高坏Aの脚柱状部。接合法E類。接合面に刻目がありⅡA期以降か。7.5YR 7/4～7/3。12はA系の甕ないし壺の底部。凸レンズ底。ⅠA期前後か。7.5YR 7/2～7/4。13はA系の鉢ないし甕。あまり見ない器形。5YR 5/6～6/4。14は甕A。口縁部短く、胴部はあまり張らないものか。ⅠA期前後。7.5YR 5/3～10YR 7/4。15はA系複合口縁壺。頸部に二条の三角突帯が結合してM字状となった突帯がある。頸部の太さからⅠA～ⅠB期か。10YR(～7.5YR) 7/2～7/6。21も同様の突帯を頸部に有するA系複合口縁壺。胴部外面はタタキ→タテハケ。頸部が15よりも太くやや新相で、ⅠB～ⅡB期か。7.5YR 7/4～7/6。16は丸底のA系壺の底部。外面ケズリ→ナデ、内面はナデ。ⅡA期以降。10YR 7/4～6/2。17はA系のやや大型の壺ないし甕の胴部下位破片。台形の突帯が巡る。後期後半～ⅠA期か。7.5YR 8/4～8/2、器壁断面は暗褐灰色。18はB系の可能性のある脚付鉢ないし高坏。穿孔は四ケ所。外面はケズリ気味の板ナデか。10YR 7/4。器壁断面6/1。19は甕A。口径22.5cm（復元、もう少し小さいかもしれない）。頸部がしまり球胴化した型式でⅡB期以降か。内外面のハケメの条痕は粗い。外面は、胴部はタタキ、口縁部にもタタキ痕跡。10YR 6/4～7.5YR 6/6。20は甕Dの小片。外面はヨコハケ→ヨコナデ。内面は胴部ヘラケズリ、頸部ヨコナデ。7.5YR 7/6～7/4。ⅡB～ⅡC期の糸島産の布留系甕だが、SX3041上層資料は在来系が大多数だが時期が下ることを示す証拠の一つ。22はA系（？）の直口広口壺。外面は、胴部タテハケ→ナデまたはミガキ、口縁部タテハケ→ヨコナデ。7.5YR 5/8～7/6。23は小片だがC系二重口縁壺の1次口縁部。胎土は精良。5YR 6/8～7.5YR 6/4。頸部が太く、ⅡB期以降か。24は甕A。外面はタタキだが右上なのはやや異例。10YR 5/2～6/4。25は高坏Aの脚柱状部。接合法E類、接合面に刻目痕。ⅡA期以

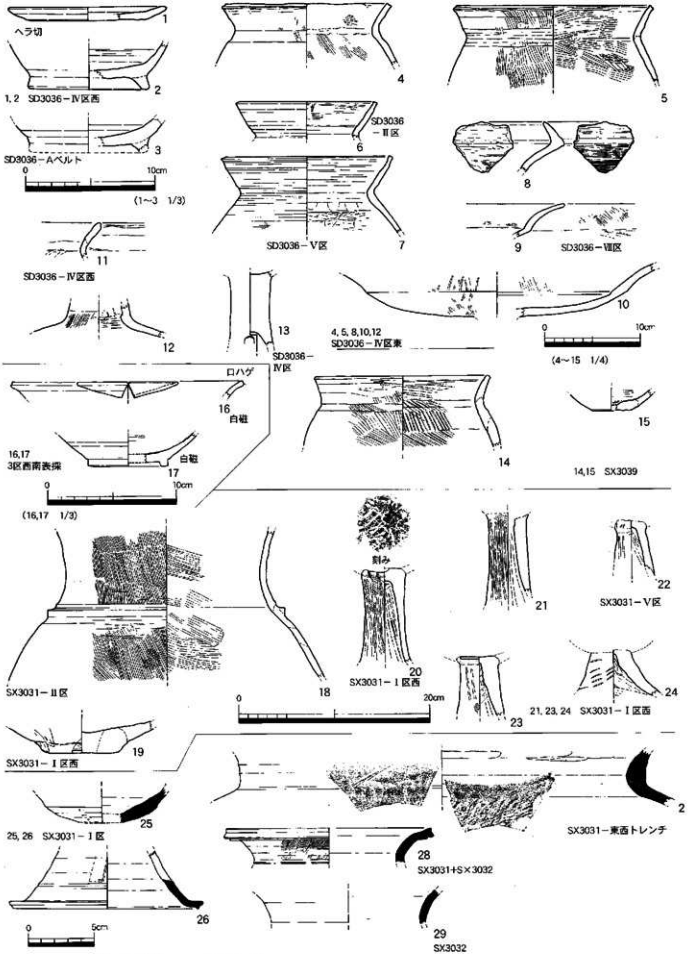


Fig. 82 3区出土土器(2) (S=1/4, 1/3)

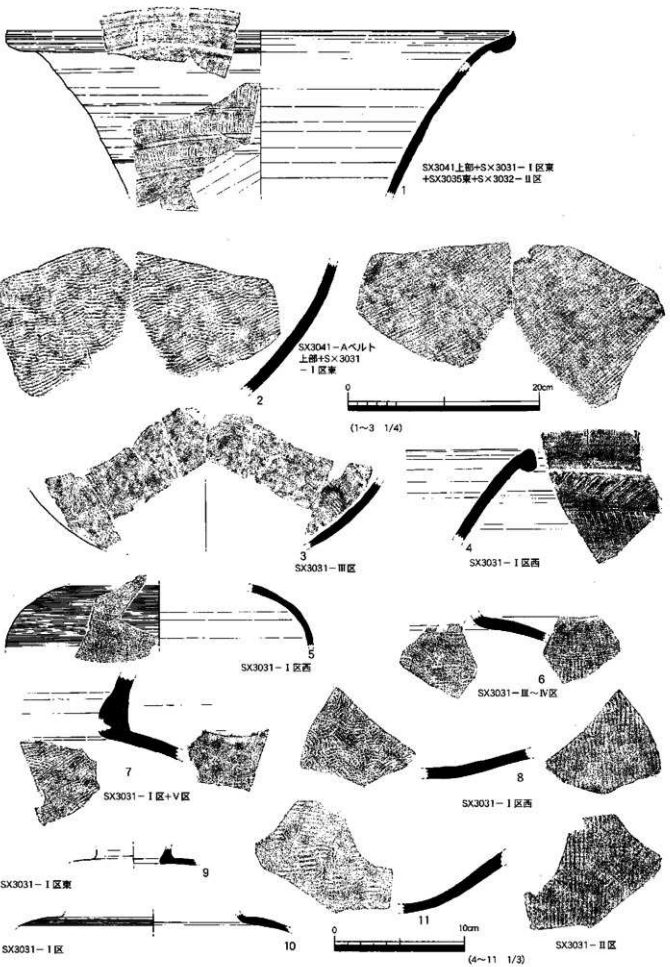


Fig. 83　3区出土土器(3) (S=1/4, 1/3)

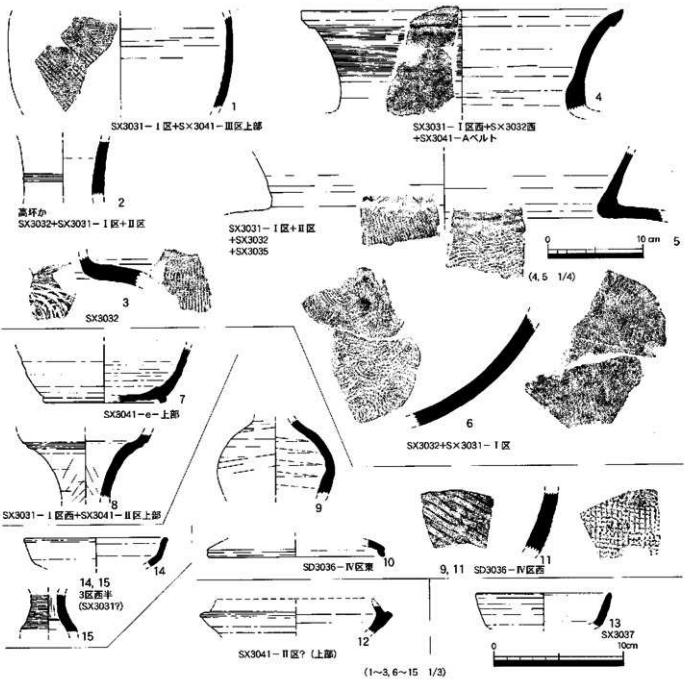


Fig. 84　3区山土土器(4) (S－1/4, 1/3)

降か。7.5YR 7/6～7/8。26はA系器台。口縁部にハケメ工具による斜めの刻目。にぶい橙色～灰黄色。ⅠA～ⅠB期か。

Fig. 78はSX3041の主にⅢK（一部Ⅱ区あり）のPh.2～4層位相当を掲載した。1はくびれ部のしまりが細く、弥生後期後半の器台。10YR 5/4～7/2。2はA系の器台。ⅠA～ⅠB期か。10YR 7/4～7/6。3は小型の甕A。胴部が張らない形式。ⅠA期前後。外面煤付着。10YR 6/4～5/4 。4は小型の甕A。頸部があまりしまらない形式。凸レンズ底で、胴部への立ち上がりは少し凹む。後期後半新相～ⅠA期。10YR 6/4～6/6。5は甕A。口径17.6cm、胴部比1.45。胴部は左右非対称。ⅡA期以降の型式。胴部外面は、タテハケ→中位以下ミガキ。7.5YR(～5YR) 4/6～4/4。6は甕Aの底部。広い凸レンズ底。後期後半か。2.5YR 7/4～7/6。7は中型広口短頸壺。口縁部が外反する。胴部外面はナデとみられるが成形時のシワがある。器形的に後期後半のもの。7.5YR 7/6～6/4。8は甕A

の底部。凸レンズ底。1A期前後。7.5YR 7/3～6/6。9は甕Aの胴部下半～底部。凸レンズ底でⅠA期前後。内面底部付近は顕著なオサエナデ。外面の胴部下部はタテハケ→ケズリ→ナデ。2.5YR 6/4～5/4。10はA系の短頸広口壺。後期後半～ⅠA期か。7.5YR 6/6～10YR 7/4。11はA系の器台ないし鉢か。いずれにしても弥生終末。口縁部端部は明瞭な面取り。7.5YR 7/6～7/4、内面5YR 5/～6/6。12は高坏A。口径27.2cm（復元）。坏部比0.50。AⅢ型式古相。内外面ともに顕著にミガキ。ⅠA期か。10YR 6/6～6/4。13は高坏A。口径30.0cm（復元）。坏部比0.47。AⅢ型式古相。坏部上半と下半の屈曲がやや曖昧。口径脚部の穿孔は3ケ所。（ⅠA～）ⅠB期か。7.5YR 6/4～6/8。14は高坏A。口径27.6cm（復元）。坏部比0.72。AⅣ型式中相。坏部が深く、屈曲はやや曖昧さがあり新相の型式。ⅡA～ⅡB期か。内外面ともにハケメ→ケズリ→縦のミガキ。口縁部は面取があり端面はやや凹む。7.5YR 6/6～6/8。15はA系器台の受部。口縁部にハケメ工具による斜めの刻目。5YR～7.5YR 6/6。16もA系器台。外面タタキ→ハケメ。7.5YR 6/6～7/4、内面は一部灰褐色。15、16は弥生終末か。17はA系杏形器台ないし支脚。全体的にナデ仕上げ。10YR 6/3～7.5YR 7/6、内面5YR 6/6～7.5YR 6/4。18はA系器台だがくびれがしまり後期後半～ⅠA期か。7.5YR 6/2～10YR 6/6。19はA系の脚付鉢ないし器台の一種か。見なれない器形。ただし脚部内面は籠状ハケメに近く、B系の可能性もある。10YR 7/4。20は小型の脚付鉢。胎土は砂礫多い。精製器種B群の小型脚付鉢を模倣したA系のものか。5YR 7/6～6/3。21は須玖Ⅰ式古相の小型甕の口縁部。7.5YR 7/4～6/3。22は城ノ越式～須玖Ⅰ式古相の壺の口縁部。7.5YR 6/4～7/3。23は高坏Aの脚部。穿孔は2ケ所。5YR 6/6～6/4。24は甕A。7.5YR 6/6～5/3。

Fig. 79はSX3041－Ⅲ区のPh.4・5南（Ph.1・2層位相当）の資料を掲げた。1は甕A。口径17.5cm（復元）。頸部がしまり、胴部が張る型式。胴部比1.31。ⅡA～ⅡB期か。2は甕A。頸部がややしまり、胴部中位に重心のある型式。ⅡA期前後であろう。7.5YR 5/6～5/4。3はA系の器台。受部口縁部に斜めの刻目。くびれ部が太く、ⅠB期以降の型式か。5YR～7.5YR 6/4。4はA系の脚付鉢または脚付小型壺。口縁部は面取りした端部が外に少し拡張する。体部外面はハケメ→縦のミガキ。内面は、体部ナデ→ミガキ、口縁部にもハケメ→ミガキ。7.5YR 7/3～6/4。5はA系複合口縁壺。口径29.8cm（復元）。口縁部反転部は直立してから外反する新しい型式。ただし頸部はあまり太くないとみられ、ⅠA～ⅠB期であろう。7.5YR～10YR 6/6。

Fig. 80は、主にSX3041－Ⅲ区のPh.4・5南（Ph.1・2層位相当）出土の資料である。1は甕Bの外反する口縁部か。内外面ともに丁寧なヨコナデ。7.5YR 6/6～7/4。2は甕A。口縁部が短く終わる。口径17.3cm（復元）、胴部比1.53。ⅡB期以降の型式か。7.5YR 4/2～5/6。3はA系の甕で胴部が張らず長胴の鉢状になるもの、もしくは胴部内面に規格的な横のハケメがあることからB系の甕か鉢になる可能性もある。口縁部は短くすぼめ丸める。10YR 7/4。4はA系複合口縁壺。口縁部反転部が直線的なもの。口径25.3cm（復元）。頸部が太いとみられ、ⅠB期以降だろう。10YR 8/4～7.5YR 7/4。5もA系複合口縁壺。口縁部反転部はやや内湾気味だが、端部が外方へ折り返す新しい様相がある。また口縁部反転部外面は凹線状のヨコナデを有し、また屈曲部にハケメ工具で斜めの刻目を施す。東九州から西部瀬戸内の複合口縁壺の様相を模倣したものか。頸部は太く、弥生終末（ⅠA期以降）には下るだろう。10YR 6/4。あるいは粕屋平野あたりでの製作か。6はA系の大型甕の頸部～口縁部。頸部突帯は無い模様。10YR 7/2～6/4、内面は一部褐灰色。7はA系器台。外面はタタキのみ。終末～古墳初頭。7.5YR 6/4～5YR 5/8、内面5YR 6/4。8はA系の壺の底部。凸レンズ底気味残る丸底。底部内面は顕著なオサエナデ。ⅡA～ⅡB期か。7.5YR 7/4～6/4。9はA系の薄手の鉢。内外面ともにナデ仕上げか。10YR 8/2～8/3（灰白色気味）で、器壁断面は黒灰色。福岡平野からの搬

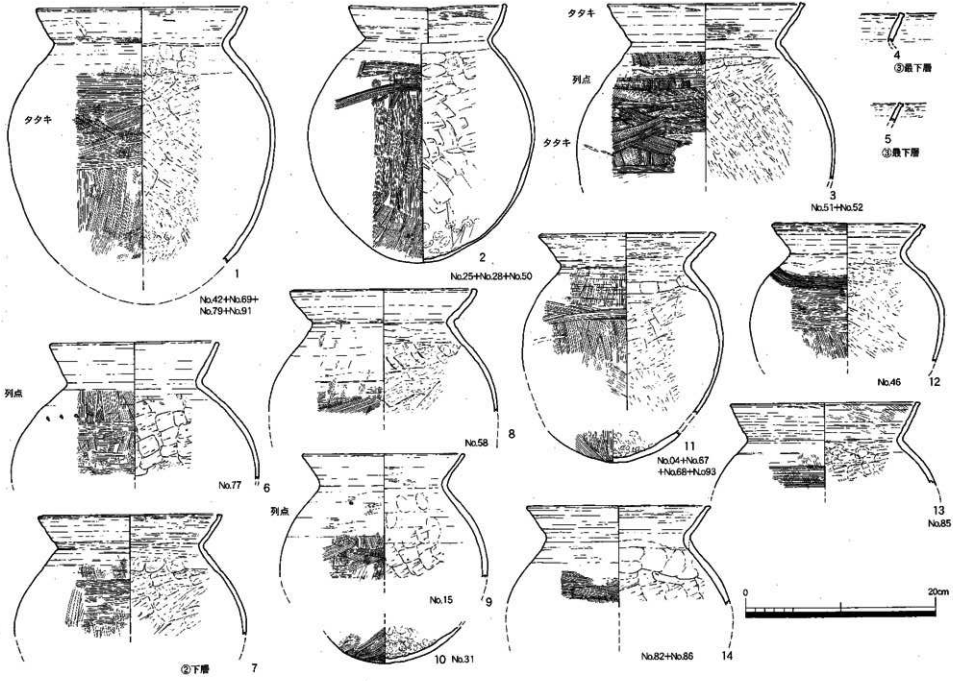


Fig. 85　4区SX4011出土土器(1) (S=1/4)

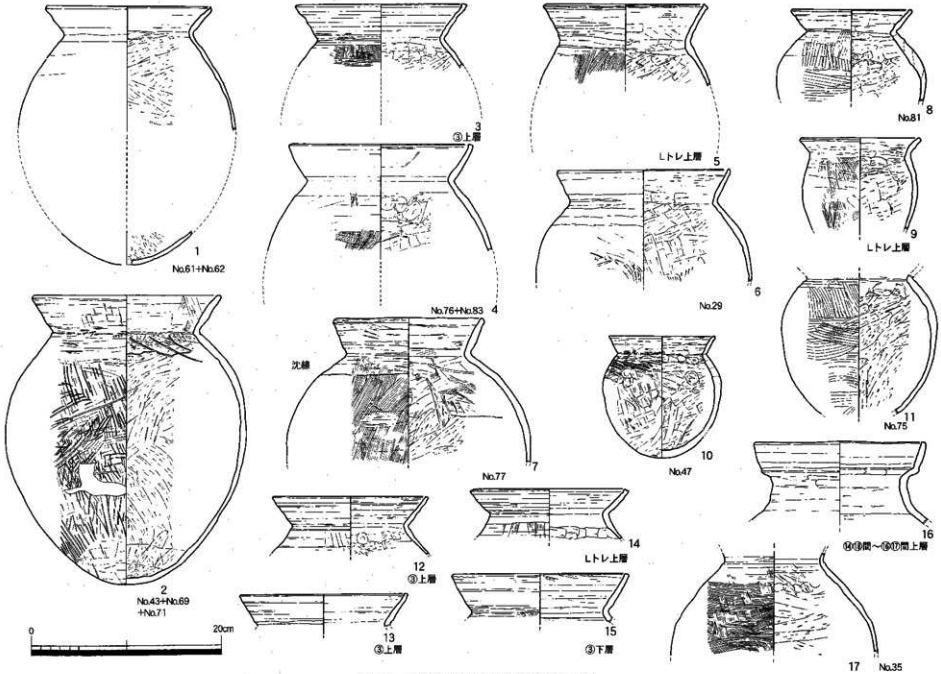


Fig. 86　4区SX4011出土土器 (2) (S=1/4)

入品か。ⅠA～ⅠB期。10はA系器台。くびれが細身で後期後半～ⅠA期か。10YR 5/3～5/2。11は高坏A。口径28.0cm（復元）。坏部比0.48。AⅢ型式古相。屈曲明瞭でⅠA期か。5YR 6/8～7.5YR 7/6。12はA系の大型広口壺の口縁部。口縁部内側に薄く扁平な突帯を貼付け。口縁部の外方端面にハケメ工具による斜めの刻目。5YR～7.5YR 6/6。

・SD3105出土土器（Fig.81－1～3）

1はA系のやや大型の広口壺の口縁部。口縁部内側に薄く扁平な粘土帯。口縁部端面に刻目。弥生終末。7.5YR 6/7～6/8。2はA系高坏の坏部。弥生終末か。10YR 7/4～5/4。3は城ノ越式前後の甕の口縁部。2.5YR 6/6。

・SX3031出土土器（Fig.81－4～13, 30, 32, 33, 36～39, 44, 46, 47, 82－18～29, 83, 84－1～6, 8）

Fig. 81は主に古墳時代後期～古代（一部中世初めか）の土師器を並べた。なお以下の、8～12世紀の土師器の時期（型式）比定は、山本信夫1996「歴史時代　九州　北部九州の土器」、横田賢次郎1996「歴史時代　九州　大宰府の土器」（以上、『日本土器事典』雄山閣）、山本信夫・山村信榮1997「九州・南西諸島」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集）を主に参照して判断した。実際は在地の土器編年が確立しておらず、高台の形状も異なるものがあることから大宰府編年がどこまで適用できるか疑問もあることを付記しておく。Fig.81－4, 5, 39, 47は土師器の高台付壺。4は12世紀前半、5は10世紀代、39は10世紀後半～11世紀前半、47は10世紀代。46もおそらく高台付壺であろう。9～10世紀。6, 8, 10, 11, 13, 14, 37, 46は土師器の坏。全て底部はヘラ切り。6, 8, 13は11世紀代、10, 11は12世紀前半、14, 37は10世紀代か。7は土師器の高台付短頸壺（鉢）か。8は紀後半～9世紀前半。9は内面黒色土器高台付坏。10世紀後半～11世紀前半。12は器種不明だが、下部の面は底部から剥離したものか。Fig.81－45と同様のものか。このように検討してみると、遺構の記述説明では8～9世紀の土器が多いとしたが、10～12世紀の土器が少なくないことが分かる。ただしSX3031包含層の形成過程が不明であること、10～12世紀の土器は最上層に多いことが注意される。36, 38, 44は須恵器。36はおそらく8世紀後半の細頸壺の底部。明青灰色。38はV期の坏蓋。灰白色。44は焼ないし短頸広口壺。青灰色。30は6～7世紀の土師器高坏の脚柱状部。32は7世紀前後の土師器の甑の把手。33は弥生終末のA系器台。7.5YR 7/4。

Fig. 82－18～24は弥生後期～古墳前期の土器。SX3041の上層（Ph.1～2層位）に様相が同じである。18はA系複合口縁壺。頸部に小さい三角突帯が巡る。頸部は太くⅠB～ⅡA期か。10YR 6/4～7/4。19はB系のやや大型の壺の底部。輪台成形の底部。やや突出する平底でⅠB～ⅡB期だろう。外面接合痕、縦のケズリ。7.5YR～10YR 7/4。20, 21, 23は高坏Aの脚柱状部。20は、接合法C類の影響を受けたE類。接合面に刻目がありⅡA期以降の可能性。斜めハケメ→縦ミガキ。7.5YR 6/4～10YR 7/3。21は顕著な縦ミガキ。7.5YR 6/4～7/4。砂礫少量の精良胎土。23は、接合法は通有のE類。10YR 7/2。22は高坏Cの脚柱状部。接合法C2類。7.5YR 6/6～7/4。砂礫微量の水漉精良胎土。24はB系の脚付鉢の脚部か。外面タタキ。器壁厚い。7.5YR 6/4～7/6。Fig. 82－25～29は須恵器。25は坏身。ⅢB～Ⅳ－1期か。明褐灰色～青灰色。26は高坏の脚裾部。推定二段透かしで裾端部からⅢB期か。灰色。27は甕。胴部は、外面縦位の平行タタキ（ナデがかかる）、内面は雑な同心円文当具痕。暗灰色。28, 29は短頸広口壺ないし小型甕。28の口縁部外側のM字状突出部は比較的シャープ。頸部外面タテハケ。青灰色～（暗）緑灰色。器壁断面は黄灰白色。29は明青灰色～オリーブ灰色。27, 28はⅣ期前半を前後するものか。

Fig. 83－1～11もSX3041出土の須恵器。1, 4, 7は甕（大甕）の口縁部～頸部。2, 3, 6, 8, 11は甕（大甕を含む）の胴部破片。1は口径54.0cm（復元）。外面は4段のヘラ描き縦線文（間を沈線で区切る）。口

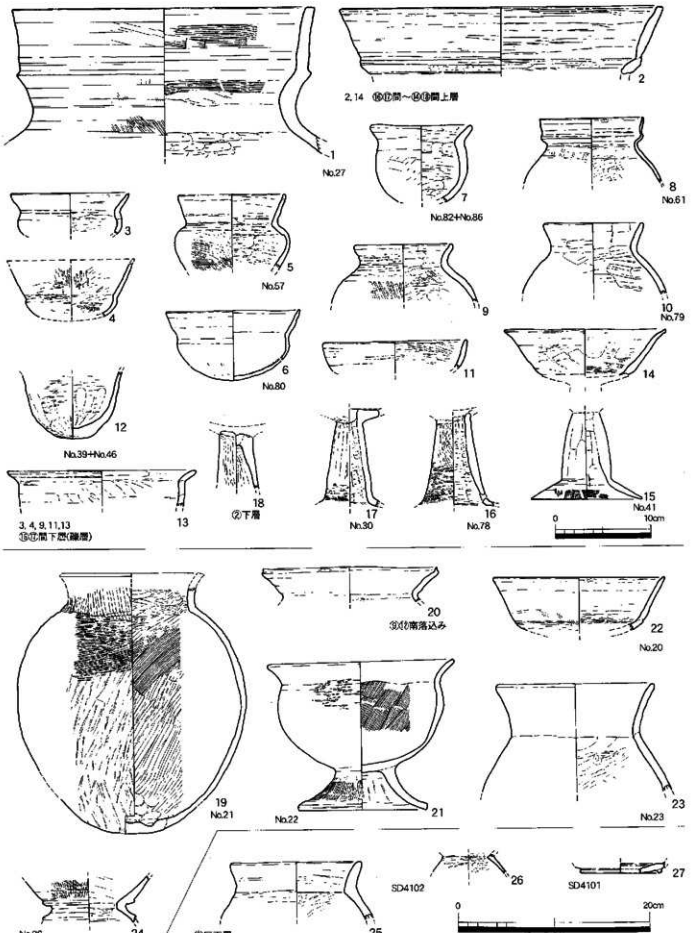


Fig. 87　4区SX4011他出土土器(3) (S=1/4)

縁部は、内側はつまみ上げ状、外側に扁平な蒲鉾形状の粘土帯を貼付け。牛頸窯跡群のⅣ期の斜線文のある大甕の模倣だろうが、見なれないもの。在地窯がある可能性を考える。褐灰色～暗青灰色、器映断面灰色～青灰色。2は格子目に近い擬格子タタキ、内面は平行文当具痕。暗灰色。3は擬格子タタキ→カキメ、内面は平行文当具痕をすり（ナデ）消し。灰色。4は少なくとも3段の互い違いの斜線文。沈線で区画。口縁部外側に半円形の突出。牛頸窯跡群の甕の文様に似るが口縁部は異なる。灰褐色。5は壺ないし瓶類。外面は顕著なカキメ。灰色～灰白色。6は縦位平行タタキ→カキメ、内面は同心円文（重弧文？）と平行文の当具痕。灰色。7は擬格子タタキ（？）をすり消し、内面は同心円文当具痕。1と同一の可能性。灰白色～暗緑灰色。8は擬格子タタキ、内面は同心円文当具痕。暗灰色～灰色。9は平瓶などか。薄手の作り。（明）褐灰色。10は平瓶か短頸直口壺などか。肩部外面カキメが顕著。灰色。11は擬格子タタキ、内面は同心円文→平行文当具痕。黒灰色～灰色。

Fig. 84－1, 2, 4～6, 8もSX3031出土の須恵器。1は薄手の作りで、器種不明。小型の壺ないし鉢状か。擬格子タタキ→カキメ。灰色。2は高坏の脚部。透かしのないもの。Ⅳ期か。暗緑灰色～青灰色。4は壺ないし広口壺。頸部～口縁部に顕著なカキメ。暗緑灰色。5は大甕の頸部前後。胴部は、格子目に近い擬格子タタキ、内面同心円文当具痕。褐灰色～（暗）灰色。6は大甕の胴部。擬格子タタキ、内面同心円文当具痕。褐灰色～（暗）青灰色。8は扁の頸部。細い頸部で文様無し。口縁部下は沈線状。Ⅳ期か。青灰色～オリーブ灰色。Fig. 84－14, 15も3区包含層（SX3031）の可能性あり。14はⅥ期の坏身か。青灰色～灰色。15は小型の高坏の脚部か。断続的カキメ。暗青灰色～灰色。なおSX3031出土の須恵器は、SX3032やSX3041最上層の出土の破片と接合するものが多く見られる。

・ **SX3041最上層出土土器**（Fig. 81－19～25, 31, 34, 45, Fig. 84－7, 12）

SX3041最上層は、以下の古墳初頃までの土器溜の埋没後に上層に堆積した礫混じり層で、SX3031の一部とみてよい。Fig. 81－19～24, 31は古代の土師器。19は高台付埦。9世紀～10世紀前半か。20は内面黒色土器の坏。9世紀代か。21は皿。ヘラ切り底。10世紀代か。22, 23は坏でいずれもヘラ切り底。8世紀後半～9世紀前半。24は坏蓋。焼成の甘い須恵器の可能性もある。8世紀後半～9世紀前半。31は坏。ヘラ切り底。9世紀代か。Fig. 81－25は白磁碗の底部。Ⅳ類ないしⅪ類の可能性もある。Fig. 81－45は土師質で胎土精良。10YR 7／4。器種不明。底部は平底風。外面はヨコナデで一部凹線状。高台が剥離しているとすれば8～9世紀の高台付短頸壺（鉢）。あるいは陶式系土器の平底鉢かもしれないが違和感がある。Fig. 81－31は古墳時代後期の甕か。にぶい黄橙色。

Fig. 84－7, 12は須恵器。7は高台付坏身。8世紀初頃か。青灰色。13はⅢB期～Ⅳ期前半頃の高坏の坏部か。やや鈍い作り。褐灰色。

・ **SD3036出土土器**（Fig. 81－40～43, Fig. 82－1～13, Fig. 84－9～11）

Fig. 81－40～43は弥生中期初頭の土器。40は口縁部が断面円形に近い粘土帯を貼付ける。ヨコナデは丁寧なので、擬無文土器か。橙色。41, 43は通有の甕の口縁部。41は橙色～にぶい橙色。43は黄橙色～橙色。42は上げ底となる甕の底部。浅黄橙色。

Fig. 82－1～3は古代の土師器。1は小皿。ヘラ切り底。10世紀代。2, 3は高台付坏（埦か）。9世紀代か。Fig. 82－4～13は弥生後期～古墳前期の土器。4は甕A。褐灰色～灰褐色。ⅡB～ⅡC頃。5も甕A。7.5YR 8／4～7／6。ⅠB～ⅡA期。6は甕Dの口縁部。口長4.0cm。ⅢA期。にぶい橙色～橙色。7も甕D。口長4.2cm。やや大型で長胴の形式。ⅢA期古相。5YR 6／6～7／3。8はA系複合口縁壺。後期後半～ⅠA期。明褐色。9は高坏A。径は不明だが推定AⅡ～AⅢ型式。浅黄色～明黄褐色。器壁断面は暗灰色。10も高坏A。推定AⅢ型式。大型品か。明黄褐色。11は甕A。橙色。12はA系の脚付鉢脚部。接合充填部剥離。橙色～明橙褐色。13は脚柱状部が中実なB系高坏。穿孔四ケ所。明黄褐色。Fig.

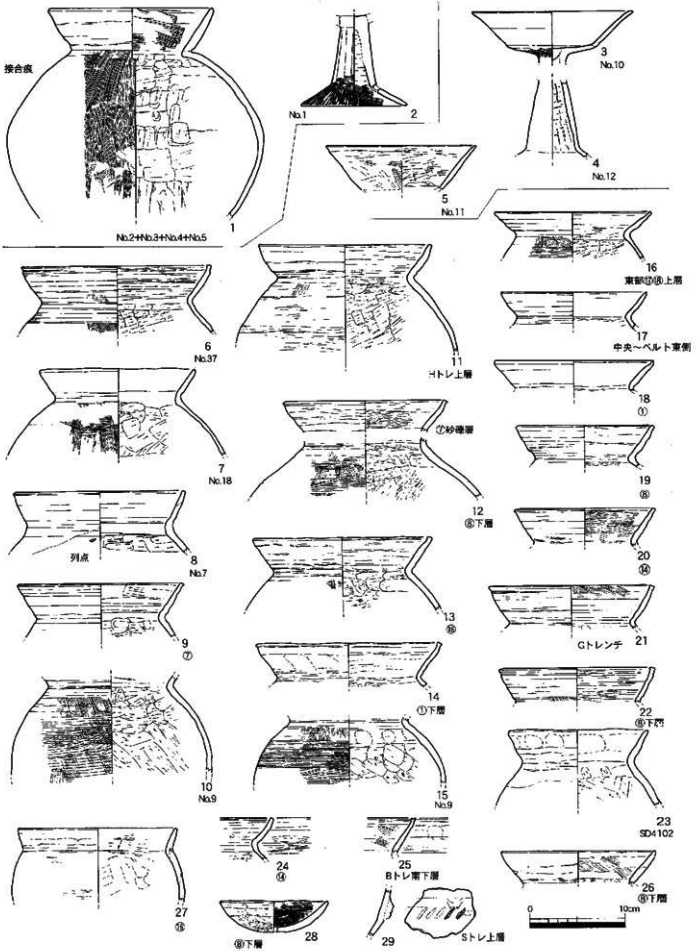


Fig. 88　4区SX4011出土土器(4) (S=1/4)

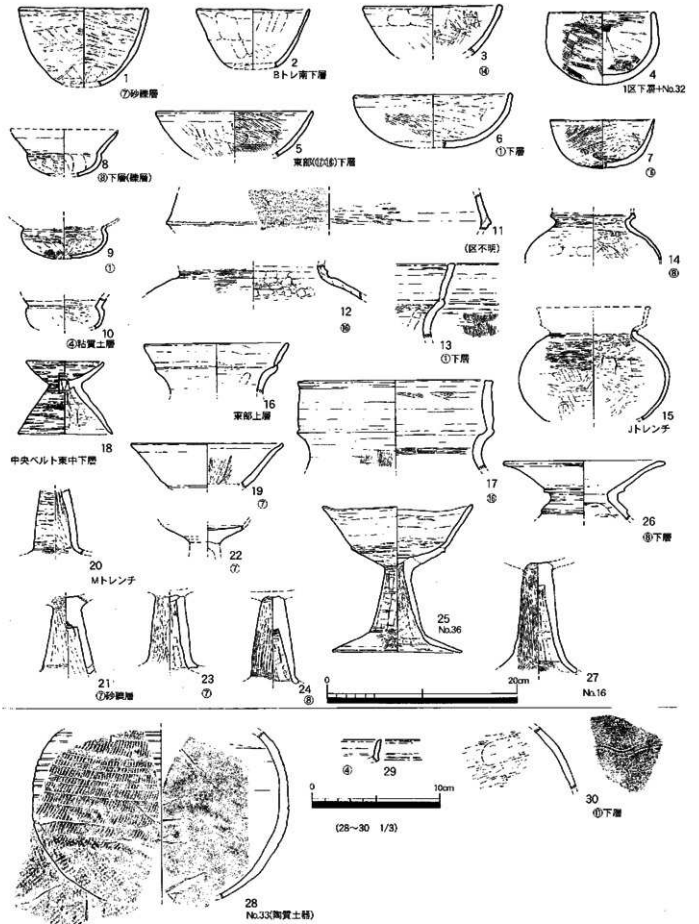


Fig. 89 4区SX4011出土土器(5) (S=1/4, 1/3)

84－9～11は須恵器。9は頸部の細い瓶。体部に文様無し。焼成甘い。Ⅳ期～Ⅴ期か。灰白色～褐灰色。10は8世紀前半の杯蓋。灰白色～にぶい褐色。11は甕の胴部。格子目タタキ、内面平行文当具痕。褐灰色～にぶい褐色。

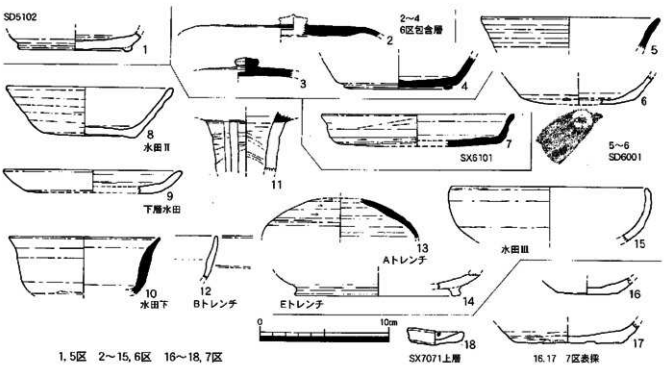


Fig. 90　5・6・7区出土土器 (1) (S＝1/3)

・ 3区のその他の遺構の土器、陶磁器

Fig. 81－15～18はSX3032出土の古代の土師器。15, 16は小さな高台の付く椀。10世紀後半～11世紀前半か。17は高台付椀ないし坏。9世紀か。18は内面黒色土器の坏。ヘラ切り底。9世紀前半か。Fig. 84－13はSX3032川土の須恵器の甕破片。縦位の平行タタキ、内面同心円文当具痕。ⅢA～ⅢB期頃か。Fig. 81－26, 27はSX3038出土の古代の土師器。いずれもヘラ切り底で、9世紀前後の坏である。Fig. 81－28, 29はSX3132出土。28は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類。29は内面黒色土器。9～10世紀。Fig. 81－35、Fig. 84－13はSK3307川土。81－35はヘラ切り底の土師器坏。8世紀後半～9世紀前半か。84－13は8世紀後半～末の須恵器の坏身。褐灰色。Fig. 82－16, 17は調査区西南表採の陶磁器。16は口禿の白磁碗Ⅸ類。17は白磁碗の底部。やはりⅨ類か。Fig. 82－14, 15はSX3039出土の古墳初頭の土器。14は甕AでⅡA～ⅡC期の型式か。10YR 7/4～5YR 6/6。15はB系の甕の底部か。輪台成形底部。甕B3～B4型式。5YR 5/8～6/8。

(4) 4区出土土器 (Fig. 85～89、Fig. 110－3, 4)

・ SX4011出土土器

挿図中の「No.－」はFig. 44, 48の川土状況図の遺物番号に対応し、出土位置の①, ②などの丸付番号はFig. 42のグリッドに対応するので参照されたい。またFig. 85, 86 (－16以外), 87－1～18 (2～4, 9, 11, 14除く) はFig. 44のA群、Fig. 87－19～24, Fig. 110－4はB群、Fig. 88－1, 2はC群、Fig. 88－3～5はD群。これらはそれぞれまとまって出土し、特にA群とB群は一括性が高い資料である。

以下、器種分類を述べる。Fig. 85－1～14 (3, 5は胎土・色調・調整から福岡平野産)、Fig. 86－

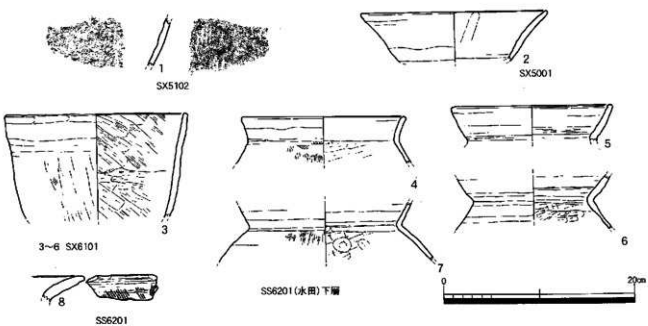


Fig. 91　5・6区出土土器(2) (S=1/4)

1, 3, 4, 12～15 (1, 3, 4は折衷甕D－Aとすべきか)、Fig. 87－20, Fig. 88－6～22, 24, 25 (胎土や形態から22, 24は早良平野の、19～21, 25は福岡平野産の可能性が高い)、Fig. 89－30, Fig. 110－4は甕D (北部九州型布留甕)。Fig. 86－2, 6～8, 11は、変容模倣甕A (D) が定型化した甕Fa。Fig. 86－5, 9, Fig. 87－23は甕Aの雰囲気や器形がより残る甕A (D) (A系技法・器形甕に部分的に甕Dの要素を借用し模倣した甕) である。Fig. 86－10, Fig. 88－1, 23, 26は、甕B技法による変容模倣甕B (D) が定型化した甕Fb (ただしFig. 88－1は広口壺とすべきか)。粘土帯の積み上げやD縁部の形態・手法から判断される。甕Faおよび甕Fbは、ⅢA期新相に顕在化し、ⅢB期以降の粗雑な甕 (後述の重藤輝行分類の甕A類Ⅱ式以降) に繋がり、甕Dと数量的に交代するものである。甕Dとの相違は、器壁の厚さ、内面ヘラケズリの粗雑化、口縁部・頸部・肩部の回転ヨコナデや回転的ヨコハケなどの顕著な回転的諸調整の欠如である。Fig. 87－19, Fig. 88－27は甕A。Fig. 86－17は、D系統の直口広口壺。器壁薄く、灰白色の色調で福岡平野産。Fig. 86－16, Fig. 87－1, 2, 8, Fig. 89－13～17, 29 (15は推定)、は山陰系の二重口縁壺。作りに精粗があり、大型から小型まである。Fig. 89－28は韓半島系の陶質土器の小型短頸壺。

4区出土土器については、紙幅と編集の都合上、以下の説明を追加後述する (84頁以下)。

(5) 5区出土土器 (Fig. 90－1, 91－1, 2)

Fig. 90－1は、小さい高台付の土師器の坏。8世紀後半か。

Fig. 91－1は土師器の甕の破片。外面縦位の平行タタキ、内面ヘラケズリ。似非須恵土師器に類似し、6～7世紀。にぶい黄橙色。2は古式土師器の高坏。久住編年ⅢA～ⅢB期のもので、高坏D11類か。重藤輝行の分類 (重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』第2号) の高坏A類の精製品。にぶい橙色。

(6) 6区出土土器 (Fig. 90－8～15, 91－3～8)

Fig. 90－2～5, 7, 10, 11, 13は須恵器。2, 3は坏蓋で擬宝珠つまみがある。2は灰色。3は生焼けで橙色。4は高台付坏身。2～4は8世紀前半～中頃。灰白色～灰色。5は坏身。8世紀後半。生焼けでにぶい橙色。7は皿。8世紀前半。灰色。10は高台付の坏身であろう。径が小さく口縁部が外反。8世紀前半。灰色。11は高坏の脚部。ⅢB期前後か。灰色～灰白色。13は坏蓋。Ⅳ期前半頃。灰褐色。6, 8,

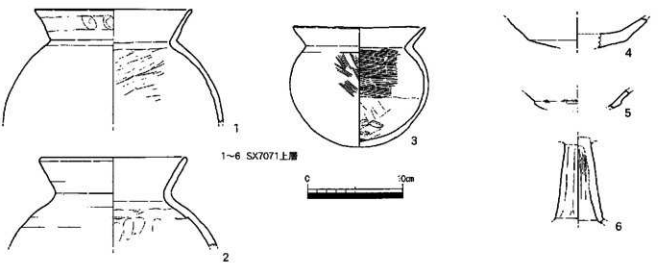


Fig. 92　7区出土土器(2) (S=1/4)

9, 14は古代の土師器。6は坏。底部はヘラ切りで丸みを有する。底部付近に刷痕。8世紀後半～末。8は坏。ヘラ切り底。橙色。9は坏ないし皿。ヘラ切り底。10世紀後半～11世紀か。14は高台付の椀。8, 9は8世紀後半～9世紀初め。12は古墳時代後期（～7世紀）の土師器の小型の丸底鉢（坩）。赤褐色。15は土師器で、内湾する体部の塊状の鉢。5世紀代か。にぶい黄橙色。

Fig. 91－3～8は古墳時代の土師器。3は6～7世紀の鉢または甑。外面は、体部タテハケ→ナデ。内面は、上半ナナメハケ、下半ケズリ。明黄褐色～にぶい橙色。4は6世紀頃の甕と見るか、古式土師器で甕Aの変容と見るか不明。胴部外面はタテハケ、内面ケズリ。黄橙色～明黄褐色。5～7は古式土師器の甕D。5, 6は同一個体。口縁部が分厚く鈍い作り。ⅢA期新相～ⅢB期。にぶい黄褐色～にぶい橙色。7は、5, 6より丁寧な作りだが口縁部は立ち上がり新しい。ⅢA期新相～ⅢB期か。胴部外面はタテハケ、内面ケズリだがオサエ残る。にぶい黄橙色～明黄褐色。器壁断面は暗灰色。8は8世紀前半頃の甕の口縁部。外面タテハケ→雑なヨコナデ。黄橙色～明黄褐色。

(7) 7区出土土器 (Fig. 90－16～18, 92)

Fig. 90－16, 17は古代の土師器の坏。いずれもヘラ切り底。17はやや雑な作り。16, 17ともに8世紀後半～9世紀。18は一応土師器であろうが時期不明。手ずくねの小皿状のもの。あるいは底部とする部分は剥離か。胎土は精良で、橙色～明黄褐色。

Fig. 92は全て古式土師器。おおむねⅢA期の範疇。1は甕A (D)。甕Aの変容で、甕Dを模倣したもの。口縁部ヨコナデは回転的ではなく、頸部や肩部の回転的諸制約を欠落する。口縁部はわずかに外反しつつ直線的に延び、端部はすぼめ丸める。胴部は、外面は摩滅し不明（ナデ？）、内面はケズリ。橙色～にぶい橙色。砂礫多く含む胎土。このような甕が、甕Faとなり、ⅢB期以降は重藤分類（前掲）の甕A類Ⅱ式の一系譜となる。2は甕と盲うよう壺。口縁部が直線的で、A系の口縁部手法が隠れる。広口直口壺A (D)。口縁部のヨコナデは凹凸少ない。外面肩部ヨコナデ、胴部内面ケズリ→ナデ。にぶい黄橙色。胎土は1に類似。3は甕Bの系譜下。甕B6型式。胴部は、外面はタテハケ・ナナメハケ、内面は、上半は丁寧で規格的なヨコハケ、下半はハケ後ナデ。にぶい褐色～橙色、内面黄橙色。胎土は砂礫を若干含む。4～6は高坏D9類。重藤分類の高坏A類の精製品。4, 5は坏部。4は摩滅し調整不明、胎土はやや精良で砂礫少量。橙色。5はナデ仕上げ（外面屈曲部にタテハケ痕跡）。胎土は水簸精良。橙色～浅黄橙色。6は脚柱状部で接合法はC2類。外面は縦のメントリ→ナデか。胎土は水簸精良。にぶい橙色～にぶい褐色、内面は暗褐灰色。5, 6はミガキ欠落しナデ仕上げであり、ⅢA期新相～ⅢB期。

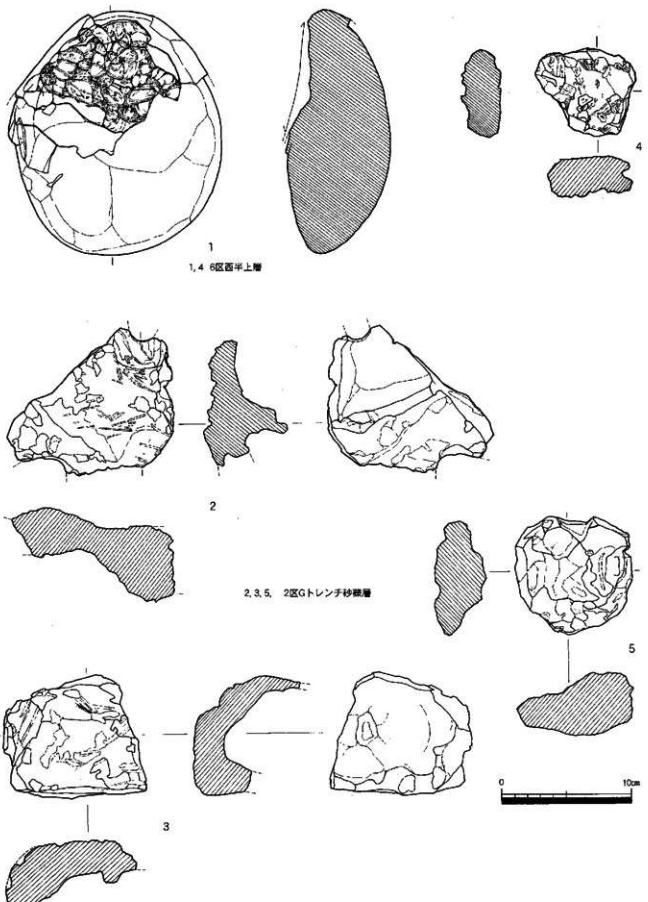


Fig. 93 元岡・桑原２次出土製鉄関係遺物(1) (S=1/3)

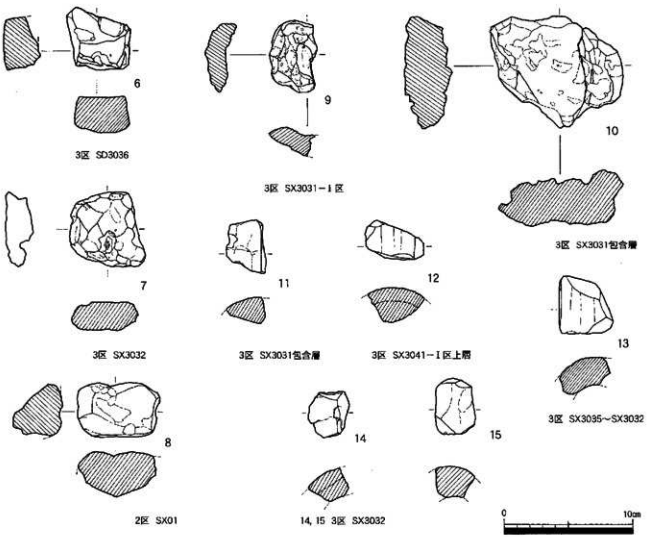


Fig. 94　元岡・桑原2次出土製鉄関係遺物(2) (S=1/3)

2) 製鉄関係遺物 (Fig. 93, 94)

本調査では鉄滓や炉壁片、フイゴ羽口などの製鉄関係遺物(一部は鍛冶関係)をパンケース4箱ほど検出した。2区東半F層(Gトレンチ)、3区西半包含層が出土遺構の大部分である。以下の観察記述は長家伸(埋蔵文化財課)の御教示によるところが大きい。なお鉄滓の実測図は、推定上面を平面図に描いた。1は鉄床石の可能性がある。何度も敲打したような痕跡があり、表面は鉄分が付着し磁性を帯びる。表面の剥離が著しい。砂岩ないしシルト岩か。1, 4は6区の出土。2は炉体で発泡した鉄滓が溶着する。457g。2, 3, 5は2区Gトレンチ。3も鉄滓の溶着した炉体。405g。4は碗形滓。210g。5も碗形滓。366g。6は精錬滓か。108g。6は3区SD3036の出土。7は不明鉄滓。74g。7, 13～15は3区SX3032の出土。8は炉壁片か。8は2区SX01内の柱穴(SP2101?)から出土。9は小型椀形滓。34g。9～11は3区SX3031出土。10は椀形滓か。421g。11~15はフイゴ羽口の破片。12は3区SX3041最上層出土。その他、図化していない鉄滓として、2区東半Gトレンチからは木炭分を噛み込む大小の鍛冶滓が1箱分、流動滓を少数出土した。また、3区SX3032からは含鉄鉄滓(鉄塊系遺物)、マグネタイト系鉄滓などの鉄滓若干が、SX3031からは炉底塊(滓)が複数出土した。これらはいずれも遺構に伴わず、流れ込みの遺物である。いずれも時期は古代だろう。

3）縄文時代の遺物

各調査地点から縄文時代の遺物が出土しているが、包含層出土が多く、明確に遺構に伴うものはない。土器は中期の船元、並木式から晩期までの時期で、いずれも小片である。石器は、ある時期の組成を示すものではない。その中で掲載したものは、土器は口縁部および文様等の特徴がある破片、石器は石鏃、石斧等の定型化したもの、顕著な調整剥離を施したスクレイパー、磨製石器についてのほとんどである。石器については弥生時代のものも含む。石材については表に示した。以下、各区ごとに主なものについて触れる。

(1) 1区出土遺物（Fig.95）

縄文期の遺物は少なく上器は図化に耐えるものはない。1は石鏃で基部および頂部が欠損する。表裏両面に細かな調整剥離を施す。2はスクレイパーで、横長剥片の縁辺の両面に調整剥離を施し刃部を成形する。

(2) 2区出土遺物（Fig.95～99）

今回の調査で最も出土遺物が多い。3から5は扁平の円形を呈し、磨石とした。3は花崗岩製で鉱物粒が比較的細かい。表裏両面を磨き、片面はややくぼむ。4は玄武岩製で上下側面共に磨き、側面との稜がはっきりする。側面には敲打痕が残る。5は玄武岩製で全面に敲打痕を残す。全面を磨くが、上下面でやや磨きに差があり、片面はより平坦になる。1・2区間の表採品である。

6は口縁部下に低い突帯を付し、口唇部、突帯に爪形状の浅い刻目を施す。下段の刻み目は上段より疎で大きく、板目または貝殻側縁痕状の痕跡が残る。胎土は粗く茶褐色を呈す。器面が摩耗した小片で全形は不明だが、船元式系と考えられる。7～34は主に粗製土器で条痕、ナデ調整のものを主体とし、擦痕を残すものがあるが、器面が荒れているものが多い。後期から晩期のものと考えられる。7～19は

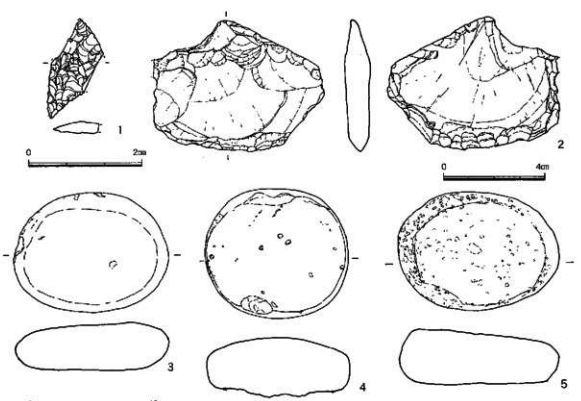


Fig.95　1・2区出土石器（S=1/1, 2/3, 1/3）

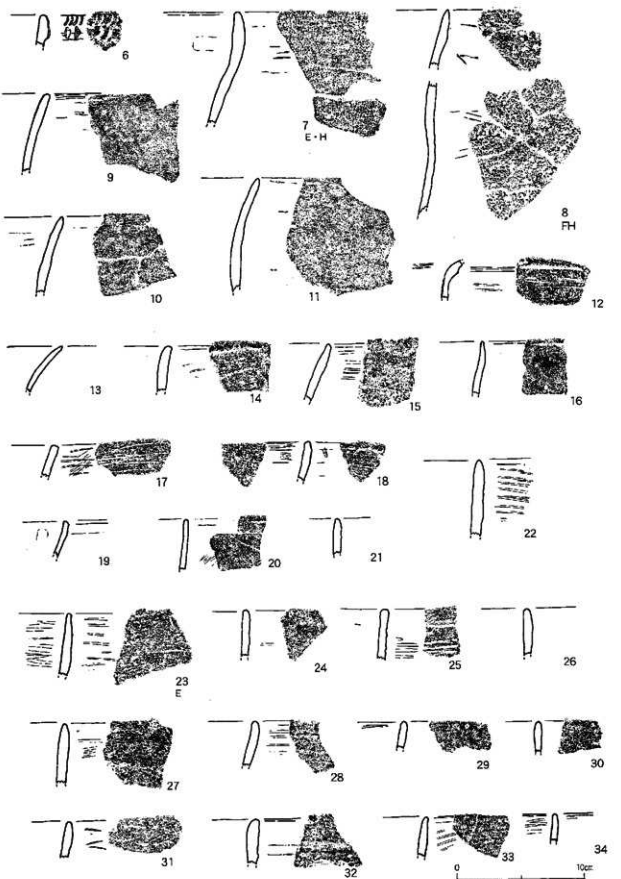


Fig. 96　2区出土縄文土器 (1) (S=1/3)

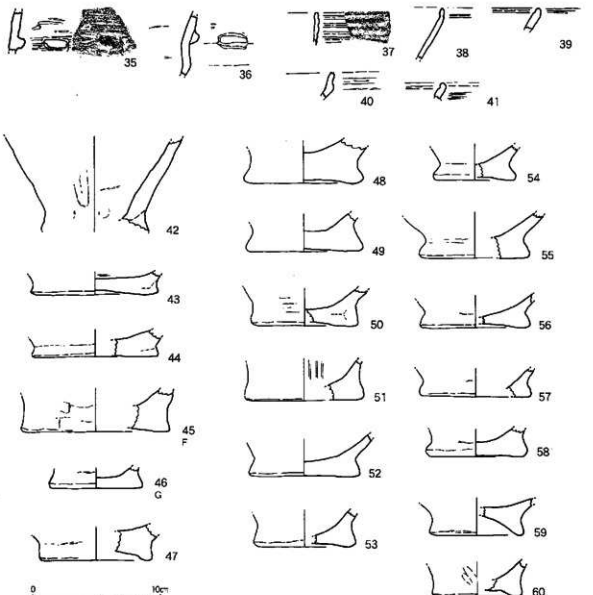


Fig. 97　2区出土縄文土器 (2) (S=1/3)

口縁部が外反する。7は外反する胴部から口縁部で内湾気味に立ち上がる。外面に横方向の条痕調整がわずかに残る。8,9は器面が荒れ不明瞭であるが横方向の条痕調整と考えられる。10は口縁部に横ナデを施し外面は口縁帯状を呈す。器面は荒れている。11は横方向のナデ調整。12は外反する口縁部外面に1条の沈線を施し段状を呈す。器面が荒れのため不明瞭ではあるが、横方向の研磨状の調整が見られる。14, 15は横方向の条痕調整の後に軽くナデを施す。17, 18には横方向の擦痕が見られる。20～34は口縁部が直立気味のものである。22は外面に横方向の条痕が明瞭に残り、内面はナデである。23は外面に横方向の擦痕、内面は研磨を施す。25は外面条痕調整の後にナデを施す。27は外面に擦痕、28, 33は条痕が残る。34は内外面とも研磨状の丁寧な調整を施す。35, 36は体部に横方向に突起を貼付する粗製の鉢で黒川式併行の鉢と考えられる。37は太めの沈線4条が見られる古閑式併行の鉢と考えられる。38は器面が荒れて調整不明。精製の鉢または深鉢になると考えられる。40, 41は精製の浅鉢で胎土が精良で研磨調整を施す。黒川式併行の浅鉢である。42～60は底部片で断面台形を呈す。42～46は底内面が広く体部へ急に立ち上がる。これに対し50～60は緩やかな立ち上がりで黒川式併行以降のものと考えら

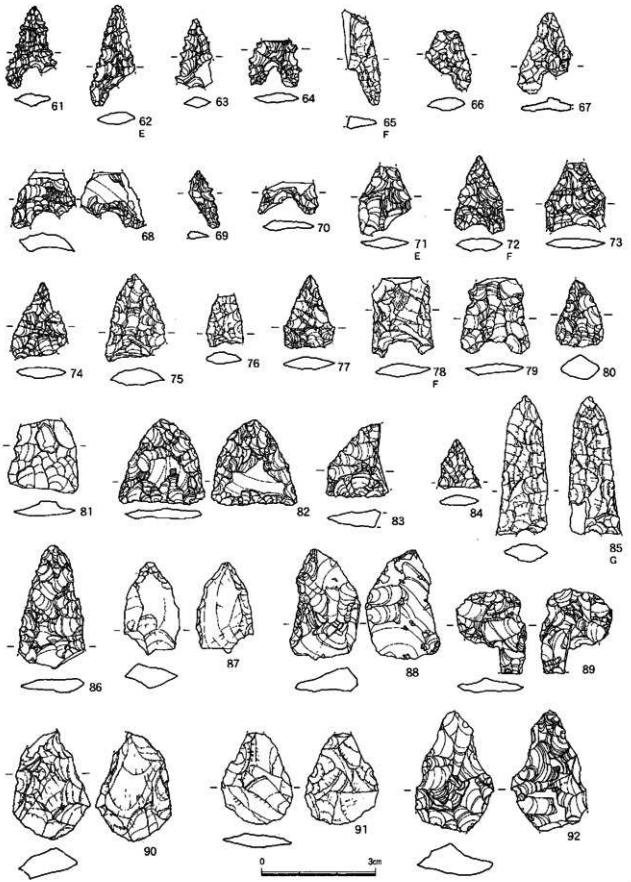


Fig. 98　2区出土石器 (1) (S=1/1)

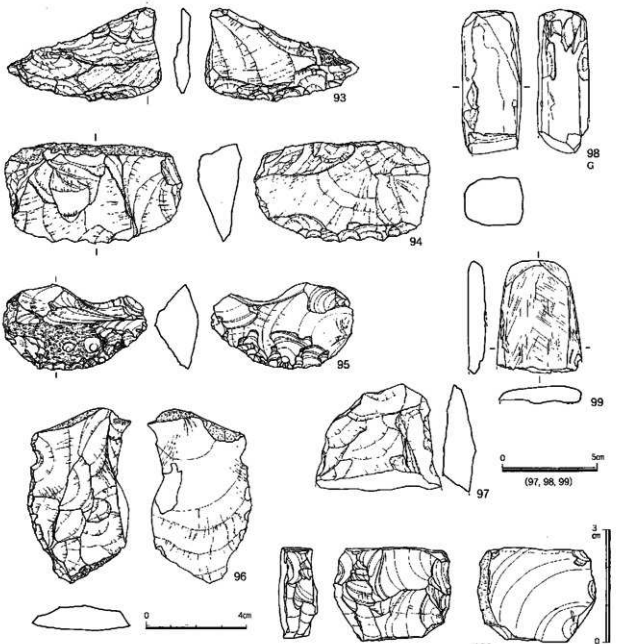


Fig. 99　2区出土石器(2) (S=2/3, 1/1)

れる。

61～85は石鏃である。61～64は調整剥離による鋸歯縁が顕著で基部の抉りが深めである。以下抉りが深いものから浅いもの、平基のものがある。72, 73, 77は両側辺に突起状部があり五角形様を呈す。76, 81は摩耗が著しい。85は長身で基部は欠損しているが、抉り部がわずかに残る。86～92は石鏃の未製品と考えられる。93～96はスクレイパーである。93は縦長剥片の1辺に調整剥離を施し刃部を成す。94は自然面を打面とする横長剥片の縁辺に主剥離面側に調整剥離を施す。95は縦長の剥片の1辺の主剥離面側に調整剥離を施し、背面には自然面を多く残す。コアブランクの可能性もある。96は自然面を打面とする縦長剥片の1辺に片面からの調整剥離を施し、端部に自然面を残す。97は打製石斧の基部である。98は弥生時代の柱状石斧で片刃になると考えられる。側面の1方に細かな敲打痕が残る。99は磨製石斧の基部である。扁平で擦痕が残る。100は石核で剥片素材を利用し、側片の自然面を打面として剥片剥離を行う。素材の打面側には自然面を残す。

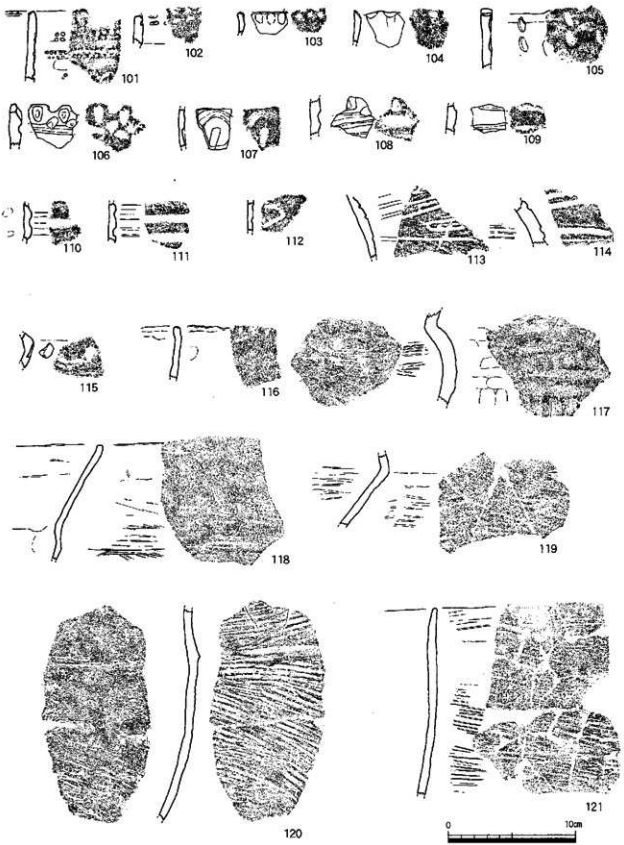


Fig. 100　3区出土縄文土器 (1) (S=1/3)

以上、2区では6が中期の船元式の6,35～41が晩期と判断できる他は明確な時期が決め難い。粗製土器が多いが、底部に後期から晩期前半以前のものが見られ、また鋸歯縁鏃の存在から、黒川式併行期を主体としながら後期に遡るものもあると考えられる。

(3) 3区出土遺物（Fig.100～102）

2区に次いで出土遺物が多い。101～111は胎土に滑石を含む一群である。101は横走する上下2つ1組の小さな刺突文列2列の間に浅い不明瞭な凹線を施し、口唇部に刺突文を施す。上から1列目は上下の刺突文が併行するが、2列目は下が小さく浅く、上のものとずれる。さらに下に2つの刺突が見られるが構成は不明である。並木式と考えられる。102は小片に2列の刺突文を施す。103は口縁部に指頭によると思われる浅く小ぶりな凹点文を施す。104は口唇部を指でつまむことで浅い凹点文を施す。105は口縁部に2列の爪形状の凹点文を施し、口唇部に押圧による窪みが見られる。滑石は混じる程度で少ない。106は口唇部に連続する押圧を施し口縁部は波状を呈す。口縁部には2列の凹点文の下に凹線を施す。106から111には凹線文を施す阿高式系の土器である。112は薄いナデ調整の器面に繊維状の工具による沈線で弧を描く。小片で天地不明。113，114は頸部が鋭利な沈線を施す鐘崎式であるが、縄文は見られない。117も器形から同様の時期と考えられる。外面にナデ調整痕が明瞭に残る。115は胴部屈曲部に刺突を施す。116は器壁が薄く、内外面ともナデ調整で口縁部に浅い刻みを施す。118から131は粗製土器で条痕またはナデ調整を施すものが多い。後晩期のものと考えられる。118は胴部と頸部で屈曲し口縁部まで外傾する。条痕調整の後にナデ調整を施す。119は、内面は研磨調整で平滑で外面は条痕調整の後にナデを施す。120，121は外面に条痕調整が明瞭に見られる。122は外反する口縁部の一部が押圧によりくぼむ。125は横方向の条痕調整を施し、焼成後に穿孔する。126はナデ調整で口縁部に山形の波状部がある。127は削り状の擦痕、128，129は条痕調整の後にナデと擦痕を施す。129，130はナデ調整である。132は外反する頸部に縦長の突起がつく黒川式併行の鉢。133は黒川式併行の浅鉢。134は薄い器壁をナデ調整で仕上げる底部で中期のものと考えられる。135～138は胴部がそこから急に立ち上がる特徴から、後期から晩期前半までのものと考えられる。139～142は断面台形を呈す黒川式併行期を中心するものであろう。144～146は滑石を多く含み阿高系のものと考えられ、144は指頭による押圧文を付す。149は土器を転用した有孔円盤で滑石を多く含む。

150～158は石鏃である。150～152は細身で側縁に段を有し五角形を呈す。150は片面に主剥離面を残し、152は両面に局部磨製を施す。153は狭く深い抉りが入る、いわゆる鍬形鏃である。154はいわゆる剥片鏃で基部にわずかに調整剥離を施す。156は未製品と考えられる。157は尖頭器の先端部と考えられる。158は薄い剥片の背面に調整剥離を施し、丸みをおびた五角形様を呈す。石鏃か。他と比べて表面の磨滅が著しい。159，160は緩長剥片。160は自然面を残し、側縁に使用によると考えられる剥離がわずかにみられる。161は弥生期の扁平磨製石斧で片刃になると考えられる。

3区は、土器は並木式、阿高式系の中期（～後期初頭）の遺物が比較的多く、鐘ヶ崎式、黒川式も出土した。また、石器でも五角形の局部磨製鏃、鍬形鏃、剥片鏃、尖頭器、縦長剥片と草創期末～早期を含む各時期の多彩な遺物がある反面、時期的なまとまりはない。

(4) 4区出土遺物（Fig.103）

縄文期の遺物は少ない。162，163は粗製の鉢または深鉢。162は内外面に条痕調整、163はナデ調整で外面に条痕調整の痕跡が残る。164，165は断面台形を呈し、黒川期併行のものと考えられる。166，167は石鏃の未製品と考えられる。166は横長の剥片の側縁に調整剥離を施す。

(5) 5区出土遺物（Fig.103）

168は石鏃で緩やかな凹基で五角形になると考えられる。

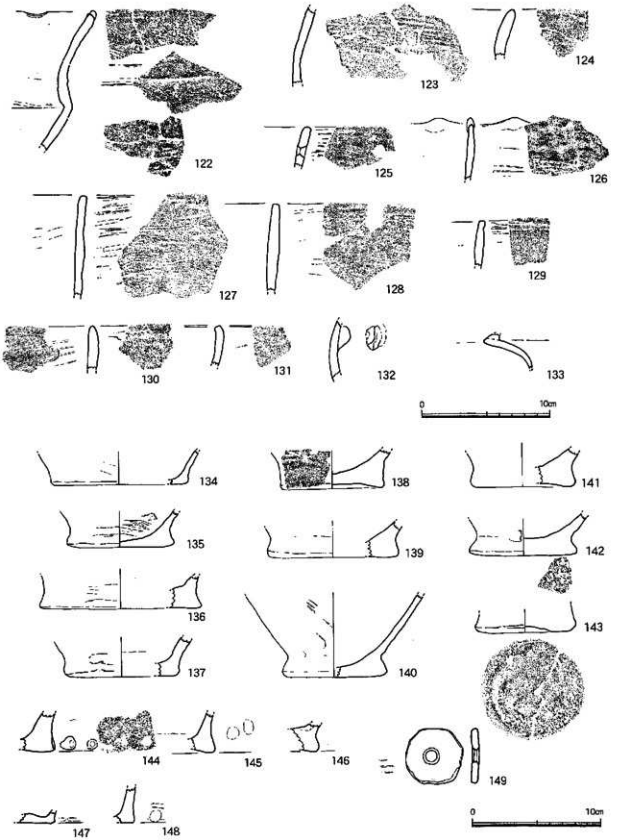


Fig. 101　3区出土縄文土器(2) (S=1/3)

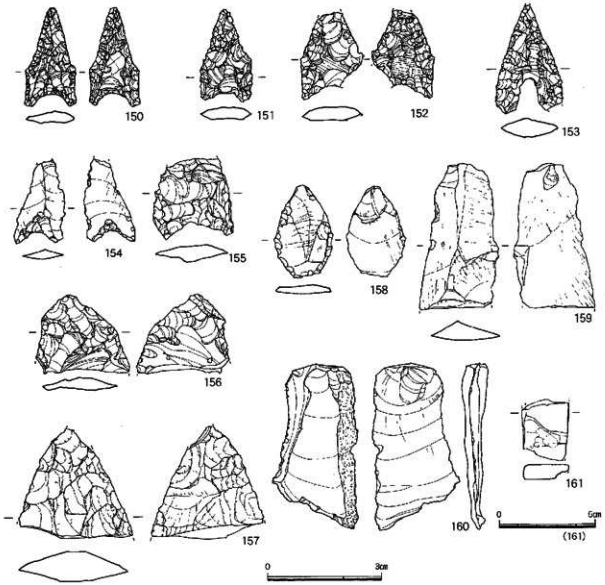


Fig. 102　3区出土石器 (S=1/1, 1/2)

(6) **6区出土遺物** (Fig. 103)

169は外面に指頭圧痕が見られる。後期の深鉢の底部と考えられる。170は断面台形を呈し内面に擦痕が残る晩期のものであろう。171は石鏃で五角形を呈す。表裏両面に局部磨製を施し、草創期末から早期前半のものと考えられる。

(7) **7区出土遺物** (Fig. 104～106)

172は押引文を施し、胎土には滑石を多量に混入する並木式土器で、押引文には木目状の痕跡が見られる。173～189は粗製の鉢または深鉢で条痕またはナデ調整で仕上げる。173は口縁外面に突帯を付し、口唇部に浅い押圧による刻みを施す。174も口唇部に浅い押圧を施す。175は口縁部を胴部より厚く成形し内面に不明瞭な段を成す。176は口唇部に刺突文を施し、その部分を厚くする。177は先端を細く仕上げた口唇部にごく浅い刻み目を施す。178は波状口縁を呈し、内面に条痕調整を残す。外面は荒れている。179は強く外反し、外面は横方向の1本を単位とする条痕状の調整で内面はナデである。180～189は直口する口縁で180, 182, 185に条痕調整が見られる。他は器面が荒れている。182は縦方向に条痕を施す。183は口縁部を厚めに仕上げ、内面に擦痕が見られる。口縁部は波状になる可能性がある。190は黒川式併行期の浅鉢である。191は口縁部下に断面三角形の突帯を貼付し、一部に極浅い調整時のものと

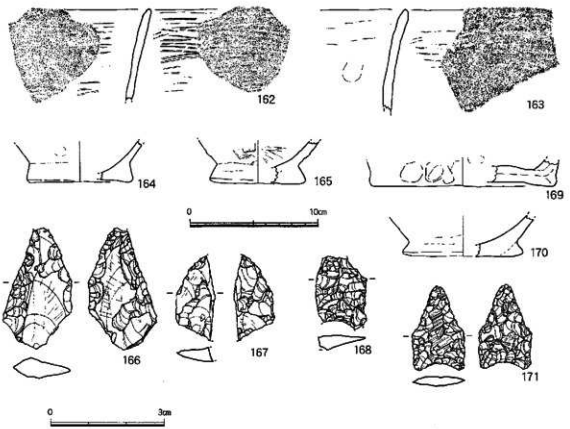


Fig. 103　4～6区出土縄文土器 (S=1/3)・石器 (S=1/1)

思われるくぼみが見られる。晩期の無刻みの突帯文と考えられる。195は内外面を条痕調整で仕上げる鉢である。196は晩期の黒色磨研浅鉢である。192は断面台形を呈す底部。193は上げ底で脚状を成す。194は厚手の底部で5㎜大までの砂粒を含む。

197から201は石鏃である。197は片面に主剥離面を残す。202，203はスクレイパーである。202は縦長剥片の両縁に丁寧な調整剥離を施す。203は縦長剥片の縁部に2次調整を施す。204は石斧の基部で扁平に成形した後、側縁に調整剥離を施す。205は磨石で全体に敲打痕が残り、平坦部が使用により磨れている。

7区の土器は1点の並木式と黒川式の浅鉢の他は粗製土器である。それらは、176等が後期と考えられ、晩期を主体としながら、後期までの幅をもつものと考えられる。石器でも剥片鏃、縦長剥片存在から同様の時期が想定できる。

(8) その他の遺物 (Fig.106)

206，207は出土地不明。206はいわゆる鍬形鏃で早期のものと考えられる。207は縦長の剥片を成形した尖頭器と考えられる。

(9) 小結

繰り返しになるが、全体の遺物の時期を確認しておく。土器は小片で粗製土器が多いため時期が決め難いものが多い。後期から晩期が主体を占めると考えられるが、時期が明確なものは一部の道崎式、黒川式のみである。そのなかでも断面台形の底部が多いことから、晩期黒川式併行期が主となると考えられる。この他には中期の船元式、並木式、阿高式系の土器が小片ながら出土し、3区で比較的量が多い。

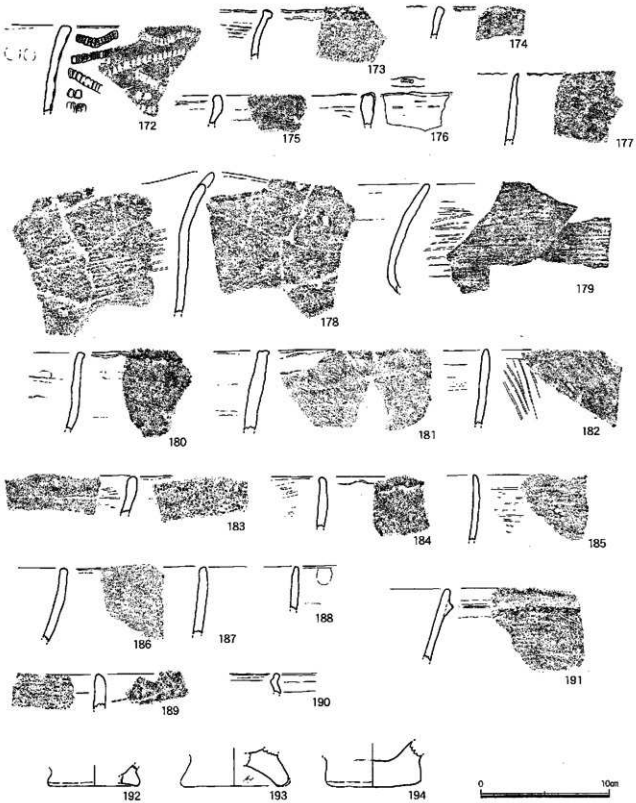


Fig. 104　7区出土縄文土器 (1) (S＝1/3)

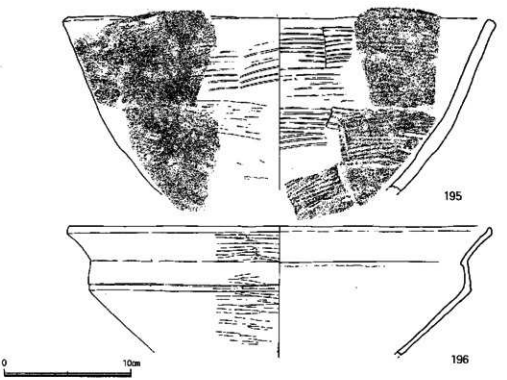


Fig. 105　7区出土縄文土器 (2) (S=1/3)

石器では3区の150～152のような局部磨製を伴う五角形鏃の一群と、157のような尖頭器が草創期から早期前半、153のような鍬形鏃が早期押型文期のもので周辺にこの時期の遺跡の存在を窺わせる。2区の61～64の鋸歯縁の鏃は中期から後期のものと考えられ、154や202のような剥片鏃、縦長剥片が後期中葉から晩期前半に特徴的な石器である。他の石鏃の多くは晩期から一部弥生時代まで下るものを含むと考えられる。(池田佑司)

4) 旧石器時代の遺物 (Fig. 107)

本調査区では少量の旧石器時代の剥片石器類が出土した。いずれも本来の遺構や包含層を遊離し、新しい時期の遺構などに混入したものであるが、本地域の人類活動や遺跡形成を知る手がかりとなるものであり、以下に報告する。

1はナイフ形石器である。3区東半のSP3009下層より出土した。刃部下半から基部を調査時に欠損している。石材は漆黒色黒曜石であり、自然面は細かな凹凸があるものの原石は比較的平滑な円礫と推定される。牟出産か。表面の風化は著しい。素材は横長剥片であり、背面にはネガティブの平坦な大剥離面があり、石核の分割面とみられる。打面には自然面が残るが、二次調整のために未調整打面であったのかは不明である。本素材は剥片剥離初期の剥出とみられる。ブランティングは現状では一側縁にのみ認められ、欠損部側が不明である。調整は背面からおこなわれ、剥離が先端部は主剥離面に達するが、中位付近は主剥離面に達していない。したがって打面に近い中央付近の調整には素材時の打面調整が含まれる可能性がある。現存長2.3cm、幅1.3cm、厚さ0.6cmを測る。

2はエンドスクレイパー(掻器)である。4区のSX4011中央東西ベルト出土である。石材は半透明の黒色黒曜石であり、自然面は細かな凹凸があるものの原石は比較的平滑な円礫であり、牟出産と推定される。表面の風化はやや進んでいる。素材は不定形剥片であり、背面は自然面であり、石核形成時の初期剥離の幅子状剥片とみられる。二次調整はすべて上剥離面から施され、刃部形成に関わるものであ

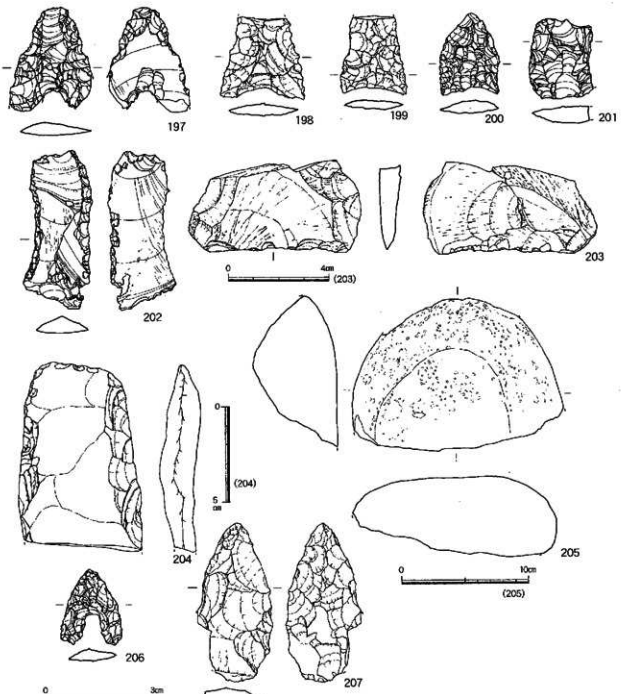


Fig. 106　7区出土石器 (S=1/1, 2/3, 1/2)

る。調整は外周の約二分の一に及んでいる。全体に円形に近く、刃部もやや不整ながら円弧を描いている。現存長2.0cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測る。

3はエンドスクレイパーである。6区の上部水田上から出土している。剥片基部から側縁の一部は調査時に欠損している。石材は漆黒色の黒曜石であり、自然面は径2～3mm大のアバタ状の凹凸があり、原石は亜円礫とみられる。牟田産か。表面の風化は進んでいる。素材は縦長の不定形剥片であり、背面には先行する複数の剥離面がある。素材剥離は単一打面からの連続的な剥離が予測されるが、本剥片剥離時には打点部が破砕している。二次調整は先端部のみにみられ、刃部形成に関わるものである。調整は主剥離面と背面の両側からおこなわれており、背面からの剥離は素材形状からみて、端部の厚みを減

石　器　一　覧　表										
挿図番号	図番号	区	登録番号	出土位置	器　種	石　材	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	備　考
Fig.95	1	1区	10001	河道(水田南半、水田下砂礫層)	石鏃	黒曜石	26	14	4	
	2	1区	10002	南壁周囲一括	スクレイパー	古銅輝石安山岩	53	68	11	
	3	2区	10004	SX01 - Jトレ西半、黒褐色土層	磨石	花崗岩	101	95	38	
	4	2区	10006	表採	磨石	玄武岩	105	113	48	
	5	2区	10005	表採	磨石	玄武岩	94	126	42	
Fig.98	61	2区	10041	SX01 - 南ベルトⅡ層	石鏃	黒曜石	22	14	3.5	
	62	2区	10034	SX01 - Ⅲ区北西半Ⅰ～Ⅱ層	石鏃	黒曜石	17	12	4	
	63	2区	10054	SX01 - Ⅲ区北西半中層(黒褐色土)	石鏃	黒曜石	19	10	3	
	64	2区	10047	SX01 - Ⅰ区上～中層	石鏃	黒曜石	13	14	3	
	65	2区	10010	SX01 - No.93	石鏃	黒曜石	26	8	4	
	66	2区	10022	SX01 - Ⅱ区南上層	石鏃	黒曜石	16	12	4	
	67	2区	10033	SX01 - Ⅲ区北西Ⅰ～Ⅱ層	石鏃	古銅輝石安山岩	22	13	4	
	68	2区	10062	SX01 - Ⅱ区北ベルト上半層(黒～褐色土層)	石鏃	黒曜石	15	16	5	
	69	2区	10025	SX01 - Ⅲ区上～中層	石鏃	黒曜石	16	6	3	
	70	2区	10023	SX01 - Ⅲ区北西ベルトⅠ層	石鏃	黒曜石	16	9	3	
	71	2区	10065	SX01 - Ⅱ区No.79	石鏃	黒曜石	19	14	3	
	72	2区	10029	SX01 - Ⅲ区No.190	石鏃	黒曜石	21	13	4	
	73	2区	10028	SX01 - 南東中層	石鏃	黒曜石	19	16	3	
	74	2区	10032	SX01 - Ⅱ区最上～上層	石鏃	黒曜石	21	14	4	
	75	2区	10031	SX01 - Ⅱ区最上～上層	石鏃	黒曜石	23	16	5	
	76	2区	10049	SX01 - Ⅰ区上～中層	石鏃	黒曜石	14	10	3	器面摩耗
	77	2区	10044	SX01 - SP2148	石鏃	黒曜石	19	14	4	
	78	2区	10011	SX01 - No.93	石鏃	黒曜石	21	16	4	局部磨製
	79	2区	10019	SX01 - Ⅱ区東ベルトⅠ層	石鏃	黒曜石	20	18	4	
	80	2区	10024	SX01 - Ⅲ区北西半褐色砂層(中層)	石鏃	黒曜石	18	12	7	
	81	2区	10020	SX01 - Ⅱ区南上層	石鏃	古銅輝石安山岩	18	20	4	器面摩耗
	82	2区	10050	SX01 - Ⅱ区南(東半)上～中層	石鏃	黒曜石	23	23	3	
	83	2区	10036	SX01 - Ⅱ区中南部上層	石鏃	黒曜石	20	16	5	
	84	2区	10048	SX01 - Ⅰ区上～中層	石鏃	黒曜石	12	11	3	
	85	2区	10059	SX01 - Ⅳ区上層	石鏃	古銅輝石安山岩	37	13	5	
	86	2区	10039	SX01 - Ⅱ区SP2111	石鏃	黒曜石	33	17	4	
	87	2区	10021	SX01 - 南上層	石鏃	古銅輝石安山岩	25	15	6	
	88	2区	10014	SX01 - Ⅴ区西最上～上層	石鏃未製品	黒曜石	29	19	6	
	89	2区	10035	SX01 - Ⅲ区北西Ⅰ～Ⅱ層	石鏃未製品	黒曜石	22	18	3	
	90	2区	10058	SX01 - Ⅲ区No.302	石鏃未製品	古銅輝石安山岩	29	20	8	
	91	2区	10055	SX01 - Ⅱ区南上～中層	石鏃未製品	古銅輝石安山岩	24	18	4	
	92	2区	10045	SX01 - Ⅲ区No.304	石鏃未製品	黒曜石	32	21	8	
Fig.99	93	2区	10015	SX01 - Ⅲ区No.194	スクレイパー	古銅輝石安山岩	37	60	7	
	94	2区	10046	SX01 - Ⅳ区最上層	スクレイパー	古銅輝石安山岩	40	69	18	
	95	2区	10013	SX01 - Ⅱ区北(中～東)中層	スクレイパー	黒曜石	35	56	16	コアブランクか
	96	2区	10016	SX01	スクレイパー	古銅輝石安山岩	70	38	11	
	97	2区	10007	SX01 - Ⅱ区北Ⅲ層下半(～Ⅳ層)	扁平打製石斧	玄武岩	57	66	18	
	98	2区	10063	SX01 - Ⅲ(Ⅳ?)区No.196	柱状石斧	頁岩	76	30	26	
	99	2区	10038	SX01 - Ⅱ区南上層(～中層)	磨製石斧	蛇文岩	60	45	10	
	100	2区	10017	SX01 - Ⅱ区南上層	石核	黒曜石	25	30	10	
Fig.102	150	3区西	10077	SX3038 - 北上層（黒褐色シルト＋礫層）	石鏃	黒曜石	26	13	3	
	151	3区西	10075	SX3041 - No.13（縄文晩期層）	石鏃	黒曜石	24	14	3	
	152	3区西	10074	SX3041 - Aベルト下層（灰褐色土層）	石鏃	黒曜石	23	16	4	局部磨製
	153	3区西	10073	SX3041 - 北外下層(黄色シルト)	石鏃	黒曜石	29	18	4	
	154	3区東	10081	SX3102 - Ⅰ区	石鏃	黒曜石	22	13	3	
	155	3区西	10079	SX3041 - f区Ph.3前掘削中	石鏃	黒曜石	21	21	4	
	156	3区西	10080	SX3031 - Ⅰ区東半下層黒灰色シルト＋礫層	石鏃未製品	黒曜石	21	24	4	
	157	3区西	10090	SX3041　Ⅰ区Ph.3	尖頭器	古銅輝石安山岩	29	30	9	
	158	3区西	10076	SX3041 - a区縄文晩期灰色シルト	石鏃	黒曜石	24	15	2	器面摩耗
	159	3区西	10086	SX3041 - c区Ph 2 前清掃中	縦長剥片	古銅輝石安山岩	39	21	5	
	160	3区西	10078	SX3041 - b区Ph 3 前	縦長剥片	黒曜石	44	23	6.5	
	161	3区西	10089	SX3041 - b区Ph 4 前掘削中	扁平石斧	頁岩	31	25	9	
Fig.103	166	4区	10096	SX4011 - 南側落ち込み西半	石鏃未製品	黒曜石	32	19	6	
	167	4区	10098	SX4011 - ⑯-⑰間ベルト砂礫層	石鏃未製品	黒曜石	24	10	4	
	168	5区	10100	SD5102	石鏃	黒曜石	20	13	4	
	171	6区	10101	SX6001シルト層	石鏃	黒曜石	23	14	3	局部磨製
Fig.106	197	7区	10123	SX7071 - Cトレ西拡張下層(～灰色粘土層)	石鏃	黒曜石	27	21	3	
	198	7区	10116	SX7071	石鏃	古銅輝石安山岩	22	23	4	
	199	7区	10115	SX7071 - Cトレ西拡張下層(～灰色粘土層)	石鏃	古銅輝石安山岩	21	18	3	
	200	7区	10119	SX7071　Ⅰ区(～Ⅱ区)下半層	石鏃	黒曜石	22	16	4	
	201	7区	10122	SX7071 - Cトレ西拡張下層(～灰色粘土層)	石鏃	黒曜石	22	17	5	
	202	7区	10120	SX7071 - Ⅰ区西南区黒色土層（?）	スクレイパー	黒曜石	42	27	5	
	203	7区	10113	SX7071 - No.23	スクレイパー	古銅輝石安山岩	38	68	8	
	204	7区	10111	SX7071 - Cトレ西拡張下層(褐灰色～灰色粘土層)	打製石斧	玄武岩	100	65	21	
	205	7区	10124	SX7071　No.35	磨石	砂岩	117	119	65	
	206		10132	不明	石鏃	黒曜石	21	16	4	
	207		10131	不明	尖頭器	古銅輝石安山岩	42	20	6	

tab. 2　元岡・桑原２次調査出土石器一覧表

ずる意図があったと予測できる。現存長3.2cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmを測る。

以上の石器のうち、1は後期旧石器時代後半期のナイフ形石器段階終末期に位置づけられる。2、3は確実な時期比定は困難であるが、後期旧石器時代末の細石器段階から縄文時代草創期の範疇に位置づけられよう。（吉留秀敏）

・4区SX4011出土土器説明補足（66頁承前）

Fig. 87－3～6、Fig. 89－8～10は小型丸底壺（鉢）。このうちFig. 87－4、Fig. 89－8は水漉精良胎土で細かいヨコミガキを施す「精製器種B群」の系統。他は胎土がやや粗い、あるいはハケメが残る、ナデ仕上げ、ヨコミガキはあるが疎らで下の調整が残る、器壁がやや厚いなど、精製であるべき諸要素の何れかが欠落する粗製傾向品。ある意味では精製器種B群を模倣したものである。これらはⅢA期古相に顕在化し、SX4011の大部分であるⅢA期新相に増加し、さらに粗製化したものが多数となりⅢB期の上器様相となる。Fig. 87－7, 9はD系の小型壺。7は小型鉢としてもよい。9の体部は縦のミガキ。Fig. 87－12のB系の小型鉢（体部タタキ、底部内面横板ナデ）、平底気味残りやや古い型式か。Fig. 88－28もB系の小型鉢(内面のハケ)。これは伴ってよいもの。Fig. 87－11, Fig. 89－1～7はA系の小型鉢。Fig. 89－2, 4は器形的に古い型式（ⅡA期前後か）であろうが、他はⅢA期でも問題ない。このような鉢がこの時期でも残り、以降の時期の塊状の鉢類の一部に系統的に変化すると考えるべきである。Fig. 87－13は弥生後期～終末の鉢か。混入品だろう。

Fig. 87－14～18、Fig. 88－2～4、Fig. 89－19～25は高坏。このうちFig. 88－2は、脚裾部への屈曲はB系的、接合法（Fig. 111）はE類でA系的でA－B系折衷高坏か。Fig. 87－14は高坏D8（坏部屈曲部

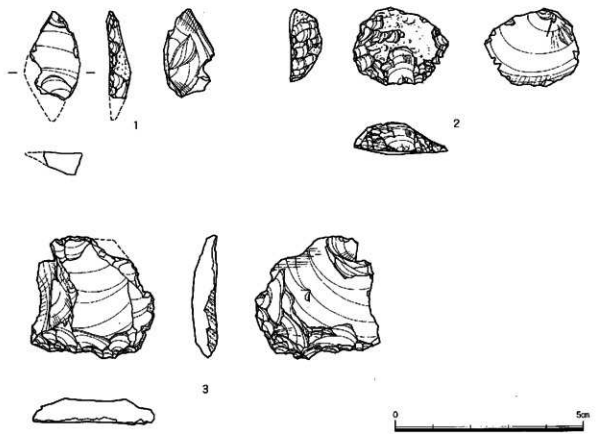


Fig. 107　元岡・桑原遺跡群第2次調査出土旧石器資料（1/1）

径が広く、坏部口長が短く口縁部が外反気味、接合法はB1類が多く一部A2・B3類)。Fig.87－18は接合法B3a類で、これを「D14」とする(久住猛雄1999では未設定)。高坏D14は、D8よりD9(布留式系精製高坏)に近い器形で、接合法がB1類またはB3類が多い(D9のような顕著なヨコミガキは欠落するが、胎土は精良で丁寧な作りのもの)。後述するように接合法C類系を有するものもある。Fig.87－17は接合法B1類で、高坏D14またはD8。Fig.87－16はヨコミガキあるも疎らで、接合法はB1類と予想され、高坏D8の可能性が高い。Fig.87－15は接合法B3類。胎土は比較的精良。高坏D14ないしD8か。エンタシス状の脚柱状部で重藤分類(前掲)の高坏B類へ繋がる型式か。Fig.88－3、4は同一。接合法B1類で高坏D8。Fig.88－5は高坏D13ないしD14か。Fig.89－20は精製品で高坏D9であろう。Fig.89－21は接合法C3類に近いが、B2類に見られるような輪芯孔がある。胎土は比較的精良。イレギュラーであるが高坏D14の一種とみたい。Fig.89－22は接合法A2類で、高坏D12またはD13。Fig.89－19は縦ミガキが内面にあり、口縁部端部の手法などからも高坏D11(高坏A系譜)か。Fig.89－24は接合法C3類に近いが、接合面に刻目がありC2類との折衷(C4類とする)。これもイレギュラーだが高坏D14とする。胎土は水漉に近い精良胎土。Fig.89－25は、高坏D9に近い器形だが、接合法はB1類、丁寧なナデ仕上げ(ヨコミガキ一部のみ)。胎土は水漉胎土と言ってよく、高坏D14。Fig.89－27は、脚柱状部から裾部への移行がなだらかで、接合法C3類。高坏Aの最新型式か。Fig.87－22は、比較的精良な胎土で丁寧な作り。高坏D8に類似して坏部屈曲部径が口径に比して広いが、口縁部は直線的に立ち上がるもの。新たに高坏「D16」を設定する(久住1999では未設定)。類似のものに羽根戸南G－4号墳下層出土高坏(福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集—図155－5)があるが、これは接合法が推定A2ないしA3類。

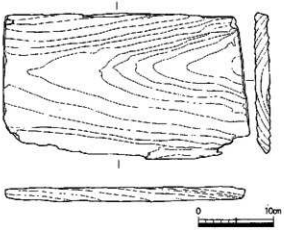


Fig. 108　3区SX3041下層出土木板(S=2/5)

Fig.87－21はA系の脚付鉢。体部外面タタキ。体部大きく、Fig.87－19のような甕Aの末期型式(胴部比1.8)と共伴。これらはSX4011のB群一括だが、Fig.110－4の甕Dや弦形器台(Fig.87－24)とも共伴し、ⅢA期古相にはA系統が残存する証左である(糸島地方で顕著)。Fig.87－24、Fig.89－26は弦形器台。いずれも回転ヨコナデの凹凸が顕著ではなく、口径の割に器高が低く、頸部径と口径の差が顕著で最新型式であり、ⅢA期の範疇である。

Fig. 109　SP2101出土ガラス小玉(2倍)

Fig.87－10はD系の影響を受けているが、A系の直口壺。壺A(D)。Fig.87－23は甕A(D)としたが類似するもの。Fig.88－29はA系壺の胴部下半の破片。扁平な突帯で古墳初頭には下るが、小片であり混入だろう。Fig.89－11はA系の大型複合口縁壺の口縁部。タタキのような粗い条痕のハケメを施し、口縁部反転部の形態からも古墳初頭(ⅡA期以降)には下るが、小片であり混入だろう。Fig.89－12は、一見弥生中期前半の壺にも似るが、頸部下の粘土帯の積み上げからB系壺とみたい(二重口縁壺か)。胴

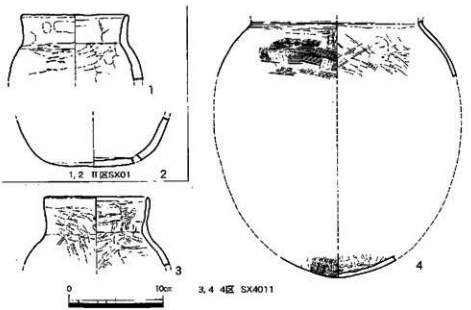


Fig. 110　土器実測図（補遺）（S=1/4）

部外面は摩滅し不明瞭だが、タタキの可能性がある。Fig. 89－19は布留式のX形小型器台。ヨコミガキを施すが疎らであり、受部と脚部の間は一度充填してから穿孔するイレギュラーな作り（図版22右列参照）。ある種の模倣品。Fig. 111のⅣB類（型式）。Fig. 110－3は粗雑な作りの直口壺。外面と口縁部内面はケズリのようなナデで仕上げるが（胴部内面はヘラケズリ）、胴部外面は右上タタキの痕跡があり、A系の痕。

Fig. 89－28の陶質土器は（承前）、外面縦位平行タタキ（かすかな縄蓆文の可能性がある）→下半を格子目タタキ（斜格子に近い）で仕上げ（丸底になるだろう）、胴部にラセン沈線を施す（沈線後に格子目タタキ）。内面は、ロクロナデ後にナデを施す（図版22二段目）。焼成はやや甘く、陶質というより瓦質に近いぐらいであるが、型式・時期的に陶質土器とするのが適当か。灰色～灰白色。胎土はきわめて精良で、長石小粒と、黒色微細粒を微量含む。調整や器形から韓国の嶺南地方（伽耶）のもの。同一個体（？）の可能性のある破片が3片でも出土している（図版22左列中央）。

以上のSX4011の土器群は、一部の混入品を除くと、B群が一時期古くⅢA期古相と考えられる他は、おおむねⅢA期新相の資料と思われる。土器の様相としては、粗雑化し、規範が崩壊し、D系統技法と融合ないしはその中に埋没したA系統技法が存在することが明らかな資料である。またそうした様相が、この地方における次のⅢB期への展開を規定していることも読み取れる資料である。紙幅の都合上、各個体の詳しい調整の記述や胎土・色調について触れることができなかった。御寛恕されたい。なお、甕Dの特徴について若干触れておく。口長が中型品（口径15～19cm）でも3.5cm以上が多く（4.0cm以上も少なくない）、大型品（口径19cm以上）は、ほぼ確実に口長4.0cm以上である。変化の方向として、2区SX01の土器群と比べても甕Dの口長が延びて行くのは確実な傾向である（ただし同一様式内でばらつきがあるのも事実である）。また早良平野や福岡平野産と推定したもの以外は、内湾口縁はあるが少なく、ヨコナデによる器面の凹凸が目立たず直線的に延びる口縁部が多いのは糸島地方の地域色である。これは布留系甕（甕D）の製作技法にA系統的な手法（甕A的な口縁部を一度作ってから甕Dに仕上げる）が埋没していることを示し、A系統土器群が残ることと対応する。また糸島産と思われる甕でも、色調や胎土、作りの精粗が異なる複数の群がある。これらについては検討課題とし、今後機会を設けてこの土器群については再度詳しく紹介したい。

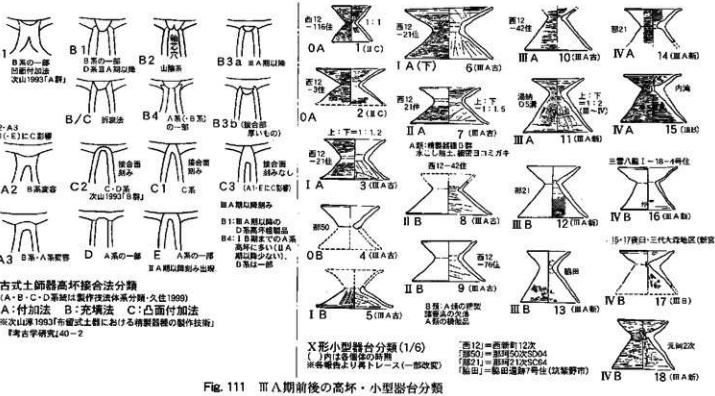


Fig. 111　Ⅲ A期前後の高坏・小型器台分類

・4区その他の出土土器

(Fig. 87)

Fig. 87－25はおそらく5世紀代の甕。重藤分類（前掲）の甕C類だろう。混入品か。26, 27はSX4011埋没後の溝の出土。26はX形小型器台0A類（くびれ部径はⅠA類的）。胎土は水簸精良、薄手の作りで、外面は摩滅し不明だが細密ヨコミガキか。5YR 6/4 ～ 7/6。福岡平野産か。Ⅲ A期古相。27は8世紀中頃の須恵器の高台付坏。

5）その他の遺物

Fig. 108は3区SX3041下層（縄文時代層）出土の木板。割板材で特に加工痕は残っていないが模様。板目取り。樹種同定はしてないが、推定広葉樹材か（図版23）。

Fig. 109はガラス小玉（図版23右列）。上下面が非対称で、横断面も不整円形。気泡が孔主軸に直交しているように見え、上下面が不整であり巻付法か。

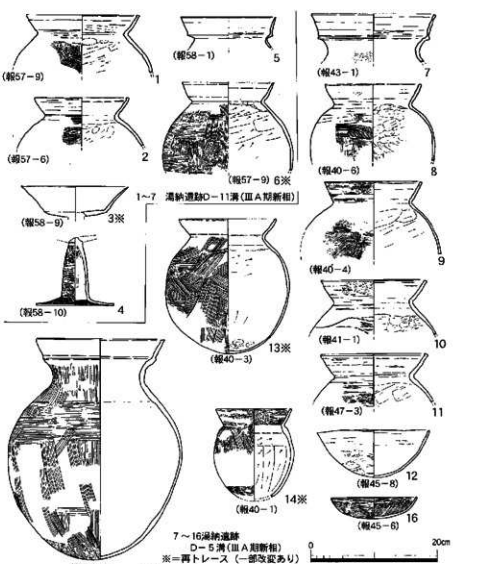


Fig. 112　SX4011と同時期の土器群 (1) (S=1/6)

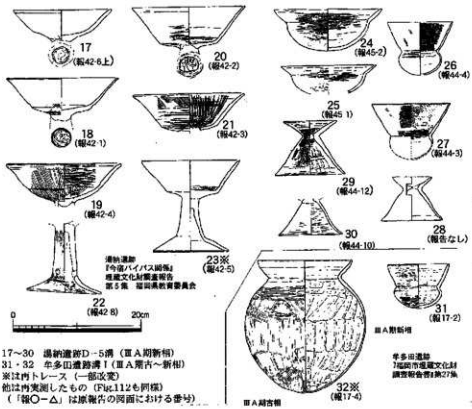


Fig. 113 SX4011と同時期の上器群(2)(S=1/6)

Ⅲ 調査のまとめ

1. 遺構群の変遷

元岡・桑原遺跡群の最初の本調査である第2次調査では、遺構密度は濃密ではなかったが、縄文時代以降の各時代の遺構や遺物包含層を検出した。調査成果から周辺の狭い部分の景観の変遷を想定したい。遺物としては旧石器時代からあるが、遺構としては、縄文時代晩期の包含層と土坑（堅果類貯蔵穴）が初現である。その後、弥生時代前期から中期前半の遺物が断続的にある。弥生中期後半から後期前半は断絶するようだが、後期後半から古墳前期にかけて大量の土器群がある。この時期の顕著な遺構は検出されなかったが、調査区の間や周囲に、周辺の削平以前には、地形の高台に集落があったはずである。2区と4区の西側、3区西半の北側などである。その後は古墳時代中期～後期にかけて断絶があるが、6世紀後半以降遺物包含層が形成され、8～9世紀には周辺に遺構がみられる。製鉄遺跡群が周囲に展開する時期である。その後、2区東半や3区の礫混じり包含層の状況から洪水や土石流があった可能性があり、その堆積後に狭小な谷水田が形成された模様である。以後、河川の氾濫などがありつつも、周辺は耕地としては断続的に利用され、近代以降に至るのであろう。

2. 出土土器の位置付けについて

本調査では、特に弥生後期後半から古墳前期中頃までの土器の良好な資料を検出した。詳しい検討はできないが、土器群の変遷について概略を述べる。3区SX3041上層（「Ph.1～2」層位）土器群は、厳密な一括資料ではないが、弥生時代後期後半（下大隈式）新相から古墳時代初頭（久住編年ⅡB期頃まで）の土器があり、弥生終末期（ⅠA～ⅠB期）において壺や大甕に糸島地方の地域色がみられ、またⅡA～ⅡB期には未だ在来系土体の土器群を見ることができる。これに一部重複し、後続するのが2区SX01上層土器群であり、主にⅡA期から古相の土器群がある。B系統土器がⅡA期前後に少数受容されるが、D系統（布留系）の受容と在地生産開始はⅡC期以降である。福岡平野中枢からは2段階、早良平野とは1段階、ⅡB期に一部受容する糸島平野中枢（三雲遺跡群）とは半段階の受容の遅れが元岡地域にはありそうである。ⅡC期でも主体はむしろA系統（在来系）であり、ⅢA期古相にやっとD系統が主体となるがA系統も残る。次にⅢA期古相の土器として4区SX4011のB群があり、ⅢA期新相の土器群としてSX4011の資料の大部分がある。ⅢA期の新古は、甕Dの口縁部などの微妙な変遷、小型精製器種の精粗の比率の差、さらにX形小型器台の型式や高坏Dの接合法の種類の変化により分けられる（Fig.111）。参考としてⅢA期新相の他の例を掲載した（Fig.112～113）。X形器台Ⅲ・Ⅳ式、甕Dの口長3.5cm以上の主体化高坏接合法A2, A3, B1, B3, C3の増加、小型丸底壺Ⅰg、粗雑なⅠe、Ⅰfの増加が指標である。

Ⅳ　自然科学分析報告

元岡遺跡２次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

元岡遺跡（福岡市西区福岡市西区桑原字戸山所在）は九州大学移転用地内の発掘調査で、大原川によって形成された沖積地から台地上にかけて立地する。これまでの調査で、全国最大級の規模となる30基以上の製鉄炉跡や、「祓具（はらいぐ）」を記した奈良時代の木簡などが出土している。

今回分析を行う２次調査では、奈良・平安時代の遺構・遺物が多数検出されているが、今回対象とするのはそれ以前のものである。７区では縄文時代晩期と考えられる貯蔵穴SK7002が検出され、その中からドングリ類が多数検出されている。検出されたドングリの種類を同定し、その中の一部で放射性炭素年代測定を行うことにより、遺構の時代観や当時の植物質食糧に関する情報を得る。また、貯蔵穴の覆土や掘り込み面となる層位の花粉分析と珪藻分析を行うことにより、当時の植生や遺構の埋積過程に関する検討を行う。また、SX3041（縄文時代晩期から弥生時代の遺物を含む落ち込み）では花粉分析を行い、当時の占植生に関する情報を得る。

2. 試　料

試料の詳細を表１に示す。この中から目的を考慮して試料を選択し、分析を実施した。またドングリ類については、100g程度あったが、ほとんどがドングリ類の細片と微細な植物片であった。この中で明らかにドングリの破片であると思われるもの（半分以上形が残っている個体）を抽出したところ、20g程度あった。この中から、種類の同定に必要な保存のよい個体を少量残して、残りを年代測定に用いた。

表１　分析試料一覧

番号	調査区	遺構名	層位	種別	項目		
					年代測定	珪藻分析	花粉分析	種実同定
1	7区	SK7002	最下層	種実片	○			○
2	7区	SK7002	最下層	土壌		○	○	
3	7K	北側東西トレンチ	黒色粘土層（縄文後期）	土壌		○	○	
4	3区西	SX3041(Cベルト)	2b層（古墳初頭）	土壌			○	
5	3区西	SX3041(Cベルト)	2e層（弥生後期後半）	土壌			○	
6	3区西	SX3041(Cベルト)	4層（縄文後期）	土壌			○	
7	3区西	SX3041(Cベルト)	7層（縄文中期～後期？）	土壌			○	

3. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料（種実）を水で洗浄して表面の異物を取り除く。乾燥、粉砕後水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返す。次に塩酸を加えて煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。水で塩酸を充分洗浄後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン３mℓ（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して３mℓとした）にシンチレーターを含むベンゼン２mℓを加えたものを測定試料とする。

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定する。なお、計算には放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer, K.（1992）、Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.（1986, 1988, 1991a, 1991b）などを参照する。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(4) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特長から種類を同定する。

4. 結　果

(1) 放射性炭素年代測定

測定の結果、2,820±110BP（PAL-919）の値を得た。なお、年代値は1950年を基点とした値、誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値を示す。

(2) 珪藻分析

分析の結果、SK7002では無化石であった。東西トレンチでは、貧塩不定性、pH不定性、流水不定性で陸生珪藻A群（伊藤・堀内, 1991）の *Pinnularia borcalis* Ehrenberg が1個体検出されるのみである。

(3) 花粉分析（写真1）

結果を、表2、Fig.114に示す。2次調査SK7002では、コナラ亜属の多産が特徴的で、ブナ属・シナノキ属・イネ科・カヤツリクサ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属も検出されている。一方北側東西トレンチ黒色粘土層では花粉化石の検出数は少ない。SX3041では、7層においてアカガシ亜属が多産し、それにシイノキ属が伴っている。その他の花粉化石については検出数が非常に少なく、特に草本類ではヨモギ属が検出されただけである。2b・2e、4層は花粉化石がほとんど検出されなかった。

(4) 種実同定（写真2）

試料中の種実はほとんど破片であったため、保存状態が良く完形に近いもの10個程度について同定を行った結果、イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）と同定された。果実は楕円形で、長さは1.5cm程度。先端部が残存しているドングリには、輪状紋が確認される。さらに柱頭まで残存している個体をみると、

柱頭の先端部が傘状になっており、外側を向く。また表面は縦の条が明色となって目立つ。なお、一部破損など保存の悪い個体は、輪状紋が確認されるなどアカガシ亜属の特徴を示すが、種の分類までは難しかった。これらの大部分は年代測定試料に用いた。

5. 考　察

(1) 貯蔵穴等からみた植物利用と古環境

貯蔵穴SK7002から出土したドングリ類の年代測定結果は、2820±110BPを示し、縄文時代晩期とする年代観と調和的である。ドングリは、保存状態が悪いので、確実に同定できる個体は少なかったが、同定できた種類は全てイチイガシであった。イチイガシは、生食が可能である点で他のカシ類とは異なることから、複数の種類を混ぜて貯蔵していたとは考えにくく、保存の悪いドングリ（アカガシ亜属）も全てイチイガシであったと思われる。イチイガシは、現在の九州地方の暖温帯林においても、主要な構成要素であることから、当時広く生育していたことが考えられる。これまで当社で扱った事例（大分県の龍頭遺跡など）などを参考にすると、九州地方の貯蔵穴からの出土種実はイチイガシが多いが、今回の結果もこれらと調和的である。一方、花粉化石をみると、貯蔵穴の最下層ではコナラ亜属が多産しており、種実遺体とは組成が大きく異なる。縄文時代晩期における九州地方北部の古植生をまとめた研究によれば、当時は照葉樹であるアカガシ亜属やシイノキ属を中心とした暖温帯林であったとされている（中村・畑中，1976；黒田・畑中，1979；Hatanaka, 1985など）。今回の貯蔵穴から出土した種実、SX3041の7層の花粉化石群集、別途報告した20次調査の池状遺構の花粉化石群集はそれぞれ上記の分析例に調和的である。しかし、落葉広葉樹ナラ類を主体とする貯蔵穴最下層の花粉化石群集のみが大きく異なっている。また、これまで当社で行った九州地方の貯蔵穴に関する調査をみると、花粉化石群集、貯蔵されていた種実、貯蔵穴の表面を覆っていた木葉の種類は一致し、採集地と貯蔵地が隣接していたと推定される場合が多い。九州地方北部の花粉化石群集変遷の中で、カシ類を欠きナラ類が主体の組成になるのは、先に挙げた文献によれば、最終氷期が終焉する1万3000年頃である。このことから、遺構の周辺にはこの時代の堆積層があり、この層が

表2　2次調査の花粉分析結果

種類	試料番号	SK 7002	東西トレンチ	2次調査 SX3041 2b層	2c層	4層	7層
木本花粉							
マキ属		—	—	—	1	—	—
モミ属		2	5	—	—	—	—
ツガ属		1	—	—	—	—	1
マツ属		—	3	—	—	—	2
スギ属		—	—	—	1	1	—
ヤナギ属		—	—	—	—	—	1
ヤマモモ属		—	—	—	—	—	1
サワグルミ属		3	2	—	—	—	—
クマシデ属－アサダ属		8	1	—	—	—	—
ハシバミ属		—	1	—	—	—	—
カバノキ属		3	—	1	—	—	—
ハンノキ属		7	2	—	—	—	—
ブナ属		19	8	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属		179	27				3
コナラ属アカガシ亜属		—	—	—	—	—	331
シイノキ属		3	—	1	—	—	63
ニレ属－ケヤキ属		1	—	—	—	1	3
キハダ属		—	—	—	—	—	1
アカメガシワ属		1	—	—	—	—	1
トチノキ属		2	—	—	—	—	—
シナノキ属		13	—	—	—		
ツバキ属		1	—	—	—	—	1
ウコギ科		—	1	—	—	—	1
イボタノキ属		1	—	—	—	—	—
トネリコ属		3	—	—	—		
ガマズミ属		—	—	—	—	—	1
草本花粉							
ガマ属			8	—	—	—	—
イネ科		78	55	—	—	—	—
カヤツリグサ科		31	12	1	—	—	—
サナエタデ節－ウナギツカミ節		60	93	—	—	—	—
タデ属		3	—	—	—	—	—
アカザ科		1	—	—	—	—	—
カラマツソウ属		9	6	—	—	—	—
キンポウゲ科		8	1	—	—	—	—
アブラナ科		3	—	—	—	—	—
ヨモギ属		93	63	—	—	—	1
キク亜科		5	3	—	—	—	—
タンポポ亜科		2	3	—	—	—	—
不明花粉		13	3	—	—	—	—
シダ類胞子							
イノモトソウ属		—	—	23	122	74	—
他のシダ類胞子		92	3558	29	88	11	6
合　計							
木本花粉		247	50	2	2	2	410
草本花粉		293	244	1	0	0	1
不明花粉		13	3	0	0	0	0
シダ類胞子		92	3558	52	210	85	6
総計（不明を除く）		632	3852	55	212	87	417

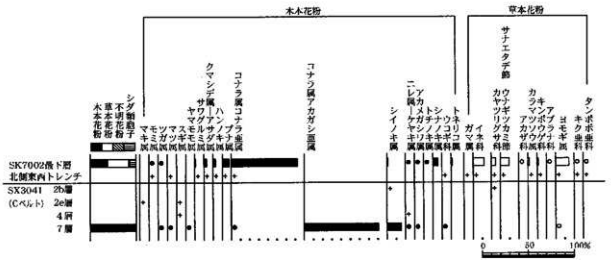


Fig. 114. 2次調査の花粉化石群集層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

削られて遺構覆土として二次堆積した可能性がある。一方、低地を好むクヌギなどのナラ類が貯蔵穴付近に当時生育し、多量の花粉が貯蔵穴内に落下すれば今回のような組成になるとも考えられるが、随伴する種類がほとんど落葉広葉樹である点からするとその可能性は低い。現段階では、この理由を決定づけることは難しいが、今後遺跡が立地する以前からの堆積層について連続的に花粉分析を実施し、群集の変遷を明らかにすることによって検討できると思われる。

一方、SX3041の化粉分析の結果をみると、7層を除いて花粉化石の保存が悪くほとんど検出されていない。この状況は貯蔵穴の掘り込み面となっている層位（北側東西トレンチの黒色粘土層）と類似する。SX3041は沼状落ち込みの大量廃棄土器溜包含層、北側東西トレンチは沼状堆積層とされている。花粉化石が検出されない理由の一つとして好気的環境下による酸化分解が考えられる。このことから、縄文時代後晩期から弥生時代にかけて、両地点ともに河川の影響が少なく、地表面は乾燥・安定化することが多かったことが推測される。

引用文献

原口和夫・三友 清・小林 弘 (1998) 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p. 527-600.

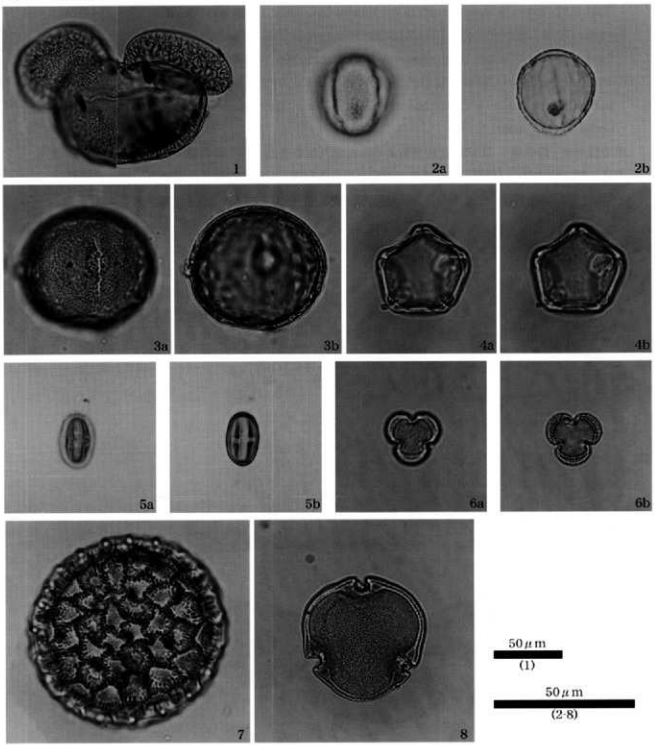
Kenichi Hatanaka (1985) PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B), 18, p. 29-71.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.

Krammer, K. (1992) PINNULARIA, cinc Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

写真1　花粉化石



1. モミ属（7区 SK7002：最下層）
2. コナラ属コナラ亜属（7区 SK7002：最下層）
3. ブナ属（7区 SK7002：最下層）
4. ハンノキ属（7区 SK7002：最下層）
5. シイノキ属（3区西 SX3041：7層）
6. ヨモギ属（7区 SK7002：最下層）
7. サナエタデ節－ウナギツカミ節（7区 SK7002：最下層）
8. シナノキ属（7区 SK7002：最下層）

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

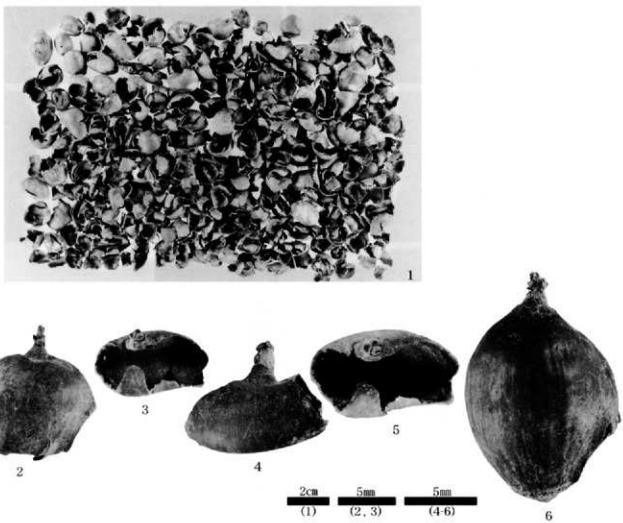
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von: Die Suesswasser-flora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

黒田登美雄・畑中健一 (1979) 花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷. 花粉, 13, p. 3-8.

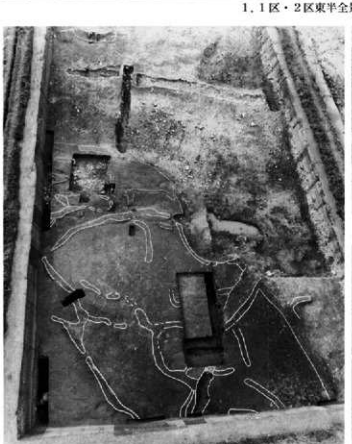
中村　純・畑中健一 (1976) 板付遺跡の花粉分析学的研究. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971～1974－」, p. 29-42, 福岡市教育委員会.

写真2　種実遺体

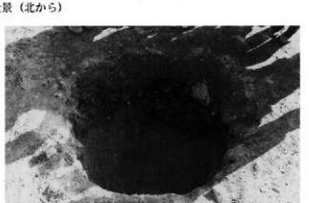


1. イチイガシ (SK7002：最下層)
2. イチイガシ (SK7002：最下層)
3. イチイガシ (SK7002：最下層)
4. イチイガシ (SK7002：最下層)
5. イチイガシ (SK7002：最下層)
6. イチイガシ (SK7002：最下層)

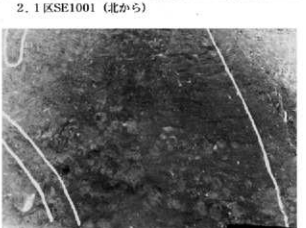
1．1区・2区東半全景（北から）



3．2区東半水田全景（東から）

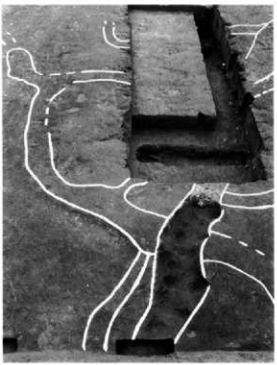


2．1区SE1001（北から）



4．2区東半水田北部水田面状況（東から）

図版2



1．2区東半水田中央東側・SD2002（東から）

3．2区東半南東隅Eトレンチ南壁土層（北から）

2．2区東半水田西側状況（南から）

4．2区東半Gトレンチ鉄滓出土状況（西から）

5．2区西半作業風景（西から）

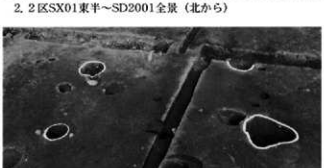
6．2区SX01Kトレンチ・Ⅲ区間ベルト土層（東から）

7．2区SX01Ⅲ区北側土層（土層③）(南から)

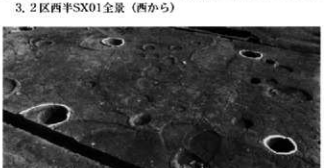
1．2区西半SX01全景（北から）

2．2区SX01東半～SD2001全景（北から）

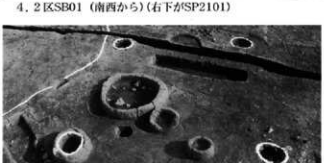
3．2区西半SX01全景（西から）



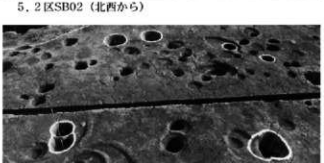
4．2区SB01（南西から）（右下がSP2101）



5．2区SB02（北西から）



6．2区SB03（北から）



7．2区SB04（北から）

図版4

1．2区SP2101ガラス玉出土状況（南東から）

2．2区西半SP2101土層（西から）

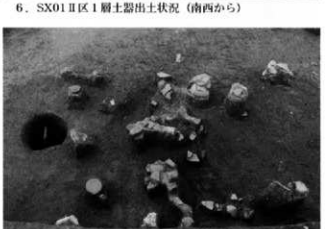
3．2区SX01Ⅲ区1層土器出土状況（北東から）

4．SX01Ⅲ区1層南西側土器出土状況（南西から）

5．SX01Ⅲ区中央ベルト北東隅土器出土状況（南東から）

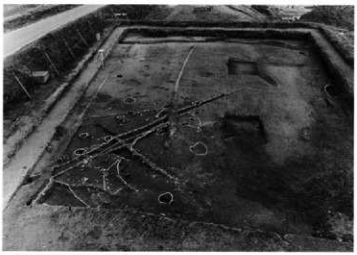
6．SX01Ⅱ区1層土器出土状況（南西から）

7．SX01Ⅱ区2層土器出土状況（南東から）



8．SX01Ⅱ区南西側・2－3層出土状況（南から）

1．2区SD2001全景（南から）

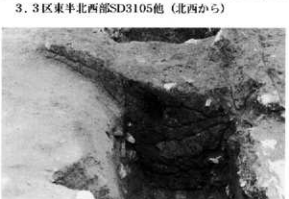


2．3区東半全景（西から）

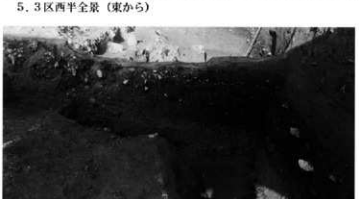
4．3区東半調査区西壁包含層土層状況（東から）

3．3区東半北西部SD3105他（北西から）

5．3区西半全景（東から）



6．3区西半SD3036Bベルト西側土層（西から）



7．3区西半SX3041Cベルト土層（西から）（崩落前）

図版6

1．3区東半SD3107全景（南から）

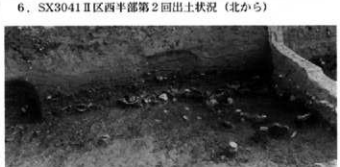
2．3区西半全景（西から）

3．3区西半SX3041Ⅱ区第1回出土状況（東から）

4．SX3041Ⅱ区西半部第1回出土状況（北から）

5．SX3041Ⅱ区中央前後第2回出土状況（南から）

6．SX3041Ⅱ区西半部第2回出土状況（北から）

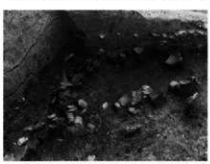


7．SX3041Ⅱ区中央～西半部第3回出土状況（北から）

1．SX3041Ⅱ区第2回土器出土状況(東から)

4．SX3041Ⅲ区第2回土器出土状況(西から)

5．同左（東から）

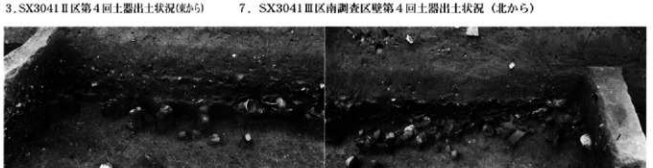


2．SX3041Ⅱ区東部第3回土器出土状況(北から)

6．3区西半SX3041Ⅲ区第1回土器出土状況（北から）

3．SX3041Ⅱ区第4回土器出土状況(東から)

7．SX3041Ⅲ区南調査区壁第4回土器出土状況（北から）



8．SX3041Ⅲ区西半第3回土器出土状況（北から）

9．SX3041Ⅲ区東半第3回土器出土状況（北から）

図版8

1．4区SX4011中央ベルト南側③区土器出土状況(東から)

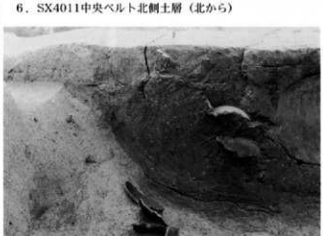
4．4区SX4011①・②区土器出土状況（西から）

5．SX4011中央ベルト北側②区土器出土状況（東から）

2．4区全景（東から）

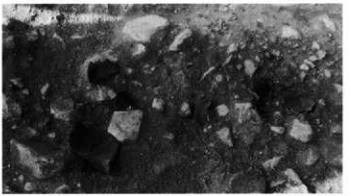
6．SX4011中央ベルト北側土層（北から）

3．4区SX4011中央ベルト南側③区土器出土状況（南から）



7．SX4011中央ベルト南側土層・③区下層出土状況(南から)

1．SX4011中央ベルト部西側土器出土状況（東から）



3．SX4011中央ベルト部最下層土器出土状況（南から）

2．4区SX4011中央ベルト部西側土器出土状況（北から）

4．SX4011陶質土器出土状況（南から）

6．SX4011南落込み土器出土状況（南から）

5．4区SX4011・9区流木・土器出土状況（北東から）

7．4区SX4011調査区南壁（南部落込み完掘，北から）

8．5区SD5102全景（北西から）

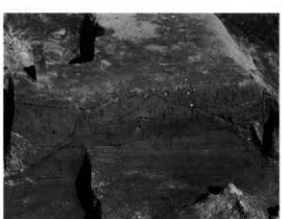
図版10

1．5区全景（西から）

2．6区全景（北西から）

3．6区東半水田全景（北から）

4．6区東半水田・SX6101全景（南から）



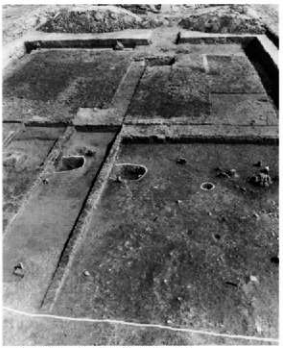
5．6区水田アゼ土層（土層①、西から）

6．6区SX6101出土状況（南から）

7．6区SX6101出土状況（東から）

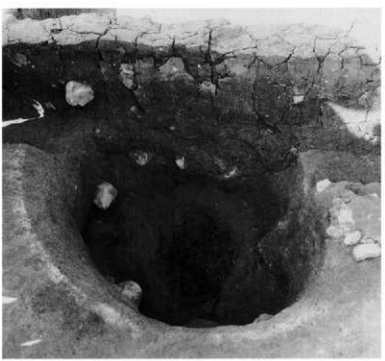
8．7区SK7002・ベルトA土層（南東から）

1．7区SX7071Ⅰ区出土状況（西から）



2．7区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区全景（西から）

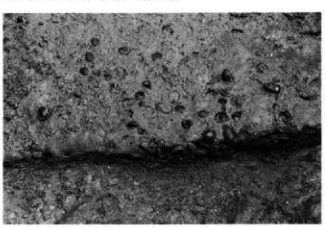
3．7区SX7071Ⅰ区出土状況近景（西から）



5．7区SK7002ドングリ確認状況（南から）

4．7区SK7002掘削途中状況（東から）

7．7区SK7001上部礫・土器落込状況（南から）



6．7区SK7002底面ドングリ出土状況（南西から）

図版12

1．7区SK7003（南から）

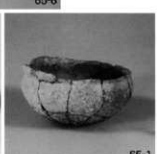
2．7区調査区北壁土層東側（南から）

65-6

64-12

66-4

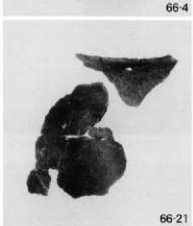
65-4



65-1

65-5

66-15



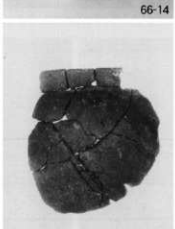
66-21

65-7

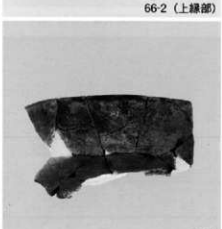
66-14

66-2（上縁部）

66-1



66-8



67-15

7区遺構写真／図65・66・67出土遺物写真

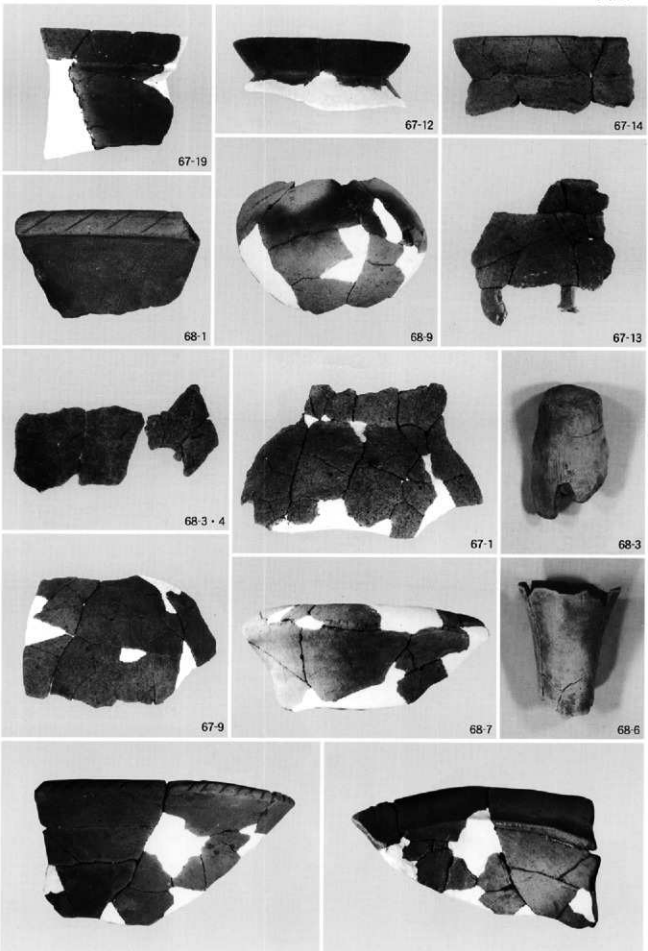


図67・68出土遺物写真

図版14

68-11

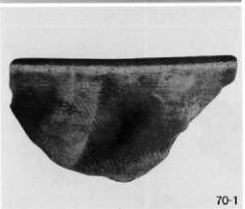
69-18

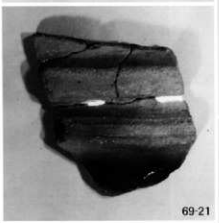
68-4

68-3

68-2

69-23


70-1


69-21

69-24

69-22

70-5

70-3

70-4

図68・69・70出土遺物写真

71-9

69-13

72-13

71-11

71-12

71-2

71-6

71-16

71-7

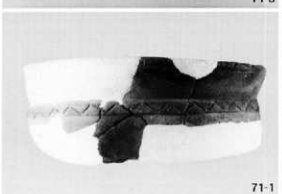
71-8

71-10

71-17

71-5

71-14


71-1

73-18

73-5（下部内面）

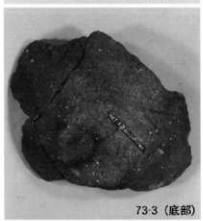
図69・71・72・73出土遺物写真

図版16

73-1（上縁部）

73-1（胴部）

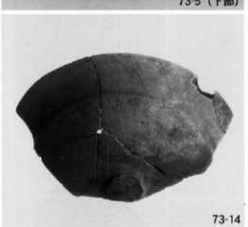
73-2（内面）


73-3（底部）

73-5（下部）

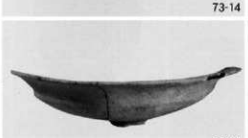
73-10

73-11


73-14

74-10（内面）

73-6


73-14

74-10

73-17

74-13

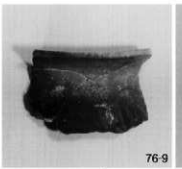
76-7

76-3

図73・74・76出土遺物写真

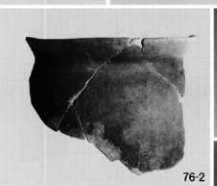
76-4

74-22


76-9

74-1

75-4


76-2

74-3

75-3

74-19

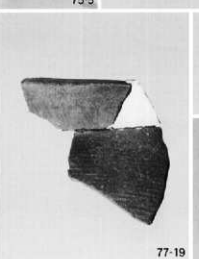
76-11

75-5

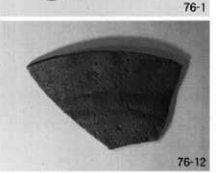
76-10

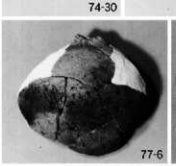
76-1

77-10


77-19

74-30


76-12


77-6

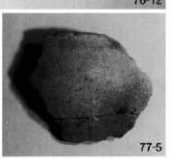

77-5

図74・75・76・77出土遺物写真

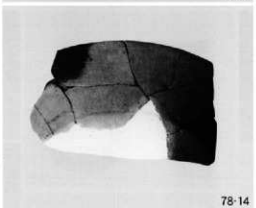
図版18

77-18

76-20

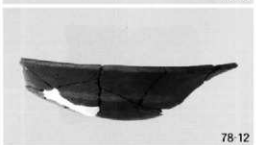
78-19

78-7


78-14

78-20

78-5


78-12

78-9

78-17

78-13

78-9（内面）

78-4

79-1

79-3

79-4

図76・77・78・79出土遺物写真

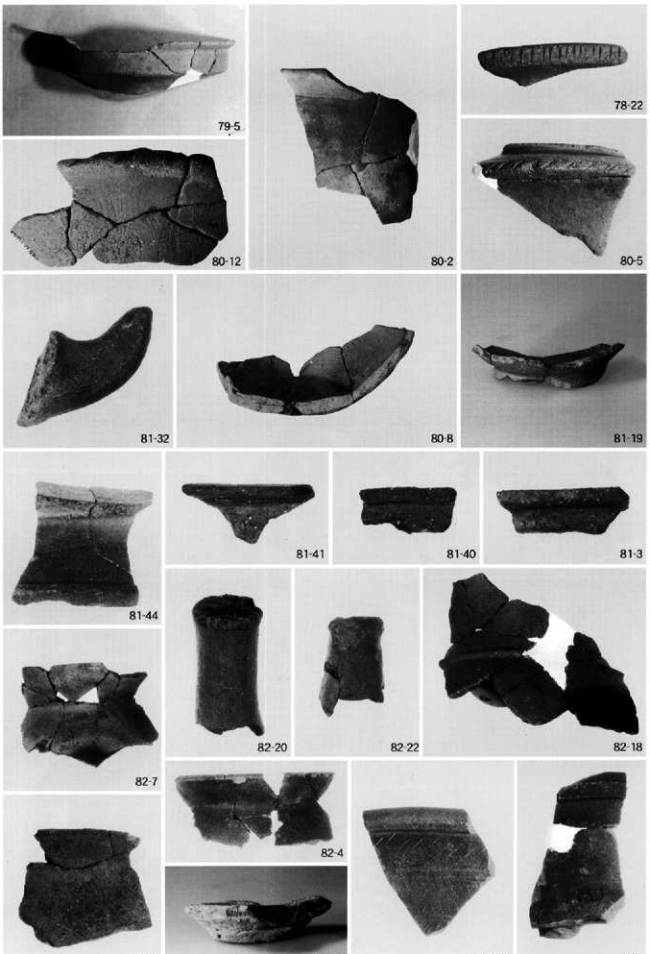


図79・80・81・82・83出土遺物写真

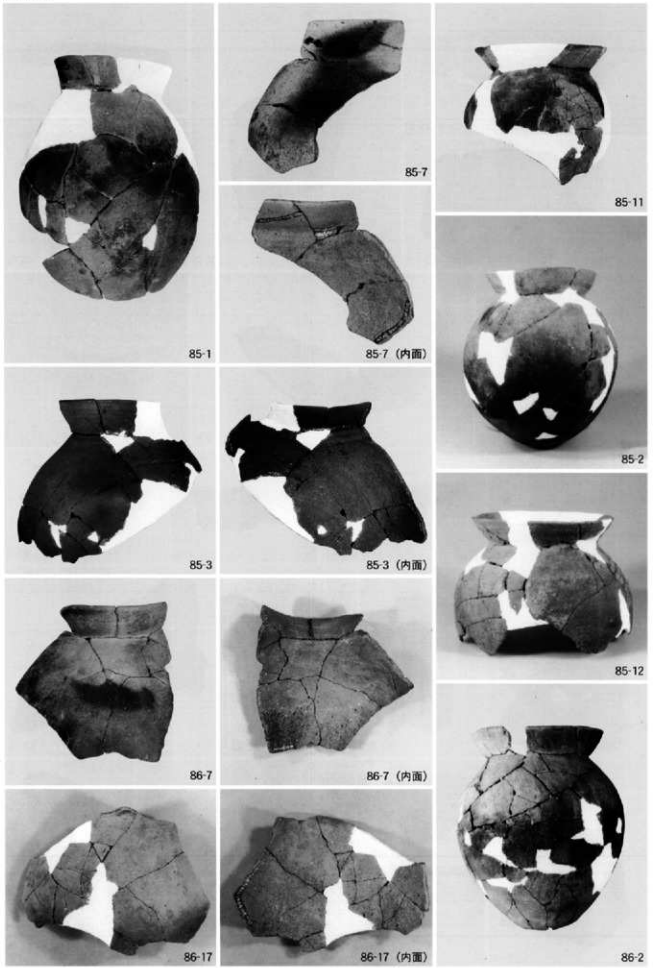


図85・86出土遺物写真

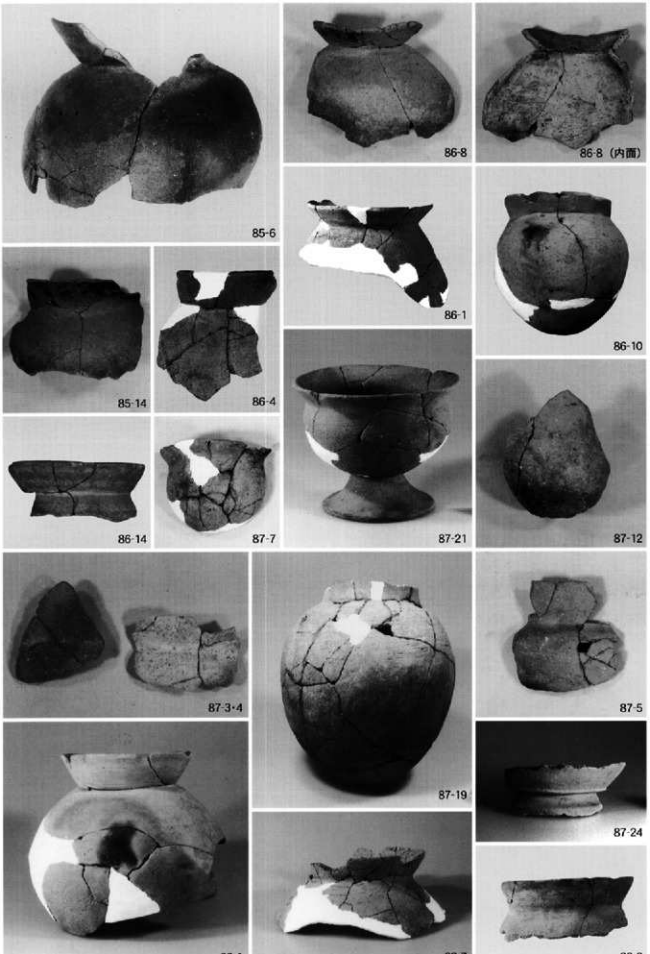


図85・86・87・88出土遺物写真

図版22

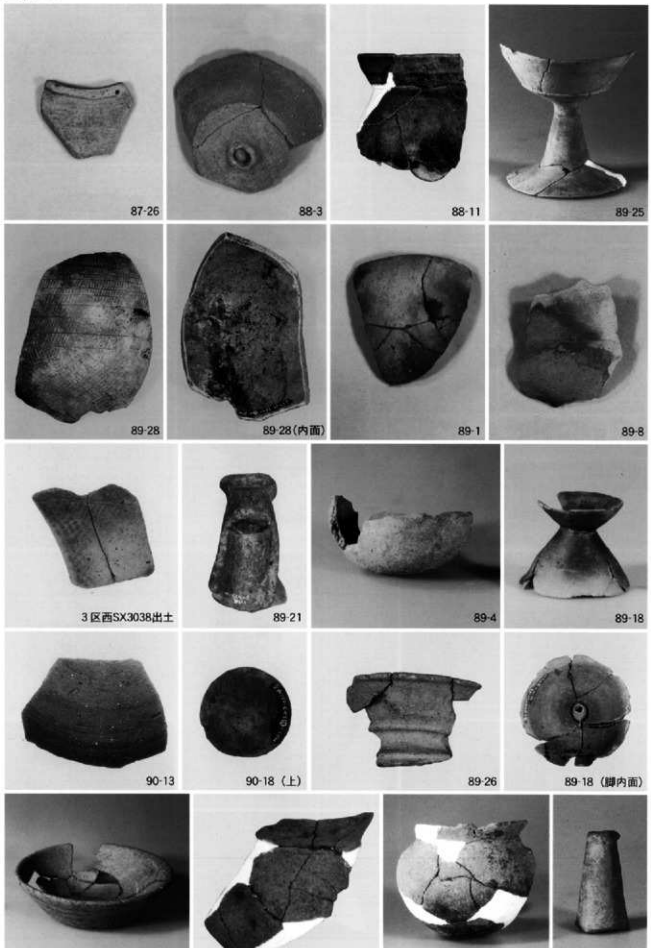


図87・88・89・90・92出土遺物写真

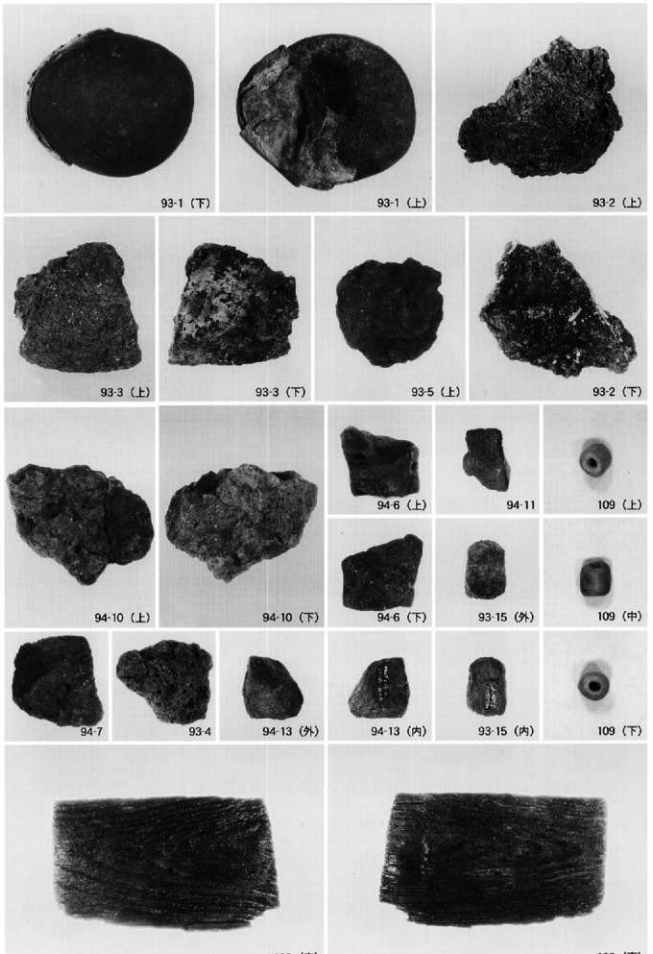


図93・94・108・109出土遺物写真

図版24

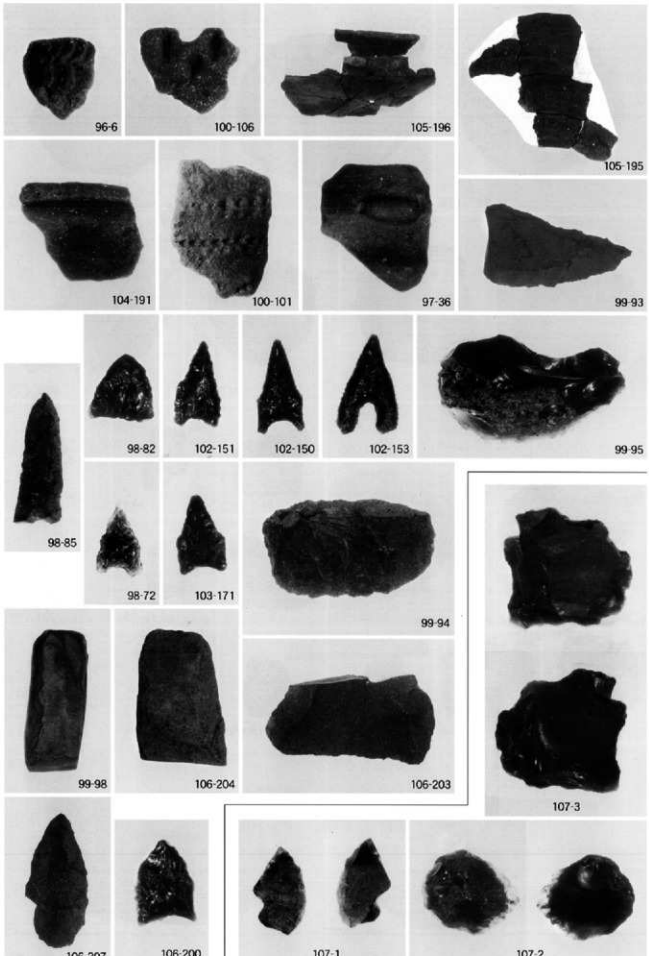


図95～107縄文時代～旧石器時代の遺物（縮尺不同）

福岡市埋蔵文化財調査報告書722集
九州大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告書
元岡・桑原遺跡群1
－第2次調査の報告－
2002年3月29日

発　行　福岡市教育委員会
（福岡市中央区大神1－8－1）
印　刷　㈱三陽印刷所
（福岡市早良区昭代1－16－39）